
ティエンランの娘

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ティエンランの娘

【Nコード】

N55660

【作者名】

まめご

【あらすじ】

遙か遠き昔、イーストエンド大陸の南、ティエンランに一人の王女が生まれた。

母に命を狙われ、父に虐待を受けた少女リウヒは謀反をきっかけに外の世界へと旅立つ。

右將軍、左將軍、踊り子、講師、擬似兄、村娘と脈絡のない面子で旅をする果てにリウヒが知りえた事とは。

ティエンランシリーズ第一巻。 T I E N A M Iより転載作品、一

部
改
稿。

序章 夕暮れ時

陽は遠く西へ傾き、歩く二人の影を間延びして落としていた。トモキは遊び疲れ弟の手を引き家路へと向かっている。

村は小高い丘の上にある為、上り坂をえっちらおっちら歩くと、地に這う長い自分も一緒になって動く。夕暮れ時のこの影がトモキは好きだった。背が伸びて大人になった様な気がするからだ。実際はまだ六つで大人にはほど遠いのだけれど。

長い坂道の途中、一人の少年とすれ違った。

瞳はまっすぐ前を向き、長い髪は高い位置で括られていた。高そうな衣を着ており、襟や袖には見事な刺繍が施されている。その瞳も髪も衣も帯すらも、すべて黒色で統一されており、なんとなく暗く陰気な感じがした。

見たことのない顔だ。村のものではない。歩き方も妙だった。全く隙がない。声をかけるのをためらう様な、周りの空気を排除している様な、そんな雰囲気をかもしだしている。彼はトモキたちに見向きもせず、そのまま真っ直ぐ東へと去って行った。

つい目で追って振り返る。

少年はもう小さな人影になっていた。速い。

太陽が山際にさしかかり、辺りを赤々と照らし始めた。遠くに見える都も、その先に広がる平地も、村への小道も、周りの木々も、遠ざかっていく少年の後ろ姿も。影がさらに伸びた。

「にいちゃん」

弟が手をひっぱる。

「早くかえろっ、おなかすいた」

「そうだな」

今日のご飯はなんだろう、三日連続で菜飯はイヤだよ。笑いあう二人は手を繋いで家へと向かう。

少年のことはすっかり忘れた。

遠い昔。

イーストエンド大陸の一つにテイエンランという小さな国があった。三方を山、一方を海に囲まれた美しい豊かな国だ。

大陸側は二つの国に挟まれていたが、おおむね良好な関係を保っていた。万一、攻められる事があるうとも小高い山々が自然の城壁となつて防いでくれる。

一方の海側は、貿易が盛んに行われ港が賑わっていた。が、防衛面は弱くしばしば海賊が出没した。

その海を左手に見下ろす山の中腹に、この国の宮廷がある。山地の形状を生かし傾斜になだらかに這うように建てられていた。

平地から小高い場所に位置する宮廷は、霧の発生する季節になるとまるで雲の中に浮かんでいるように見え、民たちは親しみと誇らしさをこめて「天の宮」と呼んだ。周りは堀で囲まれており、表玄関となる大門はその巨大さで見ると圧倒する。

宮廷の山裾には、整備された城下町が円形状に広がる。中央の大通りを挟んで四区ずつ、計八区に分けられ、民が住む住宅街、市場、商店街、色町、学問機関がある。

大通りは市街の中心をまっすぐ抜け、宮廷の大門と都の表門を一直線に結んでいた。その両脇を柳の木が行儀よく並べられている。地面はすべて石畳で整備されており、城下と宮廷を守るように白い堀に囲まれていた。

都を離れると、平地が広がり所々に村や町がぼつりぼつりと存在する。平地には町が多く、村は山地や海沿いにあった。

太陽は山際に沈みかけている。家々から灯りが灯り出した。

城下でも、町でも、村でも、夕餉の香りが漂い始め、遊んでいた子供たちは一斉に家路に向かう。

またね、明日ね、と友達に手をふって。

都から遠く離れたシシの村でも、今二人の兄弟が家に帰り着き、その扉を閉めたところであった。
陽はとうに山間に消え、辺りには夜の気配が漂っていた。

小さな妹 1

家の戸を開けた頃にはすっかり夜になっていた。

「ただいまー」

「おなかすいたー」

「遅かったのね」

母が居間から出てきた。その手には。

「赤ちゃん！」

弟が喜んだ声をあげて駆け寄った。トモキもつられて後を追う。わつと走り寄る息子二人に母は叱咤した。

「先に手を洗ってご飯を食べなさい。赤ちゃんは後からゆっくり見ればいいでしょう」

とたんにトモキの腹がグウとなった。連呼するように弟の腹もキユウとなる。兄弟は競い合うように、台所に立ちカメの中から水をくみ上げ手を洗う。鍋の汁ものを椀に注ぎ、櫃から飯をよそう。思わず顔をしかめた。予想どおり菜飯だった。不味くはないのだが独特の青味が嫌いなのだ。しかし文句は言えまい。箸を用意する。腹の虫が鳴いてせかすため大急ぎであった。

「いただきます」

すぐさま汁物を啜った。温かい液体が喉から体の中へしみていき、一息つく。子供たちが夕飯を食べている様子を、母は赤子をあやしつつ微笑みながら見ていた。あの赤ちゃんは一体、いつ生まれたのだらう。トモキのうちには父親がいない。父親がいなければ子供は生まれないのでないか。しかも母の腹は膨らんでいなかった。どこかから預かったのかな。

疑問は沢山あったが、今は食べることに集中した。

満腹になって、一息ついた二人は改めて赤子を観察することを許可された。

女の子だった。

一度に覗きこまれ、驚いたのか目を見開いて視線をさまよわせている。トモキと目が合い笑いかけると口を二、三度動かして笑い返した。その小さい手に、何となく人差し指を差し出すと、動いているのが不思議なほど小さな手がきゅっと握ってくれた。

すべてが小さくて丸まっこく、いい香りがする。ぷっくりとした頬を突いたり、まだ地肌が見える頭をなでたりして愛でた。小さなものは周りを和ませる。人間だろうが、動物だろうが、野に咲く花の芽であっても。さらに保護欲をかきたてる。実際、トモキはこの小さな赤子を世の中のどんなものからも守る気になっていたし、弟に至っては自分の下に妹ができたのである、有頂天になっていた。遊び友達の一人が、妹ができたといっていたけど、絶対その子よりもうちの方が可愛いよね。確信もなくそう言いあって母に笑われた。

「この子はどこからきたの」
先ほどの疑問を母にぶつけてみる。

「この子は遠いところからきたのよ」
非常に抽象的な答えに、子供たちは首をかしげた。意味が分からない。

笑顔で答えた母の目はしつかり語っていた。

それ以上聞くな、と。母には逆らうな、と。
だから山のようにあった疑問も呑み込んだ。好奇心よりも母への畏怖が勝った。

そんなわけで、この夜からトモキに妹ができた。

花のような小さな妹。

花びらが散る中を飛沫や風を従えて竜が天に向かい昇っていた。

黄金色に輝き、今にも動き出すように思えるほど精巧な彫りが施さ

れた扉を前に、黒い衣を着た少年は立っていた。音もなく扉が開き、一礼をして入室する。

重そうな冠を頂いた老人が一人、豪華な椅子に座っており、その横に髭を生やした壮年の男が立っていた。

手を胸の前で合わせ、ゆっくり片膝をついて跪礼をとる。

「シラギよ、王女を無事届けてくれたか」

老人が口を開いた。しわがれて覇気のない声。

「はい、快く引き受けていただけました」

「大義であった」

老人はうなずき、忌々しげに言った。

「やれやれ、イズミが気を病まなければこんなにややこしいことにならなかったものを。わしも初めての娘をこの手でできたかったわい」

「陛下、そのようにおっしゃってはイズミさまが不憫でございます。元はと言えばあの女が原因ではありませんか」

髭男が諫めると、陛下といわれた老人はホロホロと表情を緩ませた。

「シヨウギか、あれは可愛い女だよ」

その名は、シラギも知っている。色町で名を馳せていた遊女で、いつの間にか後宮におさまっていた。お忍び時に王が見染めたのだ、自ら乗り込んできたのだと真相は定かではないが、今現在、王の一番のお気に入りである。王妃はすでに亡くなっており、後宮には側室が二人いたが、一人は自己主張をしない大人しい女だった。

が、もう一人の側室、勝気で矜持の高い側室のイズミは違った。どこの馬とも知れない女が宮廷、しかも後宮に入るなど許せなかったのである。再三、王に訴えたがその願いは叶えられず、とうとう気がふれてしまった。

そんな中彼女は娘を出産した。そしてその赤子の首を絞めようとした。女官が慌てて諫め大事なかったものの、同じことが何度も起きた。ついには、赤子をかばった女官にまで切りつけようとした。

赤子は母から隔離して育てた方が良く、いっそある程度の年齢にな

るまで外に出してみてはどうか、という髭男：宰相の意で、遠縁の健康そうな女に白羽の矢を当てたのである。

宰相が口を開こうとした丁度その時、竜の扉の外から女官の声が出た。

「陛下に申し上げます、シヨウギさまのお支度ができたそうです」

「おほほ、そうかそうか、すぐ行くと伝えよ」

王は好色そうに笑うと

「双方、さがれ」

邪険に手を払った。もう心は後宮へと飛んでいるのであろう。再び礼をとり退出した。

廊下を歩きながら、シラギは深いため息をつく。宰相は黙ってシラギの肩を叩き、同意と慰めを現した。

黙って歩く二人の後ろ姿を、月の光が静かに照らしていた。

小さな妹 2

月の光がリウヒの寝顔を照らす。

ぐっすり眠るその小さな妹の顔を確認してから寝台に入るのが、トモキの習慣になった。朝は、リウヒが起こしにくる。すでに目が覚めていても妹が起こしにくるまで待つていたりした。

リウヒはスクスクと、それはもうスクスクと育った。母乳時は、よそで貰っているのだから母と共に不在が多かったが、大体はトモキや弟に囲まれて過ごしていた。感動したのは、リウヒが初めて言葉を発したときである。

「ニイ」

これをトモキは「にいちちゃん」と言ったと狂喜し、喜びのあまりリウヒを掲げ小躍りして、母と弟を呆れさせた。リウヒはなぜかトモキによく懐いた。それがうれしくもあり、優越すら感じた。妹一人ができただけで世界は輝き、ものすごい速さで過ぎていく。

ただ、惜しむべきは、母はリウヒが外へ遊びに行ける年になっても家から出したがらないことであった。あまり口外するなども言われている。残念だったし、不思議にも思ったが、なにか理由があるのだらうと納得するくらいには知恵は付いていた。

本当は、友達にも妹の話をしたり一緒に遊んだりしたくてたまらなかつたが、耐えた。そんな自分を大人だと思った。

家に帰れば、リウヒが転がるようにして出迎えてくれる。つたない言葉で一生懸命話しかけてくる。それがどうしようもなく可愛くて、「よそに嫁にはやらん」と発言し、母のため息と、弟の爆笑を頂戴した。実際トモキの溺愛っぷりは尋常ではなく、弟は不満を漏らしたが母は笑って、あなたが生まれた時もそうだったわよ、と言った。トモキは十一になり、小学に行くようになった。

読み書きなど簡単な教養を教えてくれる処である。年齢制限はなく、幼子から老人までいた。それぞれ村の小屋で、無償で先生が教えて

くれるありがたい場所である。学ぶ事や、未知の事を知るのは面白かった。遊び友達もほとんど小学に通っており、中には妹を連れてきている友達もいて、うらやましく思ったりもした。

ある日、帰宅するといつも出迎えてくれるはずのリウヒがいなかった。妙に静かで、家の空気が澱んでいる。いやな予感がする。居間から押し殺した鳴き声が聞こえた。

母が顔を手で覆って俯いていた。弟が泣きはらした顔で頂垂れている。苦しそうにしゃっくりを繰り返していた。妹はどこにもいなかった。

まさか。

「かあさん」

自分の声が震えているのに気がついた。喉が乾いて引き攣れそうだ。

「リウヒは」

「リウヒはね」

母も小さな声で答えた。

「遠い所に帰ったの」

弟が泣きだした。声をあげて。意味が分からず納得もいかず、何度も母に尋ねたが、母は何も答えてはくれなかった。家中を探した。家の庭や畑も探した。村中を歩き回った。弟もついてきた。きっとどこかで迷っているに違いない。迷ってぼくが見つけてくれるのを待っているに違いない。

が、結局妹は見つからなかった。

そんなトモキをみて、母がなんとも言えない顔で泣く。その顔を見るのが嫌で仕方なしに、無理やり日常に戻ることにした。それでもすべてが冗談に思えて、今にもその扉の向こうからリウヒがひょっこり出てきて笑いそうな気がする。

「にいちゃん」

ああ、でも。

妹はいない。もういない。遠いところへ行ってしまったのだ。

それ以外に世界は変わることなく、日常はただ淡々と過ぎて行った。朝起きて、小学にいった、勉強して、帰宅して、寝る。朝起きて、小学にいった、勉強して、帰宅して、寝る。繰り返している内にリウヒのことも、胸を絞るような喪失感も薄れて記憶の中に埋没していった。そして月日は巡り、トモキは十三になった。

宮廷の庭

日はとうに西へ消え、道は石畳から砂利へ、砂利から赤土へと変わっていった。

シラギは黙々と歩く。

同行者は、虫の音と三日月と手元のランタン。

七年前も同じ道を辿った。赤子を抱いて。

泣いたらどうしよう、粗相をしたらどうしよう、受け入れてもらえなかったらどうしよう、と不安を抱えて歩いたものだ。幸いな事に赤子は泣きも粗相もしないでくれたし、連絡がいていたのだろう、女は快く引き取ってくれた。

遠い昔のことのように思える。

そして、自分は今からまたその家へ迷惑をかけに行くのだ。己らの都合で。

気は重く、段々と沈んで行ったが、もう何も考えないようにした。考え始めたら、思い出さたくない事まで思い出してしまう。国王の皺がれた顔と、王女の暗く陰湿な顔が浮かんで消えた。記憶の底の暗い闇が、漏れ出してきて慌てて蓋を閉める。罪悪感はある。後悔もしている。でもどうしたら良いのか分からない。何も考えたくない。

深いため息をついて、思考を停止させた。歩くことに集中する。

どうせ、やらねばなるまい。では、何も考えずに事を進めればよいではないか。

トモキというその少年は驚きを隠さずに、口を大きく開けて停止していた。

当たり前だろう。

七年前に、ここに預けられた赤子が王女だった事、実母が亡くなった事、そして一緒に育ったというトモキとその弟を、王女の話し相

手として宮廷に召したいという事、ただし、一度宮廷に入ったら親の死に目以外は外に出られない事。

淡々と告げるとシラギは反応を待った。

母親は黙って下を向いている。その母の手を弟が握った。トモキは混乱しているようで、口に手を当てて机の角を睨みつけていた。

どれほど時がたったのだろう、目の前の茶もすっかり冷めた。

「ぼくはいかない。ここに残ります」

弟の方だった。目を伏せたまま、僅かな敵愾心を含んだ声で言った。トモキが、顔をあげてシラギを見た。

「ぼくが行きます」

大きな茶色い目で、見つめてくる。

「ぼく一人で、宮に行きます」

ただし、母と弟の生活は保障してください。お願いします。

そういうと、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。それは保障する」

これで任務は果たした。

「支度が出来しだい、宮廷を訪ねてきてくれ」

そして夜分に訪ねた事を再度詫び、家を出た。

玄関から見送るトモキの目線を背中に感じながら、坂を下る。

無事引き受けてもらったというのに、シラギの心は晴れずさらに曇っていた。

まっすぐこちらを見た利発そうな目。温かそうな家。母と弟。平和な村。

すべてを引き剥がして、あの宮廷に入れるのだ。魔物たちが住む所へと。

後ろめたさを感じながら、シラギは再び心を閉ざした。

大切なのは考えないこと。感じないこと。

もう何も感じなくなってしまうた。

本殿から後宮の北寮へと帰るとき、東宮の前の橋を渡る。小さな橋だが、そこから見える景色が好きだった。輝く星の下の灯る城下の灯り。闇夜に広がる小さな灯りはまるで地上に広がる星空のようだと思っていた。かつては。

最近はまだ見向きもしなくなった。たとえ見ても何も思わない。感じない。

マイムは宮廷の踊り子である。

生まれは南の貧しい村だが親に売られ、気が付いたらここで芸を仕込まれていた。

売られたのが色町ではなくてよかったと心から思う。いや、今もそんなに変わらないことをしているじゃないか。自嘲的に嗤った。

この仕事は性に合っていた。

宴や接待、王族の娯楽として楽師の奏でる音に合わせて踊り舞い歌う。または歌う。

衣装は比較的体に密着して、線が出るものが多かった。袖が長く、優雅さや美しさを現す。一振り擦れば、滑らかな曲線をかいてたなびくのだ。

より抜きの美女たちの中でもマイムはひと際目を引き、それを自分でも自覚していた。

美しい人は、自分の見せ方をよく知っている。またその事に努力を惜しまない。

事実マイムの踊りには花があつた。匂い立つような華やかさがあつた。見る者は魅了され喝采をあびた。

気が付けば、否その努力故に王宮で一番の踊り子になっていた。

今日もマイムは後輩たちを引き連れて、後宮へと戻っていた。

朝日が目に眩しい。手をかざして光をさえぎる。

思い出したように開催される大宴会。王とその息子たちや側近らが

繰り返る饗宴は、夜を徹して行われ明け方に終わるのだ。当初はひっそりと地味なものだったが、近頃は華美を通り越して醜悪になつてきたように思う。

あの女が来てから。

後輩たちがひな鳥のような声を上げている。可愛らしく、耳障りな声。大方、王の横にべったりと侍っていたあの愛人の事を噂しているのだろう。

「憤みなさい。そんな話は部屋に戻ってからにして頂戴」

振り返つてたしなめると、ひな鳥たちは首をすくめて大人しくなつた。

シヨウギ。

蔭では随分と言われているが、マイムは彼女が嫌いではない。

高貴な血など全く入っていない庶民、しかも色町の女が国の頂点に近いところまで上り詰めているのだ。貴族の者がそんな女に頭をさげ、膝を折る。ただ王の愛人というだけで。

同じ女として胸のすく話ではないか。天晴れの一言ぐらい、送りたくなる。

「あたしも王子の一人くらい、狙ってみようかな」

王子は三人いる。側室の息子たちだ。

シヨウギの連れ子がいるが、数のうちに入らない。継承権がないからだ。

そういえば王女もいた。公には出てきた事がないので、噂でしか知らない。なんでも東宮に住む大層な変わり種で、側近が手を焼いているそうだ。

が、王女なんてどうでもいい。世の中は結局、金と男が回しているのだ。

思考を元に戻す。

アナンさま辺りがいいかも。

快達な王位継承者の王子を思い浮かべ、未来の皮算表を計算しかけた時。

「マイムさま、あれ……」
部下の一人が指差した。

東宮の少し下った所に庭園がある。小さいながらも築山があったり、川が流れていたり、なかなか凝った造りだ。その庭石の影に人影が見えた。

動かない。不審に思っ近づいてみると、幼女が丸くなって石に抱きつくように寝ていた。

見間違いかと、一度目を閉じて開ける。

やはり幼女が寝ていた。

藍色のたつぷりとした髪の毛が、朝日を受けて輝いている。寝着の質からして、女官や侍女の子供でないことが分かった。

とりあえず、様子をつかがっている部下たちに先に帰るよう促す。

彼女らは素直に黙って動いたが、どうせ見えなくなったところで騒ぎ出すに違いない。再びひな鳥のように。

そして口は真綿のように軽い。いろんな尾ひれをつけて、夕には門番にまで知れ渡っているだろう。

いかんせん、この状況をどうしよう。声をかけてみようか。

「ちよつとー。ねえ、聞こえているー？」

動かない。

「起きなさいよ」

起きない。

少し腹が立って、その小さな体を揺さぶろうとした。

マイムの手が幼女に触れたその瞬間。

勢いよく手が跳ね除けられた。びっくりして目の前の幼女を見る。

その子は今まで寝ていたのかと疑うくらい、ぱっちりと目を見開いてこちらを睨みつけていた。

よほど眠れなかったのだろうか、隈がひどい。

「大丈夫？ ねえ……」

触ろうと、手を伸ばすとその分だけ後退して威嚇する。

まるで手負いの獣のようだ、とマイムは思った。安心させるため、

しゃがんで子供と同じ目線になってほほ笑む。

「きつと心配している人がいるわよ、おうちはどう？」

とたんに少女は困ったように目を伏せた。この子、しゃべれないのかしら。

「じゃあ、どこから来たの？」

質問を変えると小さな手が東宮を指した。

東宮。という事は。

この子は、あのvari種王女！

その時、足音がして男が姿を現した。こちらも眼の下につつすら隈ができていた。

「殿下、探しましたよ」

ああ、やっぱり王女！

少女は悔しそうに眉を寄せると、男とマイムを無視して東宮へと走って行った。

この男、知っている。マイムは王女を見送りつつ、男を観察した。国王の側近で、位は右將軍。と言う事はもちろん名門の出。体つきは武將らしく、肩幅が広くて鍛えられていることは一目で分かった。黒曜石のような瞳、風になびく黒髪は高い位置で一括りにしており、なかなかの美丈夫だ。

でも、陰気くさいのよねー。

太陽が照りつけるこの時期に、黒い衣を隙なく着こなしている男に向かつてマイムは思う。瞳も髪も黒いものだから、着るものくらい違う色にしたら良いのに。しかもこんな美人を目の前にして笑顔の一つも作れないなんて、無愛想にも程がある。

咳払いして、にっこり笑ってやった。

「王女さまでしたのね、とんだご無礼をお許してください」

一礼。簡潔に、しかし美しく。

「いえ、こちらこそ助かりました。礼を申し上げます」

男は無表情に腰を折った。

「では、わたくしはこれで失礼いたします」

花のような笑顔のまま、踵を返して歩き出した。腰をくねらし誘うように。

男はみな、必ずその姿に見とれた後マイムを呼びとめる。しかし今、一向に声はかからない。不審に思ってこっそり振り返ると、東宮に歩いてゆく男の後ろ姿がみえた。マイムは本気で腹を立ててしまった。

いけすかない男。

いけすかない女だ。

王女の後を追いながら、シラギは先ほどの踊り子を思った。

身に纏っていた薄桃色の衣装は体の線を強調して、胸元が大きく開いていたため、素肌がこぼれ見えた。太陽を受けて光り輝く金色の髪は美しく、しぐさや笑顔に華やかさがあつた。

だが、ああいう女は笑顔の下で何を考えているか分からない。たいがい、男の品定めか、悪口か、どう媚を売るかや引き出せる金を計算しているのだ。関わり合いたくない。

シラギは女性不信だった。というより人間不信だった。興味すら無い。

友人といえる人物はいなかったし、必要なかった。人との中に生まれるしがらみが面倒くさい。それならば、いつそ一人でいた方が気楽だ。

元々そういう性格なのだろう、小さい頃から友達と遊んだ記憶がない。常に壁を作った。人間、壁をつくられると外のは入ってこなくなる。シラギの壁は非常に堅牢だったし、入ろうとしたものもいかなかった。たまに果敢な女官や貴族の娘が挑んだが、あっさりと跳ね除けられた。

目の前を歩く少女も、自分とは比べられないほど高い壁をつくって

いる。その一因は自分にもあるのだ。

朝餉の為に部屋へ戻るのだろう王女の後ろ姿をみて、シラギはため息をついた。黙々と歩を進める小さな体は全身でシラギを拒否している。

その時、女官が呼んだ。

「トモキサマという方が大門においでです」

再会

トモキは初めて見る宮廷に圧倒されていた。

大門の前で、あんぐりと口をあけて上を仰ぐ。

中央に鎮座するのが本殿。平屋造りに屋根は銀色瓦におおわれ、日を受けては燦然と輝く。それを支える朱の柱は大人が三人で抱えてやっとなほど大きかった。棧にはびっしりと彫刻が施され、朱、黄、緑を基調とした色が彩られており匠の業を見せつけた。王はここを居住とし、政を行う。

本殿の右側に位置するのは、側室、その子供たちなど王の一族が暮らす後宮。東宮、西宮、南宮、北宮に別れ、傾斜に立つにも関わらずそれぞれが小山となっており、まるで島のように独立している。その間を小さな庭園や、山から流れる滝が雅を添えていた。本殿と各宮は、すべて小さな橋と階段で複雑に結ばれ、後宮に仕える女官や侍女たちが住まう棟がぐるりと円形上に囲んでいる。この棟を北寮と呼ぶ。

丁度、本殿をはさんで後宮の間逆に建つのが、大臣や大老など上位官位が暮らす住宅群。こちらは地形のまま、ずらずらとふもと近くまで続いている。それが途切れると、ふもとまでは段重ねの空中庭園があった。石壁に縁取られた園は、人工と自然が見事に融合され小鳥のさえずりが絶えず響いている。その住宅と庭園を囲み、官に仕える侍者たちの棟があった。こちらの棟の名は南寮。

本殿の正門から大門までは、巨大な階段がのびていた。正面から見ると、きれいな台形になっていることが見て取れる。

これが「天の宮」か。

トモキは開きつばなしの口を閉じた。

城下町に入った時から、違和感があったのだ。街ゆく人はみな、品の良い身なりをしていて優雅に笑いさざめいていた。自分の衣を見

る。一張羅のはずなのにみずばらしく見えた。道は石畳である。初めて踏みしめる感覚に、歩き方までおかしくなった。

やっと、宮までたどり着いたと思ったら、その迫力に小さくなってしまふ。

恐縮しながら門番にシラギへ取り次いでもらえるよう頼み、しばらく待った。

リウヒがこの中で待っている。兄のぼくを呼んでくれたんだ。

トモキはそう思っていた。

きつと、慣れない宮廷生活で大変なのだろう。実母が亡くなって、悲しんでいると聞いた。一人ぼっちで寂しい思いをしているのだろう。リウヒがトモキの元から消えたのは、トモキが十一、リウヒが五つのおきだった。

あれから二年しか経たないのに、すっかり記憶の彼方へ押しやっていた。

嫌な事は思い出さないよう、記憶というものはできているのかもしない。

ぼんやりとそんな事を思っていると、遠くからシラギがやってくるのが見えた。

「待たせてすまない」

「いえ」

連れ立って、門の中に入る。

目の前に広がるのは、どこまでも続く長い階段。本殿までいったい何段あるのだろう、頂上は遙か遠くて雲の上にあるのではないかと思った。

「あの、シラギさま」

トモキは恐る恐る尋ねた。

「まさか、この階段をのぼるんじゃないかあ……」

「登らなければ、中に入れまい」

シレっと返され、トモキはがっくりとうなだれた。

ようやく本殿の正門下についたのは、日がだいぶ高くなつてからだ。息も絶え絶えのトモキに、汗一つ流していないシラギが、体力をつけた方がいいな、と忠告した。そんなの言われなくても分かつている、と内心膨れたが、無言で頷いた。

「さて、これからの事だが」

再び歩きながら、シラギがいう。

「まず、第一に着替えてもらう。それから、陛下へご挨拶。その後、東宮に行つて、殿下にお目見えだ。あとは北寮に君の部屋を用意したので、そこで休むがよい。相部屋で申し訳ないが。何か質問は」「ええと、あの、殿下つて誰ですか？」

シラギは少し黙った。

「リウヒ王女の事だ」

ああ、そうか。リウヒは王女だった。トモキは頭をガリガリと掻いた。

言われるまま着替えを済ませ、再び歩き出す。初めて着る絹の感触にトモキはうれしさを隠せなかった。体をとろりと包み、ひんやりとして気持ちがいい。綿とは全然違う。襟や袖には、細かい刺繍が入っている。お金持ちの人つて、いつもこんなの良いものきているんだと思つた。

シラギは黙々と歩く。途中、あそこがどこそこに行く道で、など説明してくれたが、浮ついていたトモキの頭の中には入らなかった。

はやくリウヒに会いたい。ぼくの小さな妹に。

その内、庭園にでた。

中央やや右寄りに小さな池があり滝があり、川が緩やかに流れている。

その川沿いと、いたるところに様々な木が植えられている。緑が生い茂り、花が咲き乱れていた。

大樹の下に、華やかな一団が見える。

シラギについて、そこへ向かつていった。

中央に、豪華な衣をまとつた老人がいる。肌はしわがれており、幾

日も水をもらっていない土を連想させた。その老人を膝枕している女性がいた。老人の口に酒を注ぎ、こぼしては大笑いしている。美しいが過剰なものを乗っけているような、変な感じがした。たとえば濃い化粧とか、大仰な簪だとか、重ね着しすぎた衣だとか。

二人の周りを大勢の女官が控えていた。楽師が音を奏でている。

「御前失礼いたします、陛下」

シラギが手を重ね、膝を折った。

トモキもそれに倣う。

「わが宮に、新しい臣が入りましたゆえ、ご挨拶をと思いご機嫌を伺いに参りました」

トモキは何も言えずただ頭を下げる。

「つきましては、リウヒ王女のもとへ就けさせたいのですが、よろしいでしょうか」

「よいよい、好きにせい」

老人はどうでも好きそうに、手を振った。

シラギと共に一礼をして下がる。後ろから女の嬌声が上がった。

「なんですか、あれは」

思わず、前に行くシラギに聞く。

「我が国王と、その愛人さまだ」

「あれが……」

田舎者といえど、トモキも知っている。シヨウギの名前は、民にも広がり概ね好意を持たれていた。貴族を跪けた色町上がりの女。でもあんな人だったんだ。いい感じの人ではなかったな。

本殿からさらに橋を渡り、宮を渡り、階段をのぼり、また橋を渡った。迷路のようだ。

そうこうしている内に東宮へ着いた。

いよいよ、対面である。どれだけこの日を夢見たことか。

扉が開く。

そこにいたのはトモキの知らない少女であった。投げやりに椅子に座り、脇息に肘をつけて顔を預けている。王女らしからぬ行儀の悪

さだ。ぼんやりと外をみており、こちらを見向きもしない。シラギが再び、手を重ねて膝をつき礼をとる。何かを言っている。

が、トモキは、呆然と目の前の少女を見つめるだけだった。藍色の髪は簪一本も刺さっておらず、結ってすらいなかった。衣の襟は、みっしりと細かい刺繍が施され高級なものであるのが見て取れる。

その少女の顔には表情はなく眼のふちに濃い隈があった。顔色も悪い。青白くてまるで幽霊のようだ。

トモキをちらりと一瞥したが、何の反応もしなかった。

シラギがこちらを睨んでいる。慌てて、跪礼の形をとったが頭はまだまっ白だ。

気が付けば廊下に出ていた。頭は混乱したままだった。

あれは誰だ。妹は、リウヒはどこだ。ここはどこだ。

「大丈夫か」

体中に大量の汗をかいていた。多分顔は真っ青だろう。

「シラギさま、リウヒはどこなんです。あの子は誰なんです」

思わずシラギの胸倉をつかみ詰問していた。

シラギが、ゆっくりとその手をほぐす。

「あの方が、リウヒ王女だが」

嘘だ。

「間違いなく一緒に君と育った方だ」

嘘だ嘘だ。トモキはそのままズルズルとくずれ、床に突っ伏した。

ぼくは悪い夢でも見ているのだろうか。

呆然としたまま、これから暮らす棟の部屋へと案内されシラギと別れた。

扉を開くとドドウと本が雪崩れてきた。

「うわあ！」

咄嗟のことに抵抗できず、直撃を受ける。立ち上がるうともがいたものの、意外と重くてしばらく一人で格闘していた。

「いやあ、ごめんごめん。もう来たんだー」

香気な声が降ってきて、本の隙間からのぞくと丸いオヤジが頭をかいて笑っている。

「今日から君と一緒に暮らすカガミです、よろしくね」

丸い手を差し出された。握手のつもりだろうが、その前に救出してくれないか。

本の海から脱出し部屋に入って、驚いた。いたるところに本の山が築かれており、その隙間を縫って進むしかないのである。しかも、トモキの場所は己の寝台の上だけという情けなさであった。

部屋は思ったよりも広くて、大きな窓がついていた。薄暗いのは多分、窓をふさいでいる本の山のせいだろう。あとは分からない。すべて本に埋もれている。隙間からさす光に、塵が舞ってキラキラしている。

カガミがお茶を淹れてくれた。器用に山の隙間を縫って持ってきてくれる。

「ありがとうございます……あの、これは……」

「お茶だよ。ああ、そうか。君は今までお茶を飲んだ事がなかったんだね。まあ、一服どうぞ。そんなに高いものじゃないけど、おいしいよ」

恐る恐る、一口すすする。びっくりするくらいおいしかった。香り高い黄金色の液体は、喉を通るたびに心を落ち着かせてくれた。

「カガミさんは、何をやっている方なんですか」

「ぼく？ ぼくはねえ、歴史学者なんだ」

目の前の、本の小塔に腰かけたカガミはにっこり笑った。なかなか愛嬌のある顔立ちだ。

丸い輪郭の顔に、小さな目がちょこんとついている。赤い頬は見るからに健康そうで顎は無精ひげに覆われていた。頭は不思議な髪形をしていて天辺の方は無毛なのに、左右の白髪を伸ばして無理やり中央に集めて括っていた。しかし数束は力尽きたのか、ほつれ垂れている。それはなんとなく哀愁を漂わせていた。腹はぼつてりとせ

り出しており、針でつつけば破裂しそうだった。

「歴史学者さんって、王宮でどんなことをなさるんですか」

「教師。王子さんたちや王女さんなどに」

「ここにこ笑いながら答える。」

「もともと、ぼくはね、大学で教えていたんだ」

トモキはお茶を吹いた。

「学問の最高機関じゃないですか！」

この国の教育制度として、まず小学がある。どの村にもあり、どんな年代のものでも受けられる。期間は大体一年くらいだ。主に読み書き、簡単な計算を学ぶ。それを卒業すると中学に入学できる。

小学は無償だが、中学からは有料。学ぶことも専門的になってくる。国語、歴史、数学、礼儀、馬術など。期間は6年間。裕福な者や貴族が多いため、民は敷居が高い。また大きな町にしかない。

そして大学。学問の最高権威である。まず、入るにも試験があるし、卒業するにも国試がある。ここを卒業できたものは選り抜きの人材として、主に宮廷に入る。位を頂けるのである。ただし、約束された輝かしい未来とは引き換えに狭き門であるため、また入学金に莫大な費用がかかるため、民には全くの無縁であった。故にこの国の上官は大卒者で固められている。ちなみに大学は都にしかない。

その大学で教師をしていた人間が目の前にいるのだ。というより同室だ。

トモキは、勉学に対して憧れをもっていた。小学を卒業して、本当は中学に進みたかったのだが、金がかかるため断念したのだ。小学で講師を手伝いつつも独学で学んでいたが、限度があった。

だから、本がこんなにあるのか。

紙は貴重品である。本など、村に十冊ぐらいしかなかった。むさぼり読んでやる。ひそかにトモキは決意した。

「うん、王族の講師陣は大学の教師って昔から決まっているからなんてうらやましい。民にとって学問は贅沢だというのに。」

「今日は、疲れたでしょう、ゆっくり休みなさいよ」

確かに疲れた。壮大な宮廷、国王と愛人、暗い目をした陰気な少女。カガミはじゃあ、また後でねと言って山の中に消えてしまった。トモキは寝台にごろりと寝そべてみた。妙に柔らかい蒲団に現実感がわかなかつたが、いつの間にもやら寝入ってしまった。夢の中に幼いリウヒが出てきた。

「にいちゃん」

あどけない笑顔で呼んでいる。

閉じているトモキの目から、涙がこぼれた。

翌朝。

カガミに起こされた。

昨日は君、すぐに寝ちゃったでしょう。水を浴びておいで。あと朝餉をとりに、後で一緒に食堂に行こうよ。

朦朧とした頭で歩きだす。即、本の山にぶつかって転げた。

トモキらが住む棟は、北寮といい後宮に勤める女官や侍女、踊り子などが住んでいるらしい。その中に食堂もあった。盆をとって自分の好きな物をとる形で、田舎育ちのトモキが見たことのないような御馳走が並んでいた。

「お、女の人が多いんですね」

「そりゃ後宮に仕える人が多いから。反対側の南寮は男の人が多くてむさくるしいけどね」

「ぼくはこっちの方がいいな」と目の前のオヤジがのんびり茶を啜った。

カガミはこのままりウヒの部屋へと向かうらしい。自分の仕事は、リウヒの話し相手である。ということ、一緒について行った。

扉を開けると誰もいなかった。部屋の中は無人だった。

呆気にとられるトモキの横で、カガミは仕方なさそうに笑う。

「ああ、また失踪しちゃったねえ」

トモキには理解できない。

「ええと、どういうことですか」

聞けば、リウヒは勉強が嫌いでしょうっちゅう行方をくらませるらしい。その度に、シラギや世話係の侍女やらが探し回っていた。が、食事の時間になるとちゃっかり戻ってくるため、最近では大騒ぎすることもなくなつたという。

「勉強は、生きていくために必要なもののなにね」

悲しそうにはほほ笑むカガミの横で、トモキは猛烈に腹が立った。学問の権威が、専属教師としてついているのである。それを、「勉強嫌いだから」という理由だけで投げ出すなんてとんでもない。勉強したくてもできない者たちに、申し訳ないと思わないのか。

「探してきます！」

叫ぶなりトモキは駈け出した。

「元気だしなさいよ」

カガミの呑気な声が降ってきたが、トモキは食堂の机に突っ伏したまま、顔を上げられなかった。

恥ずかしさと情けなさで居たたまれなさで。

向かいの席では、カガミが夕餉を食べている。

リウヒを探しに行ったものの、自分が迷つたのである。

「すみません、ここはどこですか」

と何回聞きまわつたことだろう。やっと東宮にたどり着いたときは、もう夕方だった。

リウヒは昼には帰ってきて、昼餉を食べた後は、部屋で大人しくしていたらしい。

自分は方向音痴ではない。宮廷が複雑すぎるのだ。まるで迷路だ、嫌がらせか。

「まずは、知ることが大事だよ」

「どういう意味ですか」

顔をあげてカガミをみる。

「さあね、自分で考えてみなさいよ」

オヤジは、ずずつと汁物を啜りながら言った。

「トモキくん、ご飯たべないの？ その肉もらつていい？」

あまつでさえ、トモキの飯にも手を付けようとする。

一日中走り回った拳句に、昼餉も食べていないのだ。取られてたまるか。あわてて盆を取り上げ、飯をかきこんだ。

「残飯処理法改正案」

思わず書類を壁に叩きつけてしまった。

ため息をついて、背もたれに勢いよく身を沈める。目頭を押さえると、目の奥がチカチカした。

なんだか、なし崩し的にいろいろなものを押し付けられている気がする。

シラギは再び大きなため息をついた。誰だこんな書類をこちらに回したのは。

自分の位は右將軍である。軍を統べる役職である。他にもなすべきことは沢山あるのに、このところ雑用が山のように増え、比例するように睡眠時間が削られていった。

あの女のせいだ。

あの女がくるまでは、国王は政務に励んでいた。今は昼間からだらと遊んでいる。朝議は寝ている始末である。しかし、臣下に諫めるものはいない。みな、見て見ぬ振りをしているだけだ。

昔の王は賢君であった。そう大老たちは嘆く。昔はよかつたと。あのシヨウギが悪いのだと。ただ、嘆いて懐古するだけである。少しでも現在、未来を考えればよいのに。昔の武勇伝や思い出話を語り、今を批判するだけで、満足しているだけである。行動を起こすより思い出に浸る方が楽しいのだ。

上が緩むと下も緩む。

大臣たちは政務を投げ出し、権力争いに夢中だ。外では賄賂を公然と要求する奸臣が蚤のごとくはね回り、叩き潰してもわいてくる。それでも、なんとか国は機能している。三百年に及ぶ年代が基盤になっっているのと、ここのところ続く豊作、他国がそれぞれのお家事情で大人しいからだ。偶然の幸運が積み重なっているからに他ならない。どこかが綻びれば、あっと言う間に潰れてしまうだろう。

あの女のせいだ。

新しい左将軍が誕生したことは知っていた。銀髪の優男。後宮に頻繁に出入りし、シヨウギのお気に入りとの経歴不詳の謎の男。よくあいつらが認めたものだ。言葉を交わしたこともない。

あの女が来てから、すべてが狂ってきた。

シラギは額に手を当てて考える。

いや、それだけではないな。一番悪いのは王だ。もっと性質が悪いのは、われわれ臣下だ。

諫める立場にありながら、知らない振りをする。

知らない振り。その方が楽ではないか。誰だってそうだ。自分だってそうだ。すべての感情に蓋をして、何も考えないようにする。

やめよう。考えるのはよそう。どんどん深みに嵌まっていく。ただ、与えられた仕事だけをこなしていけばいい。

投げつけた書類を拾おうとした時、政務室の扉が叩かれた。

「トモキです」

一礼して、少年が入ってくる。心なしか鼻息が荒い。

もしかして、もう弱音をはいて帰りたい、とか言い出すのではないだろうな。シラギは訝った。王女と再会した時のトモキの動揺は尋常ではなかった。

「宮には慣れたか」

「みなさまによくしていただいております」

お願いがあるのですが。と、トモキが切り出した。

「宮廷の地図がほしいのです」

「地図？」

驚いて聞き返す。

トモキの説明をきいて、シラギは思わず微笑した。そんな自分に驚く。笑うことなど随分と久しぶりの事だ。

「分かった、あとで届けさせよう」

「ありがとうございます。あと、殿下の教師をしている方々にもお会いしたいのですが」

頷いて了承する。

「それも、手配しておこう。ちなみにわたしは剣の指南をしている」
トモキはちよつと笑って、そうなんですか、と言った。

「君に期待して申し訳ないが、よろしく頼む。何かあったらわたしの名前を出してくれ」

はい、と目の前の少年が気持ちのいい返事をした。

「すみません、あともう一つ。ぼく…じゃなくて、わたしの役目の件ですが、変更して頂きたいのです」
たしか、話し相手だったはず。

「結構だよ、何になりたい」

教育係になりたいと言う。王女に教える立場に回りたいという事か。大きな問題があるわけではない。シラギは快諾した。

では失礼します、と一礼して退出しようとするトモキにふと、声をかけた。

「それで、君は王女に何を教えるのだ？」

トモキは大きな目で、シラギをはっきり見据えて言った。

「常識」

よし、これで常に自分がどこにいるか確認できる。自室の机の上に、地図を勢いよく広げた。思ったよりも緻密な図だった。

「面白そうだねえ」

嬉しそうにカガミものぞきこむ。

「で、どうするんだい」

知らなければ何も始まらない。

地図と足で宮廷の地理を徹底的に叩き込む。全体は広大ですぐには無理だから、とりあえず東宮の辺りを重点的に。

それから、リウヒの女官たちに話を聞く。毎日、仕えているのだから

ら詳しいだろう。

カガミの他に、どんな人が教師となっているかも知りたい。

食事時には必ず帰ってくるというから、それから後を付けるという手もある。

どこに隠れようが逃げようが、必ず捕まえて連れ戻す。

まずは、王女自ら勉強する意欲を引き出すことだ。

「それは難しいよ」

カガミが口をはさむ。

「やる気のない人は、何を言ってもやらないからさ」

「でも、それは義務じゃないですか」

トモキも言い返す。

「自分で稼いだ金じゃなくて、国民の税で暮らしているんですよ。

だったら、ちゃんと教養を身につけて、国に恥じない人間になるのが王族の義務だと思っんです」

「君は面白いことを言うねえ」

オヤジは小さい目を丸めて感心している。

「国王に聞かせたいくらいだ」

それから、しばらく茶を飲みながら歴史を肴に雑談した。オヤジのよもや話は面白く、この人と同室になって良かった、心から思った。すべては明日から。

あくる日から、トモキは精力的に動き回った。

地図と照合しながら宮中を歩き回るのは、体力的に疲れたが、楽しくもあった。迷子になることもない。大きな紙を広げて歩きまわるトモキを、女官や侍女たちが不思議そうにみている。それから、リウヒの教師たちを紹介された。

読み書きや国語を教えているのは、タイキという老人で、立派なふさふさした髭を生やしていた。

歴史はお馴染みカガミ。

教養、行儀、礼儀の教師はジュズという名の、怒らせたら怖そうな

年配の婦人だった。新参者ですけど、と言って老女は笑った。

剣や、武術、馬術の指南がシラギだったが今日も忙しいのか不在だ。リウヒは、特に何が苦手というわけではなく、気分しだいで授業を受けたりすっぱかしたりしているそうだ。頭は悪くはないのにと、みな一様に嘆いていた。しかし、彼らは他の王子たちの勉強もみているのだ。王女のみ、与えられた以外の時間は割けない。

このときも、リウヒは行方をくらましていた。女官たちにも話を聞く。

王女の世話をしているのは全部で三人である。それが多いのか少ないのか、トモキには分からなかったが、本人たちは不満であるらしい。シヨウギの息子にだって十人はいるのに、と文句を言った。

彼女らは、話好きなたちであるらしく、軽快に語ってくれた。

王女の寝室は別だが、一日のほとんどをこの部屋で過ごすという。授業を受けるのも、食事をとるのも。

そして、気が付くとふらりといなくなるのだそうだ。最初のうちは大騒ぎして捜しまくったが今ではもう慣れてしまったという。

「宮廷から出るわけではないしね」

「出られないしね」

あえて黙認することもあるという。ただ、たまに夜中にも歩き回るため、その時はシラギが探し回るそうだ。

まるで腫れものに触るようだな、と、トモキは思った。

大層、扱いにくい王女であるらしい。始終、不貞腐れており気に入らない事があると、癩癩をおこし物に当たる。深夜に野獣のように泣き叫ぶ。笑わない。殻に閉じこもって、話しかけても無反応。触られることを極端に嫌う。公の場に出たこともない。

「最初の頃は、愛くるしくて可愛らしい方だったのに」

「やっぱり、あれよ、陛下が…」

「ちよっと」

話しかけた女官をもう一人が、肘でつついた。つつかれた方も、はつとして口に手を当てる。

「陛下がどうしたんですか？何かあったんですか？」

「何でもないの、何でもないのよ、と三人が同時に首を振る。」

「ごめんなさい、わたしたちそろそろ行かないと」

「がんばってね、お守役」

「そして、この話は忘れて」

慌てたように去って行った。

トモキは呆けたように、その場に取り残された。

始めは、王女がリウヒだとは思わなかった。もしかしたらリウヒは死んでいて、違う少女が身代りになっているのではないかとも思った。

しかし女官は、最初は可愛らしかったといった。他人であれば、シラギが自分をここに呼ぶはずがない。あの暗い闇を纏った王女は、間違いないリウヒだ。あれだけ変貌するのは、何か原因があるはずだ。

実母である側室が亡くなったからだろうか。それとも、あの国王とシヨウギが苛めたのだろうか。

数日間だけが、宮廷で暮らしてみてもトモキは肌で感じていた。ここは、いい人もいるけど、いい人の皮をかぶった悪い人の方が、いっぱいいる。いや、無関心に日和見を決め込んでいる人がほとんどかもしれない。

でもぼくは、そんな中で自分のできる精一杯のことをしよう。そう決意も新たに、夕暮れの空に誓うのであった。

沈みゆく夕時の光を受けて、赤く輝く銀髪が風にたなびいた。髪の毛の隙間から見える瞳は薄紫で、宝玉を連想させた。その美しい男に、しな垂れかかっている女がいた。シヨウギだった。

後宮の一角、南宮にある小さな園の長椅子に座って沈みゆく太陽を

見ている。

「この間は、陛下に推薦していただき、ありがとうございます。左將軍というもつたいない地位を頂き、感謝の言葉もありません」
楽の音のような、低く流れる声に女はうっとりとする。

「何をおっしゃいます、そのような水臭い……」

あなたとわたしの仲ではありませんか、と甘えたように身を寄せた。
「ああ、もうすぐ陛下の元へ参らなければなりません、わたしはここから動きたくないというのに」

さらに縋りつくと、男の手が女の肩に回った。

「わたくしも、あなたを行かせたくはありません」

耳元で囁くその声がなんと甘いことか。

「このお体を陛下の老体が抱くと思うと、悲しさと悔しさで夜も眠れません」

とたんにシヨウギが硬直した。

老体。老人。

国王はもう御歳七十を過ぎている。死期が近づいている。王が死んだら、後ろ盾を失った自分はどうなるのか。何もかも失うのは確実だ。失うわけにはいかないのだ、絶対に。

「申し訳ございません、嫉妬のあまり失礼なことを申し上げてしまいました」

再び耳に掛かる男の声で、我に帰る。

いいえいいえ、という風にシヨウギは首を振った。耳飾りが涼やかな音を立てる。

遠くに、女官が控えるのが見えた。行かなければならない。

別れの言葉を、情緒たっぷりにささやいて立ち上がるうとした時、激しく口を吸われた。

あまりの激情に一瞬我を忘れそうになる。否、忘れた。

気が付くと、女官たちを引き連れて歩いていて。後ろを振り向くと、男がほほ笑みながら立っている。

銀髪の男は、シヨウギとその女官が見えなくなるまで笑顔で見送っ

ていた。そして一団がいなくなると笑顔のまま唾を吐き、口を拭いた。

日はとうに暮れ、夜のとばりがおりていた。

夜明けとともにトモキは飛び起きた。身支度もそこそこに、急ぎ朝餉をとり食堂へ向かう。勝負の日だ。気合を入れ直して席を立った。

「おはようございます」

東宮の、王女の部屋に入室したりウヒと女官三人は、ギョツとして身を引いた。

トモキが窓辺に立って、爽やかな挨拶をしてきたからである。女官たちと面識がなければ、警備をよばれていただろう。根回ししておいてよかった。トモキはこっそりと息を吐いた。

リウヒは、不審者に驚いたものの関心なさそうに椅子に座る。どうやら食事のための椅子と机であった。

奥の方にはまた違う机と椅子がある。多分あれは勉強の為のものだろう。

「あの、殿下はこれから朝餉を召されるのですが…」

「あ、ぼくの事はかまわないでください。食べてきたんで」

と、顔の前で手をふった。

そういうことじゃあないのだけど、と女官が呟くのを無視してリウヒを観察する。

髪は相変わらず結われておらず、薄紅色の衣に茶色の帯を締めていた。いささか渋い組み合わせである。目の前に、朝餉の準備がされているのを無表情でみていた。今日も顔色が悪い。

「お召し上がりくださいませ」

女官たちが一礼すると、なんと王女は手づかみで食べ始めた。

ひどい。これはひどすぎる。記憶の中のリウヒは五歳だったが、箸は使えた。

「箸を使って食べてください」

女官たちが驚いた目でこちらを見ている。リウヒはちらりとトモキを一瞥し、無視した。可愛くない。

食べ終わった後、片付ける女官を尻目に扉へと歩いて行く王女に声をかけた。

「どこへ行かれるのです、もうすぐ勉強の時間ではないのですか」
リウヒは再びその声を無視して外に出た。

廁かな。いや、違う。

外に出ると、王女は脱兎のごとく走り出した。もちろん後を追う。七つのくせして速い。トモキも全速力で走った。女官や侍女たちが慌てて道を開ける。

前方にカガミの姿が見えた。王女の部屋へ向かう途中か。

「あ、トモキく……」

オヤジの声と姿は、一瞬で前から後ろへと流れていった。

「待っていてください、必ずや王女を捕まえて授業を受けさせます！」

そう叫び、走ることに集中した。

「だから元気だしなって」

リウヒの部屋、リウヒの机に突っ伏したトモキの頭上から呑気な声が聞こえる。

王女はいない。まかれたのだ。宮外にでて、階段を下りて、上がって、角を曲がって、袋小路に追い詰めたと思ったら、誰もいなかった。辺りを必死に探したが、やはりいなかった。

「カガミさん、ぼくは悔しいです……」

「そのすぐ落ち込む性格、なんとかしたほうがいいよ」

「若者は繊細なんです」

「じゃあ、早く大人になるといい」

そういえば。顔をあげて聞いてみる。

「カガミさんやほかの先生方は、王女がない間何をされているんですか」

オヤジはうーん、と唸った。

「そうだなあ、散歩したりとか、部屋に戻ったりとか、お嬢さんたちと話したりとか…」

控えていた女官らが小さく笑った。

「授業を受けてくれないのは悲しいけど、受けないのは王女さんの責任だろう。受けるのも受けないのも、本人が決めていることだよ。いくら七つとはいえ、自分の判断には責任を持たないと。嫌だからって逃げてばかりじゃあ、後で手ひどいしっぺ返しを食らうと思うよ」

「随分と手厳しいんですね」

「ぼくは厳しい男だよ。自分には甘いけど。あ、お茶のお代わりもらっていいかな」

厳しいのか呑気なのか。侍女に茶を注がれて寛いでいるオヤジを目の前に、トモキは考えた。

多分、この人たちは、自分さえ良ければいいのだ。国王も、シヨウギも、女官たちも、カガミや、シラギでさえも。別に間違っているのではない、自分が一番可愛い。ぼくだってそうだ。手を煩わす王女は厄介者なのだ。厄介者には誰も関わりたくない。だけど、もしかしたら、リウヒは解った上で待っているのかもしれない。それを乗り越えて、自分を叱ってくれる人を。

考えすぎだろうか。

しかしそれ抜きにしても、ぼくはカガミさんのように突き放せない。まだ七つなのだ。

頭の中に、五つの頃のリウヒがちらりと浮かんで消えた。

王女の手を引いて、正しい道に戻してやるのが、ぼくの仕事なんだ。トモキはため息をついた。どんな手を使っても。

それから数日間、リウヒは何食わぬ顔で戻り食事をするものの、トモキの顔をみれば逃げるようになった。その度に王女を追いかけまわし、結局はいつもまかれる。地図をだして確認し、搜索する。地図はもうボロボロになってしまった。

とある昼餉後。初めて王女の捕獲に成功した。東宮の外れの小さな庭園で追い詰めたのである。十三歳の少年と七つの少女は、構えたままジリジリと睨み合った。

そしてリウヒの肩をつかんだ瞬間。

「触るなっ！」

激しい勢いで振り払われた。憎悪を含んだ目でこちらを睨みつけている。

トモキはその剣幕に驚いたが、ここで隙を見せればまた逃げだしてしまうに違いない。

構えを解かずに、そのまま前進した。

王女は唸りながら後退するが、後ろは木に阻まれて動けない。

一瞬の隙についてトモキは丸太のように王女を肩に担いだ。

王女はびっくりし、野獣のような声をあげて暴れた。警備の者たちが、慌てたように駆けつける。

「あ、大丈夫です。ぼく、シラギさまに任命された王女の教育係なんです」

ご心配なくーと呑気に手を振る。シラギの名前がきいたのか、彼らは訝しがりながらも去って行った。

未だ暴れるリウヒを担いで、部屋へと戻る。途中、女官らの目線が痛かったが、あえて気にしないことにした。更にリウヒが手加減なしで叩いたり、引っ掻いたり、髪を引っ張ったりするので痛いことこの上ない。が、そのうち暴れ疲れたのだろうか、大人しくなった。替わりに小さく震えている。

部屋にいた、タイキ：国語の老師と女官たちは仰天した。

ぐったりした王女を担いだ傷だらけの少年に。

何事かと大騒ぎになった。慌ててトモキが説明する。再び老師と女

官らは仰天した。逃げ出した王女を捕まえるなんて、シラギさんもできなかった、と老師は笑った。

とりあえず、リウヒに水を飲ませて落ち着かせ、授業開始となった。その隅で、女官の一人がトモキの傷の手当をしてくれた。

薬を塗られながら、トモキは老師の声に耳を傾ける。低くて、朗々としたいい声だった。

頭のいい人って、教えるのもうまいんだな。

理解しやすく、頭にすんなりとはいる。リウヒは、大人しく本に目を落としている。普段のふてくされた態度は影をひそめ、素直に聞いているようだった。

傷の手当が終わり礼を言った瞬間、トモキの腹が盛大に鳴った。あまりにも大きくて部屋に響いたくらいだ。その場にいた全員が止まった。

再び腹の音がなり響く。トモキは恥ずかしさの余り、倒れそうになった。

静寂が耳に痛い。せめて誰か笑ってくれ。そしたら少しは救われるのに…。

回転する頭の中で、そう願った時。

クスクス。

小さな笑い声が聞こえた。リウヒが笑ったのである。老師と女官たちは、本日三度目の仰天をした。トモキもびっくりした。

リウヒが笑った。

笑い声は、部屋中に感染するように静かに広がっていく。タイキが苦笑しながら言う。

「厨房であれば、まだ何かあるかも知れんよ」

女官も笑いながら

「では、わたしがとってまいります。トモキさんは待っていていらしてと、食堂に行ってください。」

「昼餉を食べる時間がありませんでしたものね」

「シラギさまにお願いして、殿下と一緒にお食事を取られてはどう

かしら」

本当は許されないことだけど、と女官たちは再度笑った。

リウヒは元の仏頂面にもどっていたが、心なしか険が取れている気がした。

それからというもの、トモキは一日の殆どをリウヒと過ごすようになった。

朝、起きて身だしなみを整えた後、リウヒの部屋へ行く。

リウヒの一日の予定は、大体決まっていた。

朝餉をとり、カガミの講義を受ける。次に礼儀作法で、それが終われば昼餉。その後、タイキの授業を受け、シラギが来れば剣術を習い、夕餉を終えた後は寝室へ向かう。

食事は一緒にとり、王女が講義を受けている間は近くで控えていた。実際は控える振りをして、真剣に聞いていたのだが。

リウヒの剣の腕は…非常に危なっかしかった。が、二十二歳のシラギに向かって、しゃむにつっかかかっていく。もちろん、軽々と受け流されるものの、見ているトモキはいつも手に汗を握ってしまうのであった。

自分も剣を習いたい、とシラギに申し出た。教師は誰でもよいから、と。

シラギは了承してくれた。

「剣を握ったことは？」

「包丁ならあります」

「それは剣ではない」

「すみません」

シラギ自らが教えてくれるという。願ってもないことだったので、トモキは喜んだ。

「でも、お忙しいんじゃないですか」

「いいんだ。最近はおたしも手を抜くことを覚えた」

いいのかそれで。内心つつこんだものの、何も言わなかった。

「ただ、すぐには無理だが」
それは仕方ない。トモキは礼をとり、感謝の意を述べた。
相変わらずリウヒの逃亡癖は抜けずに、追いかっこをする毎日だが、それも段々と減ってきた気がする。話しかけてさえくれるようにもなった。
少しずつ、良い方向に向かってきている。そういう風に思っような日々が過ぎて行った。

奮闘（後書き）

おにいちゃん、がんばる。

宮廷生活

月日が経つのは何と早いことか。

シラギは、ふと目の前の少年をみて感慨深くなった。

東宮の一角、小さな広場でトモキの剣の稽古をつけている最中である。休憩をとろうか、と声をかけると、はい、と返事が返ってきた。

「トモキ、お前いくつになった」

「今年で十七になりました」

滴る汗をぬぐって、トモキが答える。幼かった顔が大人びてきている。身長もかなり伸びたようだ。

「あれから四年か」

早いな、と呟くとそうですね、と笑顔でトモキが答える。

トモキが宮廷に入って、四年。その四年で東宮は変わった。

一番変わったのは王女だった。十一になる。表情はまだ若干乏しいものの、笑い、会話をするようになったのだ。痲癩を起して物にあたることもなくなった。女官や教師たちにも愛されて過ごしているらしい。以前に比べて考えられないほどの進歩である。

投げた匙を、トモキは拾って丁寧に磨いてくれた。そして匙は輝きつつある。

感謝しても、し足りないくらいだ。

「さて、再開するか」

「お願いします」

双方、構える。

と、トモキが目にも止まらぬ速さで繰り出してきた。シラギは余裕で受け止める。

「脇がまだ甘い。足さばきも軽い！」

幾度も剣のぶつかりあう金属音が木霊する。

それを東宮の宮の窓から見ているものたちがいた。

リウヒの女官三人である。

「トモキさん、こつみるとかつこ良くなつたわねえ」

「えー、まだまだ子供よ」

「あたしはシラギさまの方がいい」

思い思いに勝手なことを言い合っている。

そこへ。

「何を見ているんだ」

リウヒが顔をのぞかせた。

あら、殿下。と一人が声を上げた。

「だめですよー、殿下はお勉強の時間じゃないですか」

「いいじゃないか、減るもんでもないし」

そういう問題じゃないんですよ、と三人がキヤアキヤア言っている
とカガミもやってきた。

「殿下、ぼくの講義がそんなに…あ、トモキくんだ」

青年と少年は、青空の下激しく打ち合う。

娘四人とオヤジー一人が、団子になって見学しているとは気が付かずに。

気が付いていないのかしら、全く。

朝日を浴びながら、マイムは疲れた体を引きずりつつも、北寮へ帰る途中だった。

昨夜の宴は、もう醜悪を通り越して滑稽だった。

今や、シヨウギの独り舞台である。王族など国王しかいない。しかし王も年だ、力尽きて毎回脇息にもたれて居眠りをしている。その横で、シヨウギは人目も憚らず若い男といちゃついているのだ。銀髪の美しい男だった。

そこまで調子に乗っておいて、いざ後盾をうしなったらどうなるのか、気が付いていないのだろうか。それとも分かった上で、不安

を紛らわす為にはしゃいでいるのだろうか。どうでもいい、あたしには関係ない。

後ろで後輩たちがさえずっている声がする。更に疲れが増した気がした。

何故、この子たちは注意しても注意しても聞いてくれないのだろう。どれだけ言わせれば気がすむのか。ああ、それすらもどうでもいい。面倒くさい。

後輩たちに先に行かせ、一人庭石に座って空を仰ぐ。透き通るような青空、天高く舞う鳥。緩やかに吹く風が心地よい。

ふと辺りを見渡した。東宮の小庭園。

かつて、ここで小さな王女にであった。どれくらい前になるのだろうか。

「あの」

背後から声をかけられて、驚いた。完全に無防備な状態だったのである。

「御気分が悪いなら、お水をお持ちしましょうか」

「いいえ、そういう訳ではないから大丈夫。ありがとう」

答えながら振り向くと、少年が一人立っていた。

明るい茶色の髪の毛と、こげ茶の目が可愛い。

こんなに朝早くから、何をしているのだろう。もしかして。

「迷子…じゃあないよね？」

「違いますよ」

少年は心外だというように、目を見開いた。

「どこから来たの」

しなやかな手が東宮を指差した。聞けば王女の教育係をしているという。王女は、人前に姿を現したことがない。マイムもあの時見たきりだ。

「王女さまは、お元気？」

「ご存知なんですか？」

驚いた顔で聞いてくる。

「昔、ここで」

地を指差す。

「寝ていらっしやったわ」

くすりと笑う声が聞こえた。

「王女は、めいっぱい元気です」

少年はクスクス笑いながら答える。

「元気すぎて、困っています」

マイムも笑った。

いい気分だ。計算だの、相手に何を言わせるだの媚を売ることを考えずに、ただ会話をしている。偽の笑顔を常に貼り付ける日々、もしかしたら心が擦れていたのかもしれない。

何も考えずに、話し笑うことがこんなに楽しいなんて。

「あなたの名前は、なんていうの？」

「トモキです」

心臓が跳ねた。弟と同じ名前だった。

「マイムよ」

手を差し出す。何も考えずに、ただ手を差し出す。

トモキがその手を握った。温かくて、さらりと乾いた手だった。

トモキの手がリウヒの襟首を掴んでいる。そのまま引きずられるようにして王女は歩いていった。後ろ向きに。

「なあ、わたしは王女だぞ」

「存じ上げております」

トモキは一瞥もくれずに答えた。

「しかるべき態度があると思っただが」

「ならば王女らしく、慎ましくなさいませ」

ふんつとりウヒは鼻をならした。

まったくもって憤ましくない。

襟を掴む手を緩めず、トモキは黙々と歩く。

四年前に比べ、王女は格段に成長した。箸をつかって食事をする。癩癩を起こすこともない。会話をするようになった。顔色も明るくなったし、目の隈も消えた。何といても笑うようになった。

すべて当たり前のことだが、以前とは想像できないほど前進した。ただ、多少ぶつきらぼうに育ったこと、未だ触れられるのは嫌がること。そして脱走癖は残った。

思い出したように逃げる。トモキがいる時に限って。

今日も、ジュズの講義の前に逃げた。慣れているもので、すぐに追いかける。

王女の捕獲率は九割五分。殆どの割合で成功している。なんせ、トモキの頭の中には、宮廷の地図が叩きこまれているのである。散歩と称して、色んなところに出かける。国王がいる本殿や、シヨウギの住んでいる南宮は基本的に立入禁止だが、最近の警備が緩いこともあり、平気で歩き回った。堂々としていれば怪しまれないのだ。

事実この四年で、宮廷生活に完全に馴染んでいた。

所々に配置されている警備の者はおるか、門番とまで顔見知りになった。彼らは基本的に兵士であり、それを総てするのは右将軍であるシラギである。無愛想なシラギも面倒見は良いらしく、二人の副将軍を始め兵士たちに壮絶な人気があった。中には信者らしき男まである。シラギに剣の稽古をつけてもらっているトモキを、みな一様にうらやましがった。

知り合いが増えると、情報も集まってくる。

東宮におけるリウヒとトモキの追いかっこは、名物となっていると聞いて驚いた。

話題を提供しているわけではないのに。

だが、笑いを元となろうとも王女が逃げたら捕まえるしかない。

体に触るのを嫌がるので、毎回、仕方なしに襟首を掴む。ゆえに王女は、猫のように引きずられるか、後ろ向きに引きずられるか。

どちらにしても、間抜けな恰好である。これも笑われる一因なんだろうな。ため息をついて顔をあげると、タイキとカガミが向かいから歩いてきた。

リウヒが目ざとく発見してもがく。教師たちはこちらに気づき、ほほ笑んだ。

「タイキ、カガミ、見てないで助けてくれ」

リウヒは、ここの教師たちに愛されている。その事を本人も知っている。哀願するように暴れた。しかし。

「いやあ申し訳ありません。本日、わたくしめっきり目の調子が悪うございまして…」

何も見えません、と老人は目を瞬かせた。

「ぼくも、耳の聞こえがどうも悪く…」

何も聞こえません。横でオヤジも耳をほじくる。

韜晦する二人にトモキは黙礼すると、再び王女を引きずって歩きだした。

おぼえてろーと悲痛な叫びが廊下に木霊した。

「ああつ」

カガミが悲痛な声を上げた。

「お酒、こぼしちゃった」

あーもう、トモキが布を取りにはしる。

「気を付けてくださいよ、これ高かったんだから」

「それはもつたいたい」

と床に口を付けようとするカガミにトモキがギャーと叫んだ。

この二人は面白いな。

湯呑に口をつけながら、シラギはひっそり笑う。中身は勿論酒だ。たまに、ごくたまに、こつやってトモキらの部屋で酒を飲む。

ある時、トモキが誘った。

「ヨカツタライツシヨニノミマセンカ」

一瞬、何を言われているのか分からなかった。理解するのに時間がかかった。トモキが不思議そうな顔で見ているのに気が付いて、慌てて承諾した。

この子は本当に屈託がない。そびえ立つシラギの壁を、ひよいと乗り越えて声をかけてくれた。

そして感心することに魔窟な宮廷において、擦れることがない。

愛情をたっぷり受けて、育ってきたのだろう。かつて訪ねたトモキの家を思い出した。

温かで居心地の良い家だった。優しくそうな母親と、小さな弟。

しかし、自分はそのから彼を引き離れたのだ。己の便宜のために。

厄介者の王女を押し付けるために。そして王女を厄介者にしたのは……。

胸がズキリと傷んだ。

「どうしたんですか？」

トモキが覗き込む。

「あ、ああ。いや、ご家族と連絡はとっているのか」

咄嗟に覗きこまれて、少し動揺した。

「はい、母は元気です。弟は、離れた町で中学に行っています。下宿して」

シラギさまのお陰です。頭を下げられた。下げるのはこちらであるというのに。

「ぼくも中学に行きたかったなあ」

「よく言うよ、昼は王女さんの授業を横で聞いて、夜はぼくの本を読んでいるくせに」

へへへ。トモキが笑う。

確かに、この部屋には大量の本があった。壁の一面に巨大な本棚があり、行儀よく収められている。

「ぼくが作ったんですよ。あまりにもひどかったから。部屋中が本

で埋め尽くされていて、最初、ぼくの居場所なんて寝台の上だけだったんですから」

と笑うトモキに対し、カガミは不満そうだ。

「ぼくはあの方が落ち着いたのに」

「でも、部屋は片付いていた方がいいでしょう？」

「猥雑な方が、落ち着く事もあるんだよ」

話は自然、宮廷のことになる。

表面化では、平穩に見えても水面下では派閥争いが勢いを増してくるようになった。

まずに第一王子であるアナン。そして二人の王子。王女であるリウヒは一番年が若いこともあり、あまり関わりはないようにみえる。

しかし、それぞれの血縁者が本人らの意志とは関係なく担ぎあげるのだ。臣下の者も今後の行く末がかかっているため必死だった。

「シラギさまは？」

「王女派になるな」

自分は側室であつた亡きイズミの親戚にあたる。面識はあまりなかったが。

争いには興味がなくても、結局は血に縛られるのだ。勝手に派閥に組み込まれる。

「継承者はアナンさんで間違いないと思うんだけど、どうなるか分からないねえ」

「どんな方なんですか？」

王子たちの講師をしているシラギとカガミは、アナンの事をよく知っている。

「温厚篤実、謹厳実直、胆大心小」

「なんですそれ。呪文？」

「君は一体何を勉強していたんだい」

呆れるカガミをよそに、ぼくも王女派なのかなあ、他の人を知らないし。とトモキが首をかしげる。

「ただ、シヨウギが何やら動いているみたいだな」

「国王の後ろ盾もありますしね」

「シヨウギの息子さんにも、ぼくら教えているんだよ。この親にしてこの子ありって感じの子なんだけどさ、王位を継ぐことはないね」「どうしてですか」

「当たり前じゃあないか、連れ子だもの。いくら王の権を笠に着ているからってそれだけは許されないだろう」

まあ、ぼくは日和見派だけどーとオヤジが体をゆすった。腹がのっそり前後にゆれる。このタヌキオヤジとトモキが肘でつついた。

「まあ、誰が王位に立つにしろ、王女さんは守りたいね」

それはシラギもトモキも同意見だったので、二人揃って頷いた。あの小さな王女は守ってやりたい。その周りのものたちも。

「ところでトモキくん」

「はい」

「ぼく、吐きそうなんだけど。限界…」

カガミが口を押さえ、虚空を睨む。

「やめてえ！ 今吐かないで我慢して！」

叫んだトモキはオヤジを引っ掴んで、部屋を飛び出していった。

取り残されたシラギはしばらく呆然とし、それから嘔き出した。笑いには止まらず、後から後からわいてくる。声をだして笑ったのは、一体何年振りだろう。眼尻に涙をためて、そう思う。

もしかしたら、生まれて初めてかもしれない。

宮廷生活（後書き）

トモキとカガミはナイスなコンビ

魔窟

女の肌は、生まれたての赤子のように瑞々しかった。

二十歳前後だろう、深夜だというのに疲れを微塵にもださず、生命力すら感じさせた。

丁寧に礼をとり、跪いている。踊り子というだけあって、仕草のいちいちに花があった。

そんな若い女を前にして、自分の老いに焦りを感じているシヨウギは不機嫌である。いらいらと扇を弄んでいる。

カグラは内心呆れながら、その後ろで立っていた。

間諜の一人に、踊り子を使ってはどうかと持ちかけたのはシヨウギなのだ。だから一番人気の娘を選び呼んだ。自分から言っておいて何を……。本日何度目になるか分からないため息をこっそりとつく。

ただし、笑みは絶やさない。

この笑みも、薄紫の目も、銀色の髪も、声も、女を虜にするには十分効果を発揮している。とりわけ娘に威圧的に話をしているシヨウギに。

「我に話を聞かせよ」

「わたくしは一介の踊り子にございます。シヨウギさまのお耳に入れるような楽しいお話など、恐れながら持ち合わせておりません」娘はにっこりと笑う。

もしかしてこの娘は、喧嘩を売っているのだろうか。

自分の美しさを熟知した上で見せつけるような笑顔は、若干嘲笑しているようにも見えた。

面白い娘だ。

「お名前は何と言つのです」

唐突にカグラがきいた。

「マイムと申します」

凜とした声でマイムが答える。

ちらりとシヨウギを見ると、こめかみに筋が浮いているのが分かった。

カグラが娘に名前を聞いたのが許せないであろう。

踊り子の立場を使って、情報を集めてこい。そして報告しろ。そのような旨を単刀直入にいうと、娘はかしこまって即引き受けた。

「どのような報告をお望みのですか」

「アナンとリウヒじゃ」

吐き捨てるように、王子と王女を呼び捨てにした。

御意、とマイムが礼をする。

さがるように、とシヨウギが扇を振りながら、あさつてを見た瞬間。カグラはマイムが、礼の下ではつきりと嘲りきった笑みを浮かべたのを見て取った。

ああ、この娘はおれと同じ匂いがする。

そう思いながらマイムの後ろ姿を見送った。

その姿が消えるや否や、シヨウギが縋りついてくる。どうしてあんな娘の名前を聞いたりするのだ、わたしに飽きたのか、わたしはあなたに捨てられたら生きてはいけけないではないか、哀れっぽく訴えてくる。

まるで餌をとられた犬のようだ。

「あなたを悲しませてしまって申し訳ない。名前は、便宜上必要だから聞いたまで。わたくしが、あなたに夢中なのはよくご存知ですよ」

シヨウギの髪をひと房とって口づけしながら、そうささやく。

なぜ女はこういう齒のうくような言葉が好きなのだろう。

多分、自分の存在意義を見つけたいのだろう。心からの言葉だろうが、つまらぬ世事だろうが、己を認めてもらう事に満足しているだけに違いない。

目の前の女はまだ鳴いてくる。

ここ最近、さらに纏わりつく様になった。王が寝込んでからだ。この女も不安なのだ。なにか縋るものがほしいのだ。

「シヨウギさま。アナンさまが正式に次期後継者として認められましたね。どうなさるおつもりですか」

さらに揺さぶってみる。もっと怯えるがいい。もっと怖がるがいい。案の定シヨウギは震え、カグラに抱きついた。

「そんなことおっしゃらないで。そんな恐ろしいことおっしゃらないで。あなたが守ってくださいるのでしよう」

誰が守るか。

火種をつけたら、煽って炎を大きくする。その炎は美しいことだろう。

おれはそれを見ながら嗤ってやるのだ。この醜悪な宮廷を燃やして嗤ってやる。

震える女をかき抱きながら、カグラは優しほほ笑む。

「当たり前のことを聞かないください。わたくしが命の限り、お守りいたします」

「自分の身は自分で守らないとね」

自分に言い聞かせるように、マイムは呟いた。

夜空に月はなく、星たちは遠慮がちに瞬いている。

シヨウギに呼ばれた。間諜のまねごとをしろと言われた。腹が立った。

「あたしを巻き込まないでよ」

勝手に自分らで騒いでいればいいじゃないか。迷惑この上ない。

どうせ、色々なところに間諜を放っているに違いない。保険の一つなのだろう。踊り子は確かにいろんな所に入りに来るし、王族とも接点が多い。でも、踊り子ごときに容易に重大な情報を渡すだろうか。渡すはずがない。それをやれという。

しかし、断れば殺されるのは分かっている。そういう奴らだ。だか

らすぐに受けた。

シヨウギ。

昔は、嫌いではなかったのに。もう少し道理をわきまえれば、うまいやり方なんてたくさんあるのに、何が望みなのだらう。王位か。まさかね。

初めて近くでみたシヨウギの顔は、年には勝てず肌が乾いていた。化粧もひび割れていた。

こっそり笑ってやった。あたしの方が女として上じゃないの。そう思った。

神経質にわめく年増女の、その後ろに立っていた銀髪に同情するわ。あの男だって何か考えがあつて、シヨウギのそばにいるのだらう。権力が蠢いている下に、純粋な愛なんてあり得るわけがない。あの男は多分、あたしと同質だ。女の直感だった。

アナン王子とリウヒ王女。

王子の方はよく出入りする。本人がくつろいでいる横で歌うのだ。楽師らの奏でる音に合わせて。自分の声も楽器のようなものである。目の前で舞うこともある。王子本人にも、何回か声をかけられたことがある。いい男だ。頭の回転の速い人なのだらう、とても楽しかった。周りも本当に慕っている、そんな雰囲気でした。

あの人、王になればいいのに。素直にそう思う。王女の方はまったく接点がない。数年前に寝ているところを起こそうとして、威嚇された。それだけだ。いや、トモキとかいう少年が、確か王女に仕えていると聞いていた。

弟と同じ名前をもった男の子。

初めて、素直に話せた男の子。

あれから二、三回会話を交わした。世間話とか、天気などの話だ。それでも心が和んだ。あの子には、こここのいざこざに巻き込まれてほしくない。媚を売ることに疲れた自分の大切な時間なのだ。

マイムは髪をかきあげ、小さく息を吐いた。

仕方がない。

あの後輩らのさえずりに耳を傾けてみようか。何か出てくるかもしれない。

トモキは巻き込まない、そう決めた。

あたしにだって汚されたくないものがあるのだ。

誰にだって汚されたくないものがある。

トモキの場合は、リウヒだった。

赤子のリウヒを見た時は、世の中のどんなものからも守る気でいたし、道を外れたら手を引いて、自分が正しいと思う方向に戻してやろうと思った。

しかし、世の中は自分が思っているほど甘くはなかった。

もっと巨大で、どす黒かった。

世界はただ美しいだけじゃない。醜悪な闇だって背負っている。

カガミがいびきをかいて寝ている。

介抱が大変だったが、出せるものをすべて出すとそのまま寝てしまった。

今度は、部屋へ引きずっていくのに苦労した。

シラギと二人、飲みながらぼつぼつと話をしている時、どうしても胸の奥で引つかかっていた事を聞いた。

リウヒはどうしてあんなに変わってしまったのかと。四年前に再会した時は別人かと思った。素直で可愛らしい幼子が、闇を纏った理由が分からなかった。

「それを聞くのか」

シラギが苦しそうに言う。

「聞く覚悟があるのか」

だまって頷いた。

「少し風に当るうか」

椅子をたつて、部屋を出る。前を歩くシラギの背中が、気のせいか気落ちしている。

東宮の庭園に出た。

たまに、ここでマイムと会う。最近知り合った、きれいな女の人だった。

会話は世間話やどうでもいいことが主だったが、マイムの日に輝く髪だとか、少し物憂げな横顔を見ていると、胸の隅っこがキュンと縮んだ。

「お前がいつそのことを聞いてくるのか、本当は気が気じゃなかった」

シラギが庭石に腰かけながら低い声で言う。

「だが、聞いてきたら、包み隠さず全部言おうと思っていた」

まるで、トモキではなく近くにある御影石に語りかけるようであった。

リウヒが東宮に入った時、小さな王女は喜んで走り回った。自分の寝室に驚き、美しい衣にはしゃぎ、それはもう無邪気で可愛らしかったという。

ひとしきり騒いだ後、帰ると言い出した。「にいちゃんとかあさんのところに帰る」と。

これからここで、暮らすのだ、あの村には帰れない、と伝えても聞き入れずに大泣きした。

実母であるイズミにも会ったが、母は見向きもしなかった。人形をわが子と思い込んでいてリウヒには一瞥もしなかった。リウヒもイズミを母と思っていなかったらしい。

かあさんは、いつも台所にいるの。あんな顔していないの。あれは違う人だもの。

国王は幼い王女を膝に抱き、非常に喜んだ。

初めて手にした娘である。その日は、ずっと膝に乗せ政務をこなした。周りの臣下も、その溺愛ぶりを微笑ましく思った。

「ところが」

シラギの声が絞られるように掠れた。

「陛下が夜な夜な、リウヒさまの寝室を訪れるようになった。人払いをして」

トモキが弾かれたようにシラギの顔を見た。

苦しそうに歪んでいる。

「それからだ、王女の様子がおかしくなったのは」

まず、人に怯えるようになった。肌に触られるのを嫌った。表情が消えた。心を閉ざし敵愾心を露わにするようになった。殻に閉じこもる。癩癩をおこす。すぐに逃げる。

トモキは大きく息を吸った。吐き気がする。腹の底が熱くて気持ち悪い。

だから、肌に触られるのを嫌がるのか。

少女が纏っていた闇は、自衛のものだった。

部屋から逃げるのは、逃避の為だった。

幼女は必死に身を守ろうとした。

「イズミさまが亡くなった頃には、もう陛下は東宮に姿を現さなくなっただ」

「どうしてあなたは止めなかつたんだっ！」

激情のままシラギの襟もとを掴み揺さぶった。シラギはなすがままになっている。

リウヒの近くにいなながら、気が付いていながら、なぜ止めなかつた。なぜ少女の心が壊れていくのをそのまま傍観していた。

「どうしてあなたは…」

声が擦れているのが分かった。喉が焼けつくように痛い。怒りのあまり世界が回転しているようだ。

初めて人を殺したいと思った。

皺だらけの国王も、目の前のシラギも、世の中のすべてを本気で殺したいと思った。

こんな事が許されていいのか。ここは何なのだ。

まるで

「魔窟だ」

「どうしたんだ、呆けた顔をして」

リウヒがトモキの顔を覗き込んだ。

びっくりして、身を引くと壁に頭をぶつけた。リウヒがケラケラと笑う。

昨日は一睡もできなかった。シラギの告白を聞いてからの記憶がない。それだけの衝撃だった。目の前の笑っている少女を見ると、目の奥がツンと痛くなる。胸が引き攣れる。

そんなトモキにまったく気が付かず、昨日な、とリウヒが話し始めた。

「ジユズから面白い話を聞いたんだ」

教師の老婦人である。口うるさく怖いのが、リウヒは孫のような感覚なのだろう、甘やかしている節があり、授業中にもいろんな話を聞かせてくれた。名家の出のくせに昔、放浪の旅をして各地を転々としていたそうだ。

「西国には、誕生日という風習があるらしい」

「誕生日？」

うん。少女はなぜか得意げだ。

「普通、年齢というものは年が明けると、みんな一斉にとるものだろう」

「そうですね」

「ちがうんだ」

リウヒは椅子に腰掛け膝を抱える。

「生まれた日にちに年をとる。しかも、親しいものたちでそれを祝うそうだ。貴賤に関係なく」

「祝う？では祭りが開催されるのですか？」

「多分」

トモキは首をかしげた。それでは人口がおおい都など、どうするの

だろう。毎日どこかで祭りが開かれているなんて、陽気すぎて想像ができない。

「素敵じゃないか。自分の生まれた日が特別なんだぞ。それぞれ個別に年をとって、それを祝ってもらえるなんて」
うつとりとリウヒは語る。

歳なんてものは、自分を表わす記号にすぎない。便利にすぎない。でも、自分が生まれた日、大切な人が誕生した日を特別なものだとするその風習は、確かにひどく素敵なものに思えた。

「リウヒさまは、ご自分が誕生された日をご存じなのですか」
それならば、その日を皆で祝福してやろう。身内でひっそりと。祭りとはいかないまでも、カガミやタイキ、ジュズ、女官三人娘やシラギもよんで。

シラギ。胸が再び引き攣れた。憎い気持ち腹の底にくすぶっている。

いや。みんな知らぬ振りをしていたのだ。あいつらみんな。

「知らない」

リウヒが首を振った。

みな、生まれた年は知っていても、日にちまでは知らない。重要ではないからだ。トモキも自分の生まれた日は知らない。

「では」

この少女に、記念日をつくってやろうと思った。

「わたしがリウヒさまにお会いした日を、誕生日にするのはいかがでしょうか。その日なら、わたしもよく覚えております」

うん、うん、とリウヒもうれしそうにうなづく。

「お前が、入廷した日……」

記憶を辿るように遠くを見る。ふと眉をひそめた。

「いつだったっけ」

剣の舞

「それは、いつのですか」

シラギはうんざりして聞いた。目の前の宰相もため息をついている。

「十日後だ」

忌々しげにいう髭男の顔を見ながら、この人も歳をとったなと思う。黒かった髭はすっかり白くなってしまっていた。心労と疲れから来るものも多いのだろう。やつれて一回り小さくなったようでもあった。欲がうごめいている宮中で泳いでいくのには相当な体力と知力を要する。ただ流されているだけなら、すぐに足元をすくわれて消えるだけだ。

その中で、精一杯、流されずに己の債務を果たそうとするこの男を、シラギは素直に尊敬していた。しかし。

「誰なのです、御前試合などという事を持ち出したのは」

「知らぬ。だがシヨウウギらと敵対している輩であることは間違いない」

最近、寝付いてすっかり気弱になっている王を慰めるため、御前試合を設けようじゃないか。本殿では、この話で持ちきりである。右將軍と左將軍、つまりシラギとカグラで、国王の前で剣の打ち合いをしてはどうかと言うのだ。

幼い頃から剣を叩きこまれ、今や国一番と言われるシラギに対し、左將軍であるカグラの経歴を知っているものはいない。が、一流の剣使いなどそうそう転がっていない。分が悪いのは目に見えた。

左將軍という肩書を持っているにもかかわらず、ただ王の愛人に侍って澄ましているだけの輩に一泡吹かせたい。と言うところである。

それならお前がやれ。

言いだしっぺにそう言いたい。

厄介ことはごめんだった。大勢の人前で見せものになることも。

「陛下はなんとおっしゃっているのです」

「以外に乗り気で困っている」

宰相と将軍は同時にため息をついた。

このところ、王は持ち直して寝台から離れるようにはなっているが。「国王のほかにも、その一族、ほか臣下たちが見物する中での試合になるが」

「やりますよ」

そんな大勢の観衆の中の注目を集めるのは嫌だったし、左将軍に負ける気は全くなかったが億劫だった。しかし仕方がない。

これも仕事なのだ。たとえ滑稽な猿芝居であろうが、上からの命令なのだ。ならば舞台上がって踊ってみせるしかないではないか。

「御前試合？」

王女は目を丸めてシラギをみた。茶器を机に置くと、チンと可愛らしい音が響いた。目の前には色とりどりの菓子や果物がある。昔から、食欲は旺盛だったが最近はずっと増えたらしく、午後に間食をするようになった。気持ちの良い食べっぷりで、目の前のものを胃袋に運ぶ王女をみて、背後に控えているトモキが口をだす。

「あんまり食べ過ぎると、カガミさんのようになりますよ、ほどほどになさい」

「それは困る。明日から控えよう」

そういつてリウヒは饅頭をとって口に入れた。楊枝を使えとまた背後から声がする。

トモキはあれからシラギを避けるようになった。あからさまではないが、空気は伝わってくる。当然だと思っ反面、寂しさは否めない。そう思う自分に驚いた。

「試合はいつなんだ」

「九日後です」

国王に正式に認定された。公式試合となる。

シラギの話聞きながら、リウヒは目を輝かせた。こんな表情もできるようになったのか。改めて、目の前の少女の変貌ぶりに目をみはる。

「面白そうじゃないか、わたしもみたい」

「今なんと？」

幻聴かと思った。トモキも控えていた壁から身を浮かせ、固まっている。

「シラギが打ち合うのを見てみたいし、東宮からも出てみたい」

「人が大勢いますし、その、…陛下もいらっしゃるのですよ」

リウヒは僅かに表情を曇らせたものの、それはそうだろう、御前試合なんだから、と笑った。

「となれば、殿下のご衣装も用意せねばなりませんね！」

「わたしたちが腕によりをかけます！」

「誰よりも美しく装って御覧にいきます！」

女官三人が力強く宣言した。その勢いにリウヒが怯えたように、身じろぎをする。

「あの、あんまりに飾られても、恥をかくのは王女なんだから…」

恐る恐る諫めたトモキを侍女たちはギツと睨んだ。

「トモキさんは、わたしたちの感性を信用してらっしゃらないの？」

「そうだ、殿下の近くに控えられるのなら、トモキさんの衣装も必要よ！」

「お姉さんたちに任せなさいって！」

興奮した二人に囲まれたトモキは壁際に追い詰められ狼狽している。そんな風景を見ながらシラギがポツリと言った。

「王女さま、健闘を祈ります」

リウヒも返した。

「うん、お前もな」

運がよかった。

マイムは女官の制服をきて、すまして控えている。

御前試合なんて、王族かそれに関係するものか、その臣下達しか見られないのである。踊り子なんぞお呼びでない。だが、どうしても見てみたかった。陰気な男、シラギとシヨウギの愛人、カグラの試合を。だから、知り合いの女官を買収して入れ替わってもらった。

マイムは会場の雰囲気全体を感じる。久しぶりに華やかな席だ。緞帳のかかる上座に一段上がって王の椅子が鎮座し、その両側に重そうな、しかし高そうな椅子が並べてある。王座の前に広々と場所がとってあり、ここで二人は打ち合うのだろう。臣下たちはざわめきながら、ひらけた場所の前に立っていた。多い。百人は下らないのではないか。教師陣までいるなんて、なんて物見高いのだろうとマイムは自分を棚に上げて呆れた。

丁度臣下らと王座が向き合い、その中で、二人の将軍が剣を打ち合う形だ。

ざわめきがやみ、みな一様に跪礼の形をとった。マイムもそれにならう。王族たちが入ってきたのだ。

「面を上げよ」

一面は、みな驚き再びざわめき出した。マイムももちろん驚いた。

王女がいたのである。公の場に初めて姿を現した王女。

端の席に大人しく座っていたが、その可愛らしさに目がいった。

とりたてての美人ではない。が、賢そうな黒い眼はぱっちり開いており、白い肌に映えていた。輝く藍の髪は緩くまとめられて華奢な簪が控えめに彩っている。いくつもの玉が簪からつらなっており、優美に揺れていた。衣は薄桃と萌黄の合わせ重ねで襟、袖は髪の色と同じ藍。少女らしい、愛らしい衣だった。帯はこげ茶の兵児帯で結び目を前にたらしめている。ふと後ろにひっそりと控える少年に目が行った。濃紅の衣に黒の帯。簡易だが人目を引く。あら、トモキじゃない。マイムは一瞬手を振りそうになった。

快達で、人気者のアナンもこの時ばかりは霞んで見えた。

こっそりシヨウギを見ると、少女とは対比して醜悪だった。金銀の花刺繍を散らした薄紅の衣。刺繍が派手すぎて浮いている。簪は一体何本刺さっているのだろうか。試合がつまらなかつたら数えてみよう、とマイムは思った。

本日の主役二人が登場し、王に膝を折って跪礼をとった。

シラギは見事に黒一色で統一されていた。黒髪はいつもの様に後ろの高い位置で括られており、長い髪束が一直線に垂れている。帯も黒。衣は漆黑、さらに黒糸で青浪の模様が見て取れた。下は動きやすいように袴を細くしたものに裾を黒布で絞って邪魔にならないようにしている。そして相変わらずの仏頂面。

対するカグラは白で統一。同じような恰好に瞳の色と同じ紫の帯だった。遠くからでも目立つ銀髪は、今日は後ろに一纏めに括られている。

双方、距離をとり構えた。緊張が会場を包む。

「勝負は五本」

審判が手を挙げる。

「始め」

一瞬、間があいた後、激しい金属音が鳴り響いた。

二度、三度、間。再度激しく打ち合う。離れたかと思えば近づき、打ち合ったかと思えば間合いのために距離を開ける。お互いの隙を計りながらゆっくりと移動した瞬間、剣の音が幾度も重なり合う。

圧倒的な試合であった。余りにも早くて剣先が見えない。黒が攻めていると思ったら、離れ今度は白が反撃する。

しかし、シラギはともかくカグラである。あんなに剣ができるなんて以外も以外だった。

会場が息をのんだ。

シラギの剣をかわしたカグラがそのまま回転し、相手の頬に傷をつけたのである。

「左將軍に一本！」

声が響き渡った。どよめく会場。当たり前だろう、国最高位の剣士が一本取られたのだ。マイムはふと、シラギの顔を見て戦慄した。頬を拭いながら、その男は静かに笑っていた。餓えた野獣が獲物を見つけたときのような、禍々しくて狂気すら含んだ嬉しそうな笑みだった。

まるで色気すら漂うような……。いやいやいや何を考えているのだあたしは。

「始め」

二本目。瞬時に大きな音が響いたと思ったら、静寂が訪れた。カグラが信じられない、と言う顔をして己の右手を掴んでいる。その中にあるはずの剣は、回転しながら空を飛んでカグラの後ろに落ちた。「右将軍に一本！」

審判が声を上げたが会場は静かなままだった。何が起こったか理解できなかったのである。

マイムも分からなかった。もつと近くで見たいのに、ここから動けないのがもどかしい。会場は異様な熱気に包まれ始めた。

「始め」

三本目。今度はカグラが地を蹴って仕掛けた。シラギはただ受けるだけである。押されているようにも見えるが、その顔は相変わらず笑ったままだった。それにしても、あんなに早く動いてよく疲れないうものだ、とマイムは変な所で感心した。二人とも汗は流しているのに呼吸が乱れていない。その時、誰かが声をあげた。カグラの剣を受け流してシラギがそのまま突き出したのである。その先はぴたりと相手の喉元に定まった。しばらく誰も動かなかった。静寂。

「見事！」

国王の声が響いた瞬間、ドンと歓声が上がった。臣下たちは、御前と言う事も忘れて熱狂的な声援を送っていた。マイムの隣に控えている女官も自分の立場を忘れて騒いでいる。あそこで手を振り回しているのは大老の一人ではないか。あ、倒れて運ばれて行った。シヨウギの簪なんて何本でもいい、この試合をずっと見ていたい。マ

イムは祈るような気持ちで剣を構える二人を凝視した。

「四本目、始め！」

審判の声も上ずっている。

お互い隙を窺っているのだろう。次は一步も動かなかった。息が上がってきたカグラに対しシラギは余裕の表情で構えている。まるで小動物をなぶる獣のようだ。と、黒が動いた。いつそ無邪気にすたすたと白にむかって歩いてゆく。カグラは呆けたように立っていた。観客もぼかんとした。そのまま、子供の遊びのような剣振りでシラギは手を払った。高い金属音がして気が付けばカグラの手から剣が消えていた。

「右將軍に一本！」

間をおいた後、ほとんど絶叫と言っているほどの声が響いた。会場が揺れるようだ。国王も王族も身を乗り出すようにして手を叩いている。その中で一人、シヨウギだけが顔を顰めて扇を弄んでいた。これを企画したものは、シヨウギのこの顔がみたかったのかもしれないとマイムは思った。でも今はどうでもいい、白と黒の剣技を見ていることが面白い。しかしもう最後だ。臣下…というより観客たちからは誰ともなく黒將軍、白將軍と声が上がってきた。

「五本目、始め！」

瞬時に剣がぶつかる音がする。最後の試合は壮絶だった。双方死力をつくしてぶつかり合う。シラギの顔からも笑みは消えた。

黒が波となりうねると、白は大海となって呑み込む。白が虎となり剣を咆哮させる、黒が竜となり撥ねつける。黒が雷となり撃ち落とせば白は風となりかわす。白が鷲となって襲いかかると黒は鷹となつて迎え撃つ。黒が風を巻き起こせば白は凧となつて流す。

ああ。

マイムは思わず声をもらした。まるで舞を見ているようだ。激しく壮烈な舞。なんて美しい。全員が息をひそめ瞬きをする間も惜しんで見守っていた。そして勝負はついた。

「右將軍に一本！」

「黒將軍に剣術を教えたのはジユズだつて本当か？」
東宮の部屋にて。茶を飲みながら、王女が目の前の老女に聞いていた。

「まあ、誰がそのような事を」

苦笑を浮かべながら老女が茶器をおいた。リウヒは御前試合がよっぽど気に入ったらしく、数日経つた今でもその話を持ち出す。しかし、ジユズが剣師範をやっていたなんて初耳だ。後ろに控えていたトモキは、耳を澄ませて続きを待った。

「タイキに聞いた」

「あの方は意外とおしゃべりなのですね。ええ、稽古をつけてやりましたとも。幼い頃に」

へえ、と王女は目を輝かせた。

「小さい時のシラギなんて想像付かないな」

確かに。後ろでトモキも頷く。

「どんな子供だったんだ？」

興味津津で聞いてくる少女に、老女は目を細める。孫に微笑む祖母のようだった。

「そうですね、昔から陰：落ち着いていて、頭も良かったのですがやはり剣の筋は教え子の中でも一番でした」
懐かしむように遠くを見る。

「あれだけ腕が立ったのは、あの子ともう一人……」
はっとしたようにジユズは口を閉じた。

「もう一人？誰だそれは。ジユズの子か」

好奇心丸出しで聞くりウヒ。こうなったら誰にも止められないのを講師達は知っている。

「いいえ、わたくしに子はありません。その昔拾った子供ですの」

シラギと同格ぐらい上手だったという。

「今までに色々な国を旅して参りましたが、中々優れた剣士と巡り合う事は少ないですね」

「その子は今でも元気なのか」

「元気そうですね。剣の腕は落ちたようですが」
そういつて、なぜか淋しそうに笑った。

「さて、殿下」

ジユズの背筋が伸びる。顔つきまで変わった。リウヒはつられて背筋を伸ばした後、顔色を変えた。その目がちらりと扉に走る。トモキは急いで扉の前に立った。ち、と小さな舌打ちが聞こえた。

「御前試合はたしかに見事でしたね。でもわたくしは殿下の態度をみて涙が出そうでしたわ。なんですか、あの座り方は。普段わたくしたちと一緒にいるときは大目にみましよう。あまりにも改まり過ぎても殿下が大変ですものね。しかし、大勢の前に出る時ぐらいはしゃんとなさりませ。よいですか、…」

小言は続く。

リウヒは猫のように小さくなって聞いており、トモキは笑いをこらえながらそれを見ていた。

嵐の前

女官たちが、こちらを見ながら笑っている。振り向くと慌てたように駆けて行った。

シラギは眉を顰めた。試合から半年も経つのに、未だに人の噂に上るのは何となく居心地が悪い。

王はあれから上機嫌で、寝台にしばしばシラギを呼びつける。試合の話は何度も繰り返すのだ。横についているシヨウギは凄まじい顔で睨んできて、訳のわからない嫌味をネチネチ言う。剣技を見せてくれ、と大臣たちはせがむ。果物でも切ったら満足するのだろうか。副將軍たちまでキャツキャとうるさい。まあ、それはいつものことだが。

宮廷のご真ん中でもう勘弁してくれと叫びたいほど、シラギは疲れ果てていた。

自分に付けられた異名もそうだ。いつの間にやらシラギは黒將軍、カグラは白將軍と呼ばれるようになった。王女まで面白がってそう呼ぶ。この間、リウヒの部屋に入った瞬間

「いよつ、黒將軍」

王女の口から掛声がかかった。反応に戸惑い、うっかり

「ありがとうございます」

と言ってしまった。トモキと女官三人が、隅の方で苦しそうに震えていた。

誰だ、王女につまらぬ事を吹き込んだのは。大方、カガミ辺りにちがいない。

しかし、あの試合は本当に面白かった。カグラが意外に強くて、久しぶりに楽しんで剣を振るえた。途中から意識が飛んだほど熱中した。

だが、あの剣の型は自分と同じではなかったか。幼いころの稽古を思い出した。毎日瘧だらけになって帰った日々。

「まさかな」

政務室に入り、椅子に腰を下ろす。目の前には仕事如山積みだ。シラギは気持を切り換えて、書類を繰る手に集中した。どれほど時間が経っただろうか。

扉が叩かれる音がした。トモキだった。

礼をしたもののしばらく話しにくそうに、目を泳がせている。シラギはかける言葉が見つからない。目の前の少年が、口を開くのを待った。

沈黙が流れた。

「わたしは、あなたがリウヒにした仕打ちは多分一生忘れないと思います」

静寂を破ったのはトモキだった。無表情で淡々という。

シラギは頷いた。

「でも、やっぱりあなたを嫌いになれない。憎みきれないんです」再び沈黙が流れる。

老人の戯れは少女を闇に落とした。しかし、少女は自らの力で暗い闇から脱出した。獣が穴倉からおおずとおおずと安全を確認しながら顔を出すように。そこまで導いてくれたのは、この少年なのだ。

自分は何もしなかった。ただ傍観していただけだった。

「本当にすまなかった」

苦しくて苦しい痛みが心の中を広がっていく。

失礼します、とトモキは再び礼をして出て行った。

シラギはしばらく少年が出て行った扉を凝視していた。そして息を吐くと、再び書類に目を落とした。

東宮の庭でトモキは深いため息をついた。

言いたいことは言った。シラギの苦しそうな顔がちらつく。もう一

度ため息をついた時、柔らかい声が聞こえた。

「どうしたの」

マイムだった。遠くを色とりどりの衣装を纏った踊り子たちが通り過ぎてゆく。

わざわざ声をかけてきてくれたんだ。

そう思うと胸の中がじんわり熱くなった。なんだろうこの気持ち。

「いえ、ちよつと喧嘩して」

少し違うような気がしたが、どう説明して良いのか分からなくて、かいつまんだつもりがかいつまみ過ぎた。

「へえ、あなたでも喧嘩することってあるの」

「マイムさんはしないんですか」

この人の事をもっと知りたかった。職業は踊り子。集団の中においても一人でいるような、そんな感じの人。

「あたしは群れないから」

多分、人との距離の取り方が下手なのね。そう言っただけで笑った。

「喧嘩するほど仲がいいっていうじゃない。仲直りなんて、一緒にお酒を飲めば一発よ」

適当な助言だなあと思いつつも、今度またシラギを部屋に呼んでみようと考えた。

「マイムさんはお仕事あがりですか」

「ええ、アナンさまのところに行ってきたところ」

相変わらず微笑みながら、遠くを見るマイムの顔がなんだか嬉しそうに見えて、少しだけ不快になった。

「今人気の第一王子ですね」

「人望があるのも頷けるわ。とても良い方だもの」

ますます面白くない。話を転換させるため、リウヒの事を持ち出した。少しでも長く二人でいたかった。マイムはクスクス笑いながら聞いてくれた。そして

「じゃあね、少年。王女さまによろしく」

といって、あっさり去って行ってしまった。

「最近トモキくんさあ、きれいな女の人と密会しているって本当？」
カガミの声に、トモキは含んでいた酒を盛大に吹いた。そのままむせる。

シラギが背中をさすってくれた。

「な、な、なん…ええええ？」

涙をためてうるたえまくるトモキに、オヤジはうれしそうに目を細める。

「君は本当に正直ものだよね」

マイムの適当な助言通り、久しぶりにシラギを呼んで部屋でひっそりと三人で飲んでいる。最初はぎごちなかった空気も、だんだんと緩やかになってきた。オヤジはもう酔っぱらって絡んでくる。

「いいねえ、恋かあ。ぼくの恋人は歴史だからさあ。散々翻弄されているんだよね」

「そんなんじゃないんです。ただそのあの」

「うんうん。おじさんに何でも話してごらん」

やばい、このままでは着にされっぱなしだ。

「し、シラギさまは、恋人とかいらっしやらないんですか」

この人なら、よりどりみどりだろう。一人や二人や三人いてもおかしくはない。

「いらん」

「いらんって…」

「女はな、狐だ。狸だ。妖怪だ。魑魅魍魎だ」

トモキはまじまじと目の前の男を見た。昔、何かあったんだろうか。

昔の夢をみた。

目の前にぼつかりと大きな黒い穴が開いている。穴を覗いていると、

横に人が来た。孤独だった自分に、優しくしてくれたその人はカグラをポン、と前に押した。

闇に落下しつつも、怒りは湧かなかつた。

そうだよな。そんなものだよな。自分が泣いている事に気が付いた。ああ、おれは泣きたかつたのか。

そこで目を覚ました。豪華な寝室、蕩けるような肌触りの薄布団、軽いいびきの音、体に絡みついている女の腕。その腕を邪険に払うと、散乱している衣を纏って外に出た。

冷たい風が心地よい。南宮の園に腰を下ろすと、そのまま本殿を見上げた。

昼間とは違って闇の中の巨大な建築物は、ずんぐりとして見える。

その方がより近しく思えた。カグラは長椅子に腰かけ本殿に目こそそいだまま、微動だにしない。片手は膝に、片手は口に当てている。そしてゆっくりと何かを味わうように、目を閉じた。

ちろり。

何かが体の中を走り抜ける。それはちろちろと分裂してゆき、体中を巡り始めた。快感を伴って。思わずそれを押さえるように両手で自分の腕を掴んだ。

知っている。これを何と呼ぶか知っている。破壊願望だ。最近、やけに頻繁に訪れてくる。

ああ、でもまだ駄目だ。

お前を解放させるわけにいかない。時期はまだ来ていない。腕を掴んだまま、衝撃が去るのを待つ。それすらも一種の快感だった。ちろちろと体の中で這っていたものはいつの間にもやら小さくなってゆき、やがて消えた。

カグラは目を開ける。うつすらと汗をかいていたが、緩やかに吹く風が乾かしてくれるだろう。そうしたらまたあの寝台に戻らなければならぬ。シヨウギが起きて騒ぎだす前に。

「御前試合がついこの前だと思っていたのに」

「もう三年も経ちましたよ」

「いやー年を取ると時間の流れが分からなくなっちゃうんだよねー」
ぼくがここにきてから七年が過ぎたんですよ、とトモキが笑うとそんなになるのかい、とカガミも笑った。

日々は何も変わらず過ぎていく。リウヒがたまに、公に顔をだすようになったぐらいだ。

「そうだ、この間アナンさまに声をかけていただきました」

君が、リウヒかい。長身の好青年は笑顔で話しかけてきた。王女と目線が合うように腰を折って。リウヒははじめ、怯えてトモキの衣の裾をつかんだが、息一つはいて気合いを入れたようにふんばり、笑顔で応じた。

「ごきげんよう、兄さま」

和やかに当たり障りのない会話をしていると、他の王子二人も寄ってきた。リウヒに興味を持っていたようである。さわさわと話し、さざめく様に笑う彼らを見て、控えているトモキは涙がでそうになった。見事に猫を被るリウヒを、誇らしく思う気持ちでいっぱいになったのである。ジユズがあの場合にいれば、トモキの横で落涙していたに違いない。

「ふうん、どうだった、噂の好青年は」

「ええ、噂どおりとても良い方でした」

確かに、人気があるはずだ。存在感のない他の王子たちに比べ、ひととき大きく見えた。安心して任せられる、信頼にたる人物に見えた。

「だから、もし国王が亡くなってもアナンさまがいれば安泰かなと思っんですけど」

「シヨウギは宮廷を追い出されるだろうね」

もしかしたら、殺される可能性だってあるだろう。いや、そちらの方が高い。後ろ盾を無くした女は全てを失い、存在を消される。その息子も一緒に。

カガミはしばらく空を見て考えていたが、

「トモキくん、君がもし今のシヨウギの立場だったらどうする」

「えっ？そうですねえ。どっかの田舎に引っ込んでのんびり暮らすかな」

君は欲のない子だね、とカガミはつまらなさそうに鼻を鳴らした。

「いいかい、シヨウギは権力意識の高い女だ。それを前提に考えると、今の生活は手放したくないんだよ」

贅沢で豪華な暮らし。望むものがすべて手に入る満足。臣下や貴族たちが自分にかしづく優越。

「それを失うぐらいなら」

トモキは思わず唾をのんで続きを待った。

「謀反を起こすね」

その時、部屋の戸が叩かれた。

トモキとカガミは同時に飛び上がりヒッシと抱き合った。

「どどどどちらさまですか？」

裏返った二人の声に、シラギの声が応じた。戸を開けると、間違いないシラギが立っていた。

「どうしたのだ、怯えた声を出して」

いえ、ちよつと怪談話をしていまして、と誤魔化しながらシラギの顔が憔悴しきっているのに気が付いた。

「シラギさまこそどうしたんです、珍しい」

「いや、すぐに戻る」

部屋に招き入れると、シラギは身を投げ出すように椅子にかけた。大きなため息をつき、両手で髪をむしる。

あまりの態度にカガミとトモキは顔を見合わせた。

「本当にとっしたんですか？何かあったんですか」

「あった。大いにあった」

シラギが手と手の隙間から声を出した。
「アナン王子が消えた」

「アナン王子が行方不明？」
カグラはさすがに驚きを隠せなかった。
マイムが無言でうなづく。

後宮の一角の小さな庭園。虫の鳴き声も聞こえなくなり、空には丸い月が辺りを煌々と照らしていた。何日かに一度、マイムの報告をここで受ける。始めマイムはシヨウギに報告をしていたが、あまりにも明後日な指示をするため、また、凜気を発して当たり散らすためカグラに直接話すようになった。

「その方が確実なもの。どうせ、シヨウギを動かしているのはあなたなのでしょ」

見透かしたように微笑みながら、言い捨てるマイムを見てカグラも苦笑した。

「一体何をしたいの」とも聞いてきた。

「あなたに言う必要はないと思いますが」
そういうと、それもそうね、と首をすくめた。

「王子は自ら姿を消したのですか。それとも誰かに攫われたのですか」

「もしくは殺された可能性もあると思うけど」
あなたが指示したんじゃないの？目で問いかけられてまさか、と笑う。

おれではない。

「わたくしにそういう勇氣はないですよ」

目の前の女は、全く信用してないようだった。

「とりあえず、その原因を探ってください」

マイムは再び無言でうなずいた。

「王子がいなくなれば、シヨウギが天下を取るわね」
沈黙のあと、マイムがポツリと言う。

他はほんくらばっかりだし。あ、でも。と呟いて再び黙った。

「他の王子はさておき、要注意なのが王女ですね」
公の場に姿を現せ始めたちいさな王女。

御前試合で見かけた藍色の髪をもつ王女。

あの試合。カグラは未だ忌々しげに思う。誰だ、あんなものを考え
ついた連中は。剣の腕には自信があったものの、最初の一本しか取
れなかった。三本は取れると踏んでいたのに。

シラギの顔が忘れられない。

笑った。

頬に傷をつけられ、血を流しながら嬉しそうに。思わず、背筋が凍
った。その後は全く歯が立たなかったのである。その剣技を称えた
いような認めたくないような奇妙な感情が残った。それ以上に屈辱
が残った。父に無様なところを見せてしまった。

シヨウギは、あなたが死ななくてよかったとまた縋りついて泣きわ
めかれ、なだめるのに苦労した。最近、更に統御が難しくなってい
てくる。

まあ、いい。火種は強いほど燃え上がるのも早い。そろそろ煽ろう
か。

この生活に飽いてきた、年増の面倒も疲れてきた、そしてこれが
父の言っていた時期なのだろう。

「王女の方も探ってください」

他にも間諜を放っているが、この女が一番、確実に使い勝手がいい。
「もし、何か起きるとしたら」

目の前のマイムがちらりとこちらを見た。

「もうすぐですね」

もうすぐ謀反が起きる。

それは確信として、マイムの心の中に残った。

カグラは王子の出奔の原因と王女の身辺を探れと命令しつつ、もうすぐ何か起きると漏らした。矛盾している。

マイムは自分の勘を信じる。だってあの笑い。カグラは最後嬉しそうに笑った。腹に一物の笑い方だ。

謀反。何をする気だろう。王族の幽閉か。殺害か。王とその側室、息子たちは間違いなく狙われるだろう。いやいや、それよりも真っ先に狙われるのはあの王女だ。

彼らの側近も危ない。幽閉どころじゃない、きっと殺されるだろう。月明かりの下、黙々と歩きながら考える。そしてぴたりと足を止めた。

トモキも殺される。

初めて会ってから三年が経った。少年の幼さは消えて、すっかり大きく成長していた。トモキは王女の話をするようになった。その内容は微笑ましくて心から笑った。本当に大切に思っているのだな、とも。あたしは誰かにここまで思われたことはあるのだろうか。否なかった。

もちろんカグラには報告しない。だれがあんな男にこんな話をするか。

トモキが殺される。

心臓の音がうるさい。呼吸が苦しくなった。自分が殺されるそれも嫌だったが、あの子が殺されるのは恐怖だった。

「あ、マイムさん」

トモキがいる。眼を疑った。

「どうしたの、こんな夜中に」

散歩、とトモキが答える。

「なかなか、寝付けないし、同室のオヤジの躰がうるさくて
ああ、ありがとう。同室のオヤジ。」

相変わらずの世間話を聞きながらマイムは決心した。幸い周りには
誰もいない。見ているのは丸い月だけ。

手招きをして、近づいたトモキの両肩を掴んだ。少年が顔を赤らめ
る。

「近々謀反が起きるわ」

トモキが目を見開いて、マイムの目を見た。この子だけは逃がして
あげたい。

弟と同じ名前をもつ男の子。

「誰にもいわないでね、でも宮中で騒ぎが起きた時は」

この手の中で冷たくなっていった弟。

「すぐに逃げなさい」

流行り病で死んだ弟。

「お願いだからあなたは死なないで」

「死んでも嫌」

食べることに異様な執着をみせる王女にも、苦手なものがあった。

菜飯である。絢爛豪華な宮の食事だが、健康のためか稀に菜飯が食
卓に上ることがあった。残さず食べるよう、トモキが注意するとリ
ウヒはツンと横を向いて拒否した。

「じゃあいいです」

ため息をついて、トモキが食事を再開した。リウヒが不思議そうに
こちらを見ている。いつもは口うるさい教育係が、あっさり引き下
がったのに不安を感じたのだろう。呻きながら不承不承、茶碗を手
に取った。

「ほらほら、ちゃんと食べないと大きくなれませんよ」

笑いながら給仕をする女官たちに、だってこの青臭いのが嫌いなんだ、とリウヒは口を尖らせた。

どこか懐かしい気がする。かつて自分も同じようなことを言っていたのかもしれない。遠い昔の記憶。

昨夜、偶然マイムにあった。透き通った青い目で、間近から見つめられた。心臓が跳ねて、顔に血が上ったのが分かった。マイムのふつくらとした唇が動く。その唇から紡ぎだされた言葉は

「謀反が起きるわ」

現実感がない。しかし、頭から離れない。たしかにアナン王子が行方不明になってから、妙に静かだった。

謀反。

十分、考えられる事ではないか。カガミも予測している。もっとも予測しているだけで、何かしている訳ではないけれど。

いざそれが起きればどうすれば良いのか、考えなければならぬ。

勿論、標的は王族だろう。リウヒも危ない。まず、リウヒを逃がすことだ。しかしどこに逃がせばいい。

突然、額に冷たいものがあたった。顔をあげると女官の一人がトモキの額に手をあて、もう片方を自分の額に当てている。

「お熱はないようですが」

「大丈夫か」

リウヒが心配そうに聞いてきた。すでに王女の前の食器は下げられる途中で、菜飯の茶碗もきれいに空だった。

「すみません、もういいですごちそうさま…」

トモキはひとりでフラフラと外に出た。

「あっ！ お前、人に食べるよう言っておいて残しているじゃないか卑怯者！」

リウヒの叫び声が聞こえたが、無視した。

「どうしたのかしら、トモキさん」

「今日は何かおかしいわねえ」

「もしかして恋煩い？」

きやーと三人娘は声を上げる。リウヒがまさかと青ざめた。

「そういえば、きれいな女の人と、よく一緒に話しているらしくてよ」

「トモキさんもお年頃ですものね」

「温かく見守りましょう。ね、殿下」

女官たちに好き勝手に言われていることは、まったく気が付かずにとモキは東宮の庭園にでた。日差しがまぶしい。今日も暑くなるだろう。

御影石のそばに座って石に身を寄せた。ひんやりしていて気持ちよい。

謀反。

どうなるのだろう。女官たちや教師たちも逃がさなければならぬ。シラギにも報告して…。いや、まずはリウヒだ。どこに逃がせばいい。

思考が堂々巡りして何も思いつかない。

庭の真ん中でへたり込んで御影石に抱きついていているトモキを心配して、顔見知りの警備兵が声をかけてきてくれた。

何でもない、とトモキは答えた。昼餉を食べ損ねて腹が減っているだけだと。

本当は叫びだしたかった。

謀反が起こるんです。みんな死んでしまうかもしれないんです。だから逃げて…！

言えない。多分マームは、危険を冒して教えてくれた。口止めもされた。

「いい天気だなあ」

警備兵が空を見上げ呟く。まったく、本当にいい天気だった。抜けるような青空。呑気に雲が二つ、ぽっかりと浮いている。蝶が三匹、絡み合いながらトモキの前を通りすぎていった。頭を石に付け目を閉じる。

今はこんなに美しくして平和だというのに。

炎上

その深夜。

結局トモキは誰にも何も言えずに、自室の寝台で丸くなっていた。勿論寝付けない。

シラギやカガミ、女官たちに、何か起こるかもしれない、と何度も伝えようとしたが、無理だった。突っ込んで聞かれるのが怖かったのである。下手に話して、マイムに迷惑がかかる可能性があった。しかし、命にもかかわる事なのだ。

明日、絶対話そう。

詳しく聞かれたら、とぼければいい。そう思い、蒲団をかぶろうとした瞬間。

爆発音が近くで聞こえた。

連続して三度、四度。

トモキは勢いよく飛び起きると、窓に走った。身を乗り出すようにして外を見る。

まさか、まさかこんなに早く起こるなんて！

西宮が燃えている。側室と二人の息子が住んでいる宮だ。炎の塊が屋根を飲み込み、さらに燃え上がった。本殿は見えないが、空が明るいことからして、燃えているのは確実だろう。熱気と焦げくさい嫌な臭いが風に乗って届いた。

急いでカガミを起こす。

「大変です！ カガミさん、起きて逃げて！」

弾む肉を乱暴に叩き、蒲団をはがすとオヤジは身を縮こまらせた体勢で驚きのあまり固まっていた。よし、起きた。

カガミをそのままに残し、部屋を飛び出る。目指すはリウヒの寝室。月明かりがあるのが幸いし、全速力で走る。走りながら警備兵たちが、本殿の方に走っていくのが見えた。

下の方では、人の叫び声、馬の嘶きが、走っていても聞こえて混乱

している様子が分かる。

本殿は：巨大な紅の化け物が暴れまわっていた。のたうち回り、咆哮し、燃え盛る手で柱を抱いた。瓦を吹っ飛ばした。

その迫力たるや、思わず立ち止まって魅入ってしまいたくなる。しかし、トモキは走らなければならない。東宮に入った。騒ぎの中妙に静かで警備兵もいない。寝室の扉の前には兵は立っていないかった。声もかけずに中に入る。走る勢いで入ったので、大きな音がした。中央に大きな寝台があり、天蓋から薄布が垂れ下がっている。所々、金の刺繍が施されている薄布だった。その中で、人影が素早く動いて警戒心を露わにした声を出した。

「誰だ」

「トモキです」

言いながら、許しも得ずに薄布をまくるとリウヒが寝着で構えていた。左手は枕の下。

「謀反が起きました」

リウヒの顔に緊張が走った。

「ここから逃げます、寝着を脱いでください」

喰台を掴んで廊下に出た。まだ人の気配はない。リウヒの寝室の向いに衣装室がある。王女の衣や櫛などの装飾品が管理されている部屋だ。その中を漁る。闇に紛れるようなだけ目立たない衣を探す、ふとトモキは気が付いた。自分も寝着である。が、この際自分には構ってられない。

「これは…」

女官の衣だった。リウヒのお付きの三人娘。なぜ彼女らの制服がここにあるのだろう。しかし、濃紺でこれなら目立たない。リウヒの元に戻る。

王女は寝着を脱ぎ、待っていた。急ぎ女官の制服を身に付け、枕の下のを帯下に入れた。

二人で部屋を飛び出し、走る。どこに向かうんだ、と聞くリウヒに、城下へ、と叫んだ。

宮廷は広大なれど、広場のようなものはない。空中庭園は、本殿より下に位置するため危険である。となれば、外に向かうのが一番安全だ。

門自体が開いてないかもしれない。しかし、状況が分からない今、行くしかない。

東宮を出る間際、トモキは掴んでいたリウヒの寝着に気づき、庭に投げ捨てた。

全速力で走る二人を、不審に思うものはいなかった。それどころではなかったのである。

突然、地響きのような音が聞こえた。続いて建物が崩れ落ちる音。

「ああっ！」

振り向いたリウヒが声を上げる。トモキも振り返った。

本殿が、崩れた。炎が勝利の雄叫びをあげるように、天に舞う。トモキの入廷時、その堂々たる佇まいで圧倒した宮殿の姿はもうどこにもなかった。今や、紅の化け物に包まれた黒い屍しかばねであった。

その時、後ろで笑い声がした。遠くで男が一人、両手を広げ大声で笑っていた。まるで嬉しそうな歓喜の声。銀色の髪が風に煽られ炎が紅くその姿を染め上げていた。もしかしたら、狂ってしまったのかもかもしれない。が、構っている暇はない。

立ち止まったりリウヒを促し、再び走りだす。

正門をくぐりぬけ、長い階段を降りる。足が纏れそうになるのを堪えおりきると、そこは蜂の巣を突いたような大騒ぎだった。みな、一様にどこに向かえばいいのか分からず、どうしたらいいのか分からず、大声で叫びながら右往左往しているだけだ。ほぼ侍女や兵、下端の者たちだ。

「外へ！城下へ避難せよ！」
リウヒが叫ぶ。

彼らはうるんな目で少女を眺め、それから弾かれたように大門へ向かって走り出した。先頭を切るのはリウヒとトモキ。日頃の追いかけてここで培われた足が、こんなところで役に立つなんて。どうでも

いいことをトモキはふと思った。

馬が一頭繋がれていたまま、暴れていた。嘶きながら前足で地を蹴っている。ご丁寧に鞍までついていた。

馬の方が早い。

とつさに判断したトモキは、その背に跨ると胴を蹴った。前を走るリウヒを馬上から掴み前に押し込める。驚いたのと、触られたのでリウヒが暴れた。

「暴れないでください。今落ちると死にますよ」

抱え直すとリウヒは大人しくなったが、走る馬の上でも分かるほど震えている。

大門についた。

幸いなことに門は開いており、人も少なかった。もしかしたら、みな外に避難するという発想がないのかもしれない。宮廷の中で暮らす末端の者は、手紙のやり取りは許されても外に出られない。親兄弟が亡くなったときだけである。自由に外に出るものは、王の勅命を受けたものか、王族、上位のもののみ。商人を除き、下端の者が出入りすることは許されない。ゆえに外の事に無関心になってゆく。門番はトモキの顔に気づき、慌てて飛び出してきた。なにがどうなっているのか泡を食って問う。

「騒ぎが起きたんです。逃げる人たちが殺到するかも知れませんが、大通りに誘導してください。あなたも気をつけて」

馬頭を巡らし叫ぶ。再び胴を蹴ると、馬は嘶き前足をかいて走り出した。

夜が明けてきた。

都から大分と離れ、馬を歩に変えたころリウヒの様子がおかしいのに気がついた。真っ青になって震えが酷くなった。呼吸も荒い。トモキは無言で、馬をおり手綱をとった。未だにトモキでも触れられるのを拒否する。胸が痛んだ。リウヒは黙って下を向いている。

ふと後ろを振り向くと、都から煙が昇っているのが見えた。普段な

ら朝日を受けて悠然と輝く宮廷の屋根が、今では消えてただ黒い煙を立ち昇らせているだけだ。

「宮が…」

同じく振り返っていたリウヒも同じ事を思ったのだろう。女官たちは、カガミたちはどうなったのか。シラギは、そしてマイムは。昨日の昼までであんなに平和に見えたのに、あの小さな庭園も消えてしまったのだろうか。

もし謀反ならば、今宮廷に帰ってもリウヒが危ない。

しかし、これからどこへ向かおうか。金ももっていない。

シシの村へ戻ろう。

母に迷惑をかけるかもしれないが、そこしか思いつかない。

トモキは歩を早める。

陽が昇り、二人の姿を照らし始めた。

太陽に照らされた宮廷…、否いなかつて宮廷だった地は見るも無残な残骸だけが残った。

炭になった黒い骨組から煙が立ち上っている。本殿と西宮は消滅した。無事だったのは東宮、南宮、北宮、南寮、住宅部、そして北寮の一部。

シラギは、木にもたれ疲れたように髪をかき上げた。実際ひどく疲れていた。体が動かない。

昨夜の爆発音で目覚め、すぐさま本殿に駆け付けた。

現場は混乱の極みで、それはもう酷い有様だった。

「落ち着け！　まずは陛下の御身を！」

動揺して走りまわる兵を叱咤し、門外の大通りへ促すよう指示する。馬を駆け大門以外にも開けるよう命令した。王族の安否は確かめられなかった。いざという時のために後宮の一角に、一族の避難場所

がある。だがそこには誰もいなかった。王もいなかった。

太陽の光が目には刺さる。辺りには、呆然と座りこんで動けなくなったものや、ただ立ち尽くして焼け跡を眺めるものが多かった。避難したものの達も、ぞろぞろと戻ってきている。

とりあえず、宰相を探さなければ。

木から身を起したとき、声をかけられた。振り向くとカガミが立っていた。所々煤汚れ、顔にも煤が付いて黒ずみ、汗で照かっていた。いつも天辺に集めている髪は、一部縮れ完全に垂れ落ち犬の耳のようになっている。滑稽よりも悲惨さを醸し出していた。

「よくご無事で…」

「はい。トモキくんに起こされなければ、きっと死んでいました」
トモキとカガミの部屋は燃えたという。あの居心地のよい部屋も消えたのか。三人で酒盛りをした部屋。シラギは思わず目を閉じた。

「ぼくの…ぼくの本も燃えてしまいました」

数冊は持ち出せたのですが、全部は無理でした。とカガミは泣いた。小さく声をあげて。

「命が助かっただけでも、よかったですじゃないですか」

どう言葉をかけていいのか分からない。本の価値は、大学まで通ったシラギも知っている。

しかし、とカガミがぬれた顔を上げた。

「トモキくんはどこにいったのだろう」

「王女もまだ見つかっていないのだが」

もしかしたら、二人は一緒にいるかもしれない。だとすれば、安心だ。この外に出ていれればいいが。中はまだ油断ができない。

突然カガミがトモキの実家を聞いてきた。シラギさんはご存知でしょう、と。もちろん知っている。教えるとオヤジはふんふんと頷いて、じゃあ、と歩いていった。

あの人はこれからどうするのだろう。その後ろ姿を見送りながら、そう思った。

そこへ、女官が走ってくる。かわいいそうに、あちらこちらには煤で汚

れていた。

「申し訳ありません、右將軍さま。シヨウギさまが呼びなのですが」

シラギは目を丸くした。何の用だ。

もうここに用はない。

カグラは、晴れやかな気持ちで空を見上げた。雲ひとつない青空で、鳥が声をあげて飛んでいる。その下では醜悪な黒い塊が、今もなお煙をあげていた。

炎は美しかった。想像していたよりも、はるかに美しく猛々しかった。

特に本殿の、天に昇ろうとする赤い火柱は華麗に踊り、あの中にうごめく汚い奴らを浄化してくれた。

気が付いたら、笑っていた。空に手を広げ、炎を称えるように笑っていた。これが望みだったのだ。笑いは止まらず、ますます腹の底から湧いてきた。体中を駆け巡るあいつらも、喜ぶように跳ねている。炎はそんなカグラに、応えるように祝福するように天に舞う。満足だ。

カグラは笑いを収めて踵を返した。

すべては順調に進み、そして終わった。

権や金には全く興味が無い。凜気もちの年増の相手をするのも嫌だった。

側室とその息子たちはもういない。西宮は炎にまかれて消滅した。東宮の寝室は誰もいなかったが、しかしどうでもよかった。もう一切合財、自分には関係ないことである。

遠くにシラギの姿が見えた。疲れたように木に寄りかかっている。生真面目な性格だから苦勞するのだ。もっと適当で良いのに。

かつて剣を交えた男。そういえば、言葉を交わした事もなかった。違う出会い方をしていれば、また異なる関係になったかもしれない。白將軍、黒將軍という試合後、誰からともなくつけられた名を思い出して、カグラは苦笑した。腹の中はきつと逆だろう。馬舎にいつて、適当に一匹拝借する。

門はすべて解放され混乱状態が続いている。正面の一番大きな大門は、人々が出たり入ったりの状態だった。

それを尻目に悠々と門を出ながら、カグラは思う。いっそ、口笛でも吹きたい気分だった。

約束は果たした。

さて、どこへいこうか。

どこか遠いところへ行ってしまおうか。

マイムは腕を組み、自室の窓から外を見た。窓枠に寄りかかる。外に出る機会は今しかない。門付近は、人だかりがして右往左往している姿が見て取れる。列を乱された蟻のようだ。

さて、自分の身の振り方だ。宮廷はこれからシヨウギの天下になるだろう。国王は殺すまいが、王子たちはきつと消されている。幽閉など生易しいことなどする女ではない。トモキが大切にしている王女は生きているのだろうか。そしてあの子は無事逃げられたのだろうか。

そうであることを祈った。

シヨウギ。マイムは顔を歪め頬に手をあてた。一度、扇を投げられたことがある。勢いよく顔にあたり、怒りで頭が白くなった。よく収めたものだと自分をほめてやりたい。

あんな女の下に仕えるのはもうまっぴらだった。

「外に出よう」

腰をあげて部屋に戻る。衣装箆笥の戸をあけ、衣をかき分けると木箱を取り出した。ここ数年間こつこつと貯めてきたお金。さらに奥には今までの貢物の宝玉や飾り物がある。それらが無造作に袋にいれ、風呂敷に詰め込むと異様に重くなった。

ここは幸い火事の被害にあわなかった。もし、燃えて焼失したら気が狂っていたかもしれない。身を汚して手に入れた大切なものたち。自分の存在価値以上のものだった。

だって、世の中はお金で動いている。お金はあたしを裏切らないもの。

外にでてどうしようか。生まれ故郷の村に帰りたくはなかった。宮廷で華やかなものを見続けてきたマイムにとって、あのさびれた漁村には身を置きたくなかった。

手の中で冷たくなっていった弟。死ぬ間際、マイムを何度も呼んだ。自分を売った両親。親と離れたくなって、男に手をひかれながら振り返ると、両親はすでに背をむけて家路へついていた。あの時の絶望感は一生涯忘れない。

嫌な思い出しかない村だ。誰が戻るか。

出てから考えよう。

よいしょ、と風呂敷を抱えそんな声をだした自分に苦笑する。いやだ、まだ二十四なのに。

外にでると焦げくさい臭いが鼻についた。いつも遠くに見える本殿はその姿がなく代わりに灰色の煙が上がっていた。

またあの巨大な建物をつくるのか。ご苦労なことだ。

門に向かっていている途中、シラギが女官に案内されて橋を渡るのが見えた。あの、女官の制服はシヨウギ付きのものではないか。ということ、シラギもついにシヨウギに下るのか。あの、無愛想面はきつとシヨウギの怒りを買うに違いない。その点、カゲラはいつも笑顔を貼り付けていた。気持ち悪いくらいの微笑。どちらでもいいけど、あの二人、足して割ったら丁度いいかも知れないのに。いいや、もう自分には関係ない。

振り返り、かつて「天の宮」と称えられた残骸を見上げる。
さようなら。

十八年間過ごした宮廷に別れを告げてマイムは門を出た。

女官がシラギの来訪を告げた。扉が開かれる。

中に入ってシラギは驚いた。この事態にすっかり化粧をほどこし、豪奢な衣をまとうシヨウギはどうでもいい、その後ろに立っている男である。その顔は憔悴しきっておりまるで亡霊のようであった。

「よう参ったの」

膝もおらず、慄然と立っているシラギにシヨウギは若干苛立ちを含ませた声をかけた。

「この度の火災にてそなたの活躍ぶりは聞いたぞ。礼をつかわす」
無言。

「これより一層、我のために働いておくれ」

「お聞きしますが」

伺いも立てず、シラギが口を開く。

「国王とその一家の安否をご存じか」

シヨウギは扇を口に当てて、ほほ笑んだ。

「ほんに、右將軍は愛想の欠片もないのう。そう思わぬかえ、のう」
後ろに立つ男は、は、と答えたきり何も言わない。シヨウギの顔がひきつった。

「国王は無事じゃ。我が宮でご休憩遊ばしておる。ご体調がすぐれぬゆえ寝台にふせておいでじゃ。側室どのとそのご子息たちは、残念ながら炎に巻き込まれ御命を…」

そういつて悲しそうに顔を扇で隠した。どうせ笑っているのだろう。

「王女の行方は」

臣下の言葉ではない。さすがの無礼にシヨウギは顔をゆがませ上げ

た。

「王女は行方不明じゃ。しかし報告では寝着が庭で発見された。無事であるわけがない」

お可哀そうに、とまた扇を開いて顔を伏せる。

シラギは衝撃をうけた。

まさか、死んだのか。それか誰かに誘拐されたか。もしかして…。

思考が回転してうまく立っていられない。表情は変わらずとも顔色が変わったのだろう、そんなシラギの顔を見て、シヨウギは微笑む。

「まあ、我としたことが。大丈夫じゃ、右將軍どの。きつとご無事であらせられるよ」

「もうひとつ。いつもあなたの後ろにいるのは左將軍だったはずだが」

「あれはこの混乱にのまれ、行方が知れなくなってしまった」

切なそうに溜息をついた。それはどうでもいい。なぜ宰相がここにいる。なぜ父が。

宰相は諦めきつた様に首をふった。

それでは。とシヨウギが扇を振りながら言った。勝ち誇った気持ちの悪い笑顔。

「父と子で我のため、ひいては国王のために力を貸してたもれ」

故郷

馬をひいてどれほど歩いただろうか。日は天にのぼり、じりじりと地を照らす。

リウヒは黙ったままである。トモキも無言で黙々と歩いた。会話がないのは、疲れきっているのと、腹が減っているからだ。喉の渇きは道端にある井戸で癒した。

ふと、木に実がなっているのに気が付く。名前は知らぬが、暑い盛りに橙の実をつける木だ。大きさは子供の拳ほどある。数個もいでリウヒに渡した。

リウヒはきょとんと実を眺めている。多分、果物というものは切られ皿に飾りつけられて出るものだと思っているのだろう。どうやって食べるんだ、と言うのでこう食べるのですよ、とかぶりついたらいつもは楊枝を使え、箸を使えだのうるさいくせにと笑った。笑ったことに安堵した。

村への坂道を登る。懐かしいような、初めて通る道のような奇妙な感覚。この坂道を最後に通ったのは何年前だろう。

七年前だ。十三の頃。またリウヒを連れて、通るなんて思ってもいなかった。

村間近になると、一人の少女がこちらを見ている事に気が付いた。驚いた顔で立っている。その顔に見覚えがあった。たしか、遊び友達妹だった。

「トモキさん！」

その少女が走って抱きついてくる。すきっ腹で力が入らない為、少しゆるめいた。

「どうしたの。宮廷にいったんじゃなかったの」
はしゃぐように見上げる少女の頭をなでてやる。

「ちよつと用があつてね」

そうなんだ、おかえりなさい。あのね、あのね、カズちゃんがね。

嬉しそうに周りを飛び跳ねるようにまとわりつく少女に苦笑しながら歩き出す。

リウヒが馬上で、その少女を不思議な生物をみるような目で眺めていた。

家が見えた。

懐かしさがこみ上げる。弟とつつかり壊してしまい母にこっぴどく叱られた柵。友達と遊んだ原っぱ。道端にぼつんと立っている風車。何一つ変わっていない。

畑に母が立っていた。

呆然とこちらを見ている。あんなに小柄だったっけ。髪もすっかり白くなっている。

リウヒが馬から降りた。同じく母を凝視している。

トモキは母に近づき笑った。

圧倒的な照れくささ。

「かあさん」

母は手で口を覆い、目を見開いた。

「ただいま」

「最初誰だか分らなかったわ」

白湯をだして、母がいとおしそうにトモキを見た。その視線がくすぐったい。

「本当に大きくなって…。あなたもリウヒも」

リウヒは弟の寝台で寝ている。かなり疲れていたようで、夕餉を食べるとすぐ寝てしまった。始終大人しかった。母に対してもよそよそしく、戸惑っているようでもあった。

ただ、家に入った瞬間「あ…」と呟いた。遠い記憶を手繰り寄せるように。何か思い出したのかと聞くと「匂いが」と言った。懐かしい匂い。それきり口をつぐんでしまった。

リウヒが寝入った後トモキは、一通りの経過を話した。母は黙って聞いている。しかし、まだ状況は分からない。知っている人たちの

安否や、誰が政権を握っているのかも。国王は生きているのだろうか。生きているとしたら、誰がその後を継ぐのだろうか。

そして、この後自分たちはどうしたら良いのだろう。まずは、中の様子が分からなければ、身の振りようもない。万一、追手がここに来ないとも限らないのだ。

ため息をついたその時。

戸が叩かれる音がした。

母が顔をあげてトモキを見る。ぼくがでるから、と頷いて椅子をたつた。

「どちらさまですか」警戒しながら戸を開けると

「えへへ、来ちゃった」

カガミが立っていた。

「間に合ってます」

何が間に合っているのかよく分からなかったが、そう言って閉めようとした。するとカガミの足が隙間にガツと差し込まれた。

「ひどいなトモキくん開けてくれよう」

「オヤジに小娘みたいな台詞吐かれて実家に押し掛けられても困るんですよっ」

「可愛かった？ ねえ可愛かった？」

「全然ちつとも全く可愛くないっ」

戸をはさんでオヤジと二人もみ合っていると、母が変な顔してやってきた。

「どうしたの、トモキ。そちらさまは…」

諦めて戸を閉める力を抜くと勢い余ったカガミがおおつ、と転がり込んできた。

「ぼくの…」

なんだろう。教師？ 同居人？ 言い迷っていると、オヤジがえへへと笑って母にあいさつした。

「はじめまして、トモキくんのお母さん。ぼく、トモキくんの教師兼同居人兼友人のカガミと申します」

母はあらまあ、とほころび深々と頭を下げた。

「いつもうちのトモキがお世話になっております」

「はい、お世話しております」

カガミも合わせるように丁寧に頭を下げる。

世話をしているのはほくの方だ！ 心の内で叫んだが、黙っていた。

「どうして、ここが分かったんですか？」

「愛の力」

「…出て行ってください。さようなら」

「嘘だよ、うそぞそ。シラギさんに教えてもらっただ」

「無事だったんですか！」

立ち話もなんですからどうぞ、と家の中に勧められ改^{あらた}めて入ってきたカガミの姿に驚いた。

頭の天辺に寄せ集めている毛は所々縮れており、衣も黒く煤けていた。少し焦げくさい匂いもする。そして、大きな風呂敷を大切そうに抱えていた。

「もしかして…」

「あの部屋は焼けてしまったよ」

沈んだカガミの言葉にトモキは大きなため息をついて、椅子に座りこんだ。

焼けてしまった。あの部屋。大量の本を読み漁った。カガミと色々な話をした。一緒に酒を飲んだ。たまにそこにシラギが加わった。窓から見えた城下の町並み。夜になると家々の灯りが広がり、その風景が好きだった。七年間過ごした愛すべき空間は、炎にのまれ消えてしまった。カガミが大切にしていた本たちも共に消えた。しばらく鎮痛な沈黙が流れた。

「シラギさんって、以前こちらにいらした方？ その方は無事だったの？」

その空気を助けるように、母が口を出す。椅子に座ったカガミの前に白湯を置くと、オヤジがぺこんと頭を下げた。

「そっだ、シラギさまは」

「無事だったよ。ひどく疲れているように見えただけ」
もつともみんな疲れていたけどね。そう言っただけで白湯を啜った。
その後、宮廷がどうなったのかを根掘り葉掘り聞いたが、カガミも
詳しいことは分からないようだった。

「トモキくん」

名前を呼ばれて顔をあげると、カガミが畏ま^{かし}ってこちらを向いてい
た。

「ぼくは、君のおかげで生き延びることができた。君が起こしてく
れなかったら、真つ黒焦げになって死んでいた」

カガミが深々と頭を下げる。

「本当にありがとう」

「お星さま、ありがとうございます」

キヤラはいつものように、一番星に祈りをささげ感謝した。
だって、願いは届けられた。トモキがこの村に帰ってきたのだ。隣
村にお使いにいつて、その帰り道だった。馬を引いて歩く青年を見
つけた。見間違えるはずがない。トモキだった。まず心臓が高鳴っ
て、足が勝手に動いた。気が付いたら走り出して、抱きついていた。
はしたないことをと思ったが、トモキは優しく頭をなでてくれた。
そのことを思い出すと今でも顔がにんまりしてしまう。
嬉しさの余りトモキにくつつきまわり、どうでもいいことを報告し
た。

体が喜びで跳ねる。口が言葉を紡ぎだして止まらない。自分でもど
うしようもなかった。

だけでもトモキは微笑んで、それを受け入れてくれた。もう、叫び
だしそうなくらい幸せだった。

ずっとこのまま横にいたかったが、家の近くになって帰りなさいと言われ不承不承、家に帰った。トモキはそのまま、自分の家に連れていた少女と共に入って行ってしまった。

あの少女。

キャラは鼻に皺を寄せる。あの子は何なのだ。えらそうに馬にのって、トモキに歩かせて。あたしを変なものを見るような目で見ていた。挨拶も声もよこさなかった、暗そうな子。そんなに可愛いわけでもないのに。あたしの方が、ぜったい可愛い。

質のいい高そうな衣を着ていたから、もしかしたらトモキが仕えている人の子供なのかもしれない。

トモキが突然宮廷に上がった時は、悲しかった。親から聞いて悲しさの余り大泣きした。母親は、キャラはトモキちゃんに懐いていたものね、とほほ笑んだ。そんなんじゃない、と当時七歳の少女は思った。そんなに軽い表現で表わさないでほしい。これはもつと偉大なものなのだ。が、それをどう言っていていいか分からず、言葉はぐずぐずと消えていった。

宮廷に入ってしまったら、めったのものでは外に出られない。トモキに会える方法は、キャラが大学を卒業して、入廷するしか思いつかなかったが、到底不可能だった。そんな金は家になかったし、第一、勉強が嫌いだった。何でそんなものが必要なんだと思う。読み書きなんて、日々の暮らしには必要ないではないか。畑を耕すだけの毎日。

それでもトモキには、どうしても会いたかった。縋るものがほしかった。

だから、毎日一番星にお願いをした。

どうかトモキに会わせてください。お星さま。どうかどうか。

天は聞き入れてくれた。トモキが帰ってきた。

シシの村に帰ってきたのだ。

「そんな、あなた帰って来たばかりだというのに」

「ごめん、かあさん」

気丈なはずの母は、うるたえて息子を止めた。その顔に申し訳なさは募ったが、ただ頭を下げるしかなかった。

あれから数日が経った。都に関する噂はあまり流れてこない。情報がまったく入ってこず、ただ不安だけが増していく中トモキは一つに決意を固めていた。

宮廷の様子を探りに行く。

状況が分からなければ、動きようがない。動けるのは自分しかない。命の危険すらもあるかもしれないが、このまま手をこまねいているのは嫌だった。

「リウヒの事、よろしくお願いします」

「分かりました」

母に再度頭をさげると、母は溜息をついて目を閉じた。

「カガミさんもいるから大丈夫よ。くれぐれも気を付けて」

「うん、ありがとう」

奥の部屋から咳きこむ声が聞こえる。リウヒは、ここに来てから体調を崩し寝込んでいた。今までトモキが注意するほど、健啖だった少女が粥しか口を通さないのも心配だった。

寝ているリウヒを覗き込む。身を守るように丸く小さくなって寝ていた。うっすら汗をかいている。顔に張り付いた数本の髪の毛をとってやると、うわ言を二言、三言呟いて、苦しそうに眉を顰めた。なるべく早く、戻ってこなければ。

畑仕事の手伝いをしていたカガミにも告げ、ここまで乗ってきた馬の手綱をとった。

「危険すぎるよ、何も君が行かなくても」

「このまま何も分からないのは、嫌なんです」

それに、と続ける。

「まずは知ることが大事。そう教えてくれたのはカガミさん、あなたですよ」

手綱をめぐらせトモキが笑った。

「そうかい」

オヤジは頭をかいて馬上の青年を眩しそうに見上げる。

「リウヒさまを頼みます」

「うん。頼まれた」

カガミは大きく頷いた。

「行つておいで。無事を祈っているよ」

トモキが笑顔で応え、馬腹を蹴ろうとした瞬間。

「どこにいくんだ」

リウヒが戸口に立つて、馬上のトモキを睨みつけていた。擦れていたがその声は低く怒りをにじませている。

「お前はわたしを置いて、どこに行くんだと聞いているんだ」

トモキは一瞬、馬から降りてリウヒに駆け寄りそうになった。

すみません、ウソです。だからお願いですから、寝台に戻って横になつてください、どこにも行きませんから、ずっと横についていますから、と言つて一緒に家の中に戻りたかった。しかし、今ここで馬を降りたら自分の決心はぐらつくのは分かっている。すんでのとここで腹に力をいれて堪えた。

「ここで待つていてください」

馬の頭を巡らせて叫ぶ。

「必ず戻ります」

そのまま、振り切るように馬腹を蹴って駆け出した。馬は驚き大きく嘶いて走り出す。

小さくなつていく後ろ姿をリウヒは呆然と、カガミは厳しい顔をして見送っていた。

キャラがいつものように、トモキの家に行くと庭先に少女とオヤジの後ろ姿が見えた。

二人してなんだか真剣に話している。キャラが近づいてきた事も気が付いていないようだった。

オヤジは薪割りの最中らしく、汗をぬぐいながら少女の話に耳を傾けている。少女は偉そうに腕を組んで静かに話していた。キャラは木の木陰に身を隠し、二人の会話に耳をすませた。

「なんの話をしているの？」

と聞いたところで、素直に教えてくれる訳がないのは今までの経験上で分かっている。

トモキが帰ってきたと喜んだのもつかの間、あっという間にいなくなってしまうた。それを知った時は、鍋で後頭部を殴られたような衝撃を受けた。

すぐさま一番星をなじつたが、星はただ夜空に瞬くだけであった。

トモキが消えて半年が過ぎた。

が、この丸いオヤジと暗い少女は未だトモキの家に残っているのである。なぜトモキが消えてこの二人が残るのか。訳が分からず、トモキの母や、オヤジに聞いてみたがうまいことはぐらかされるばかりであった。キャラの母が

「もしかしたら宮廷の偉い人たちかもしれない」

と言っていたので、この二人がいればトモキは戻ってくる可能性は高いかもしれない。そう考えたキャラは、なにかと口実をつくってはトモキ家に入り浸るようになった。最大の口実は、暗い少女を「寂しそうだから慰めてあげる」である。

キャラちゃんは偉いね、と大人たちは褒めてくれたが、本当はリウヒという名の少女が嫌いだった。しかし、すべては自分の為…ではなくトモキの為だ。

改めて二人の声に集中する。

「でも、トモキくんはここで待ってるっていったよね」

「戻ってこないじゃないか。もう半年も経つぞ」

リウヒが鼻を鳴らす。

「ゲンブの町でトモキに似た男が見つかったんだらう?」

「な、なぜそれを」

「そして、カガミもそこに行くつもりなのだらう。冗談じゃない、わたしも一緒に行く」

キャラは何となしにその会話を聞いていて、再び鍋級の衝撃を受けた。

この二人は、ここから出ていく相談をしている。仮にトモキがこの村に戻ったとしても、宮廷の偉い人たちである二人の後を追いかけるだらう。その時に、一緒に連れて行ってくれと懇願しても受け入れてくれないに違いない。

そうすれば、また会えなくなる可能性は高くなってしまふ。一生会えないかもしれない。

どうしたらいい、あたし。考える考える…!

「それこそ冗談じゃないよ、君はここに残りなさい」

「嫌だ。トモキに会って散々文句を言つてやる」

「ゲンブの人が彼だつて確証は、全然ないんだよ」

二人はまだ言い合っていたが、どうやらオヤジが根負けしたらしい。

「ああ、トモキくんに怒られちゃう。でも、王女さんをお願いしますっていわれたし、トモキくんには借りがあるしなあ」

とブツブツつぶやいていた。王女?何をいつているのだらう。目の前にいる、この暗い少女が王女だともいうのだらうか。キャラは吹き出しそうになった。まさか。王女さまと言うものはもっと立派な人に違いない。

それよりも、自分の事だ。この二人についていけば、トモキに会える確率はうんと高くなる。キャラの脳みそは、未だない事回転して計算した。そしてたどり着いた答えは。

よし。

キャラは、息を整えると木陰から飛び出した。オヤジと少女が驚いている。

「あたしもついて行く！」

リウヒが目を見開いたまま凍りつき、その横でカガミがゆっくりと倒れていった。

君にもご両親がいるのだらう、まずはご両親の許可をいただいてからだよ、というオヤジの言葉をうけ、急いで家に帰った。

許すはずがない、という言外を感じさせる言い方だったがキャラは鼻で笑った。

子供の知恵を見くびるなよ。

幸いな事に母は台所にいた。

「またトモキちゃんの所にいつていたの、夕餉の支度をするから手伝ってよ」

その母にまずは良い子ぶってお願いしてみる。

トモキのところにいる二人が、旅立とうとしている。自分はこの村しか知らないから、この機会に二人について行って外の世界を見て自分を高めたい、と。

我ながら説得力がないな、と思った。外の世界なんぞみてどうなる。何を高めるといふのだ。世界はこの村の中だけで十分だ。

案の上、母は一笑に付した。

「何を馬鹿な事いつているの」

仕方がない、次の作戦だ。

母をしゃがませ、自分と同じ目の高さにする。

「いい？ お母さん」

目に力を込めた。

「トモキさんのところにいる二人は、お母さんがいう様に宮廷の偉い人よ。女の子の方は王女さまかもしれない」

そうはみえないが、今は吹いておこう。

「トモキさんは、何かしらの縁で宮廷に上がったわよね。そしてこの村に残された弟さんとお母さんにはそこその金額が支払われているはず」

だって、あの弟は遠い町の中学へ行き、下宿すらしているのだ。母の目の色が変わってきた。もうひと押しだ。

「もしも、あたしがあの二人についていくことで、宮廷にあがることになったらお家の家計も楽になるかもしれない」

最近、税が増えて父の酒代すらバカにならなくなってきた。家計は苦しい。親は何も言わなくても、子供には分かる。

「だから、お願い。行かせてください」

母は泣いた。最後のひと押し。

「あたしは、絶対大丈夫だから。だって、お母さんの子供だもの」

子供が笑い声をあげている。

両親に囲まれ甘えたように。その空間だけ幸せな空気が漂っている気がした。いや、そこだけではない。酒場に集うそれぞれの客が酒を飲んで楽しそうに騒いでいる。隅で愛を語らっている恋人たちも、仕事上がりであろう大工の団体も、常連のオヤジたちも、何の集まりなのか女性の集団も。

なぜ人は連つらみだがるのだろう。一人でいた方が楽なのに。

カグラは大勢で行動を共にしたことはない。いつも一人だったし、寄ってくるのは女ばかりだった。

ひっそりと笑いながら猪口を口に付けた。

外に出てから、ただ町から町へと彷徨うだけのつまらない日々を送っている。それを考えるとあそこは中々面白いところだった。最後、見事な炎を舞い上げ消え去った宮廷。

いや、意外な人を発見した。接触しようか、どうしようか迷ってい

る。

肴をつまみつつちびちび飲んでいると、扉が開いて背後の空気が一瞬揺れた。つられてカグラもそちらを見やる。

女が一人、入ってきた。人々の視線を引き連れて。

金色の髪を結わずにそのままおろしている。衣は以前よりは大人しいが、そこにいるだけで相変わらず目立つ。知っている顔だった。

その女はカグラの顔を見つけると、目を見開いたものの何も言わずに横に座った。酒を注文してつまらなさそうにカグラを見る。

「外に出たのね」

カグラが笑顔を浮かべたが、無言だった。

「年増女にくつついているものだと思っていたわ」

無言。

「どうせあれもすべてあなたの仕業なのだろうけど」

無言。

ま、あたしには関係ないけどね、と呟いて運ばれてきた酒に口をつけたマイムにカグラも口を開いた。

「あなたも外に出たのですね」

マイムは明後日を見て無視した。

「宮廷の中で踊りあかしているものだと思っていました」

無視。

「どうせシヨウギが嫌で外に出たのでしょうけど」

無視。

まあ、わたくしには関係のないことですけれどもね、と呟いて再び猪口に口をつけた。

しばらく、言葉を交わさずに黙々と酒を飲んでいた。お互い別々の方を向いて。

宮廷一の踊り子だった女と、国王の愛人が夢中になった男は、まったく酒場にそぐわず浮いており人目を引いた。が、その間にながれる空気は極度に冷え切っていて、みな見て見ぬ振りをしていた。

そつえば、とカグラがぼつりと言った。

「この町で王女を見かけました」
マイムが弾かれたようにこちらをみる。

「御前試合で一度しか拝見したことがなかったのですが、わたくしは人の顔は忘れない性分です。あの方は間違いなく王女でした」
「人の顔、じゃなくて女の顔でしょう？」

目の前の女が睨みつけるように見つめてくる。

「何を考えているの？」

それはまるで燃えているように光っていた。

カグラはこの女のこういふところが好きだった。今まで周りにいた女は、好意しかよこしてこなかった。その大きさに違いはあっても、たとえカグラに興味を示さないものがあったとしても、甘い言葉を二言、三言ささやけば、尻尾を振って寄ってくる。

マイムは最初から違った。初めて接触した時は、シヨウギに喧嘩をこつそり売り、カグラに対しては、どこか投げやりな態度だった。

そのくせ仕事はきっちりこなしてくる。他の間者よりよっぽど役に立った。

マイムと話すことが、認めたくはないが心地よかったのだと思う。だからあの時、うっかり漏らしてしまった。別に後悔はしていないが。

喧嘩を売るような棘のある声でマイムが言う。

「あたしも一緒に行くわ」

その言葉を待っていた。

もしかしたら。

ふとカグラは思う。

もしかしたら、おれはこの女を相当気に入っているのかもしれない。

気に入らない。むしろ嫌い。

それがキャラのリウヒの対する評価だった。

カガミと言う名前のオヤジとリウヒと行動するようになって、数日間が過ぎた。ゲンプの町に着いて搜索しても、トモキらしき人はいなかった。

しかも。キャラはイライラと爪を噛む。あたしとカガミが手をつくして町中探し回っているのに、あのリウヒはのんびりと宿で待っているのだ。だから本人に怒鳴ってやった。横でカガミは真っ青になっっていたがそんなの、構わなかった。

リウヒも目を丸くして聞いていたが、

「それもそうだな」

とあくる日から外に出るようになった。なにがそれもそうだな、よ常識が欠落している。完全に欠落している。言われなきゃ動かないなんて。

一緒にいたカガミというオヤジも頼りがいがあるのかないのか分からない人だったが、いないよりはマシだ。時々、訳の分からない事を聞く。

「例えばだ。ある人がいる。その人は自分の為だけに他の人を苦しませている。君たちは苦しめられる方の立場だ。だが、その人を倒そうと思えばできるんだ。大変だけどね。

さあ、どうする」

「あきらめる」

二人は口をそろえて答えた。

「だって、大変なんだろう」

「あきらめて受け入れた方が楽なもの」

オヤジは額を机に付けて撃沈していた。

「キャラくんはともかくリウヒくんまで……。ぼくたちは一体何を教えていたんだろう」

とかなんとかブツブツいつている。

リウヒにどうしたのこの人、と聞いてもさあ、と首をかしげていた。だけど、さすがお偉いさんだわ。お金の心配はない。

リウヒが別珍べっちゃんの袋に入れた、宝珠を持っていた。子供の拳ほどもある。キヤラはともかく、カガミも初めて見るものだったらしく、あの騒ぎの中でよくこれだけのものを持ち出したねえ、と感心していた。

が、リウヒ曰く

「これで殴れば、痛いだろうと思って」

どうやら武器のつもりだったらしい。カガミとキヤラは一瞬絶句した後、同時に大きなため息をついた。これから大丈夫なのだろうか、不安になった。

旅立つ日。

母と兄は、涙ながらに見送ってくれた。父はしよげたふりをしながらも、どこか嬉しそうだった。きつとキヤラの顔が金に見えたのだろう。

そんなものよね。

そのままトモキの家に行くと、丁度別れの最中だった。

トモキの母が、リウヒの顔に手を当て泣いていた。

「あんなに小さな子だったのに、本当に大きくなって…」

顔に手を当てられた少女は、真っ青になって硬直していたが、みるみるそれが歪んだ。

「つらくなったらいつでも帰っておいで。ここはあなたの家でもあるのだから」

リウヒは、目から大粒の涙を流しながら「あ」と声を上げた。

「ありがとう」

それから小さな声で呟いた。

「かあさん」

トモキの母は耐えられず、リウヒを抱きしめた。そのまま、二人は崩れ落ちるように座り込み、お互いの肩に顔をうずめて泣いた。

その後ろではオヤジが一人、袖を濡らしていた。
やめて。

キヤラは思わず目を背けた。自分の家と比較してしまう。己が仕向

けたことだったが、「つらくなったら帰ってこい」などキャラの親は言わなかった。リウヒがトモキの母に「かあさん」と言ったのも腹が立つ。

静かに泣く三人を、キャラは冷めきった気持ちで見ている。あの場面を思い出すたびに、悲しいような、苦しいような、腹立たしいような変な気分になる。

宿に戻ると、カガミがいた。宿は一階が酒場、二階が宿泊部屋となっている。

「ああ、いまリウヒくんは来客中だから」

それがどうした。キャラはオヤジの声を無視して階段を上がった。声もかけずに部屋の扉を開ける。そして自分の目を疑った。

見たことがないほどきれいな女の人と男の人が、二人揃って自分と同じ年の少女に跪礼をしていた。最高位の礼の型である。リウヒが「あ、キャラ」と声を上げたが驚きのあまりそのまま扉を閉めてしまった。

急いで下のカガミの元へ走る。

「リウヒっていったい何なんですか」

「君と同じ年の女の子だよ」

それは分かっている。

「あの子って本当に王女さま？」

カガミは、つまみを食べる手を休めてしばらく考えていたが

「それは違う」

と言った。なんだ、やっぱり違うのか、と納得するキャラの耳には「まだね」と呟くカガミの声は聞こえていなかった。

声が聞こえる。

マイムの名を呼んでいる。掠れて弱弱しく何度も。

腕の中をみると、トモキが死んでいた。その体が急に重くなって冷えていく。早く、早くお医者さんと呼ばなくちゃ、お父さんお母さん早く、ねえ助けて…！

そこで目が覚めた。窓から見える外は快晴で、小鳥が鳴いている。寝汗がひどい。額を拭った時に、ふと自分が泣いていた事に気が付いた。

久しぶりに見た夢。トモキの話聞いた影響だろうか。

昨夜、カガミとカグラ、マイムは一階の酒場でそれぞれ情報交換をした。少女二人もくっついてきたが食事がすむと眠くなったようである。気が付くと二人とも机に突っ伏して寝息を立てていた。大人三人は苦笑してカガミとカグラが少女らを抱き上げ上へ運んだ。不思議な事に王女は、体を抱えられても何の反応も示さずぐっすり眠っていた。

昔、起こそうとして手を振り払われたマイムは感慨深げにその後ろ姿を見送った。もう平気になったのかしら。それともよほど疲れていたのかしら。戻ってきたカガミも首をかしげていた。

カガミからトモキの無事を聞いてほっとしたのも束の間、また単独都へ戻ったまま帰ってこないという。

「この町で見かけたという噂を聞いてやってきたんだけど、どうやらガセだったみたいだしね」

「これからどうされるのですか」

「それなんだけど」

今宮廷にのこのこ戻ったところで、殺されるのは目に見えている。せっかく外にでたのだから、しばらく色々な所を旅して王女に色々な体験をさせてやろうと思って。

「人間、成長するのは旅と人と接する事と本を読む事っていうしねいけしやあしやあとぬかすオヤジにマイムは呆れた。

「なんて素晴らしい」

横の男が声を上げた。明らかに面白がっている声だ。

「是非ともご同行させてください。腕には自信があります」

こいつ。マイムはカグラを睨みつけたが、それぐらいで動揺する男ではない。かといって目をはなせばトモキが大切にしている少女に何をするのか分かったものではない。

「トモキはどうなるのよ。無事かどうか分からないのに」

「運がよければ幽閉、悪ければ殺されているでしょう」

そんな、とマイムは声を上げる。

「シラギさんがいるし、殺されている可能性は低いんじゃないのかな。でも、この事は王女さんに内緒にしておいてね。トモキくんを見かけた人がいる、といって動かすからさ」

このタヌキオヤジ。心の中でマイムは毒づいた。何を考えている。それについてもカグラは賛同している。そんな男二人を見ながら、ふと奇妙な感覚にとらわれた。以前、こういう光景を見たことがある。いや、聞いたことがある。

ああ、思い出した。幼いころ、弟のトモキに聞かせてやった昔話だ。キツネとタヌキの化かし合い。

「面倒な事になるからね、王女さんというのは隠して君たちも砕けた調子で話すようにしてね」

タヌキが口を開く。

「どうせなら王女を働かせましょう。本人の成長にも一役買つと思えますが」

キツネも調子を合わせる。

マイムは目眩を感じながら宿の階上に引き揚げたのだった。

女部屋の粗末な寝台では少女が二人、それぞれ無邪気な顔で寝息を立てている。

リウヒはあたしが守る。目の前で眠りこける少女の寝顔を見ながらマイムは決意した。

カグラがこの子に何かしでかしたら、その時はあいつを殺してやる。

外の世界 2

暗い洞窟、水滴の音が響いている。頼りない灯ともびの中でトモキは必死になつて石の隙間を掘っていた。指先の皮は破れて膿んでいる。触れると激痛が走る。それでも狂つたようにトモキは手を動かす。聞きなれた足音がした。急いで体勢を変える。

「よう、坊主。飯持ってきたぞ」

牢の看守、シクロがのっそりと格子越しに顔を覗かせた。

「ご飯はいらなから、鍵をください。もしくはぼくをここから出してください」

「そうしたいのは山々なんだが、おれも仕事でね」

乱暴に盆を押し込むと、同情するように豊かな顎髭を撫でる。

「飯は食え。人間、何が大事つて体力だからな」

トモキはため息をついて、下を向いた。

約一年前、その城下で宮廷の事を聞きまくつた。早く情報収集して家に戻りたかった。その焦りがいけなかったのだろう、兵に捕まりあつと言つ間に軟禁された。

自分の迂闊さを恨むには、あとの祭りだった。

同時期に同じく牢に入れられた人々は、一人、また一人と姿を消して、トモキだけが残つた。彼らがとうなったのか、想像にしがたくない。

シクロはまだ宮廷に慣れていない頃のトモキに色々親切に教えてくれた恩人でもある。数年前は警備兵だったが、今は看守として宮廷の外れの牢に努めている。

昔と違い何を聞いても黙りこみ、欠片も答えてくれない。ただ「飯は食え」と繰り返すのみ。

「……大切な人がいるんです」

リウヒは、あの家で待っていてくれていただろうか。待っているに違いない。母とカガミと一緒に。相当怒っているだろう。会えば必

ず文句の一つや二つや十や百は言うだろう。

「もう少しの辛抱だ。おれがなんとかしてやる。だから下手に足掻かず大人しくしてろ」

驚いて顔を上げると、シクロはもう背を向けて立ち去っていた。

それから数日後。

人の足音が近づいてくる事に気が付いた。シクロのものではない、聞いたことのある足音。まさか。

「シラギさま！」

シラギだった。懐かしさと腹立たしさがこみあげてくる。聞きたい事もたくさんあった。

しかし、シラギは静かにするよう身振りで示した後、小声でトモキに告げた。

「看守に話は聞いた。時期を見計らって外に出す」

そのまま、出て行こうとする。その背中に

「王女はご無事です」

これだけは言いたかった。

シラギは一瞬顔を歪めたが、「頼む」と一言呟くとそのまま去ってしまった。

「坊主」

焦れるほど長い時間が経過して、シクロがやってきた。

「西門から出る。話についている」

「シクロさん、ありがとございます。でも、どうしてぼくにこんな……」

良くしてくれるんですか。トモキに全てを言わず、男は急かした。

「早く行け。ばれたらおれもシラギさまもただじゃ済まねえ」

深々と頭を下げて、湿った石畳の階段を上る。一年ぶりの外の開放感を味わう余裕もなく

、全神経を使って慎重に動いた。肌を差す冷気と朧の日の気配からして、まだ早朝なのだろう。西門の門番はトモキを見ても見ないふりをしてくれた。城下に出る。走れば多分目立つ。何げない振りを

よそおい歩くだけで息が切れた。それでも気は急ぐ。早く、早くシシの村に。リウヒの元に。焦る気持ちを抑えながらトモキは黙々と歩いた。

息も絶え絶えに、シシの村に戻ったトモキは愕然とした。

何とリウヒはカガミと共に、トモキを探しにゲンブの町へ向かったという。半年も前に。疲れきった体にこの衝撃はこたえた。思わず手をついてへたり込んでしまった。母があわてて駆け寄る。その母をなじりたい。なぜ、止めなかった、行かせたのだと。目の前に広がる床を見ながら責める声が頭の中に聞こえる。

リウヒとカガミにも腹が立つ。どうして待っていてくれなかったのだ。自分は必ず戻ると言ったではないか。

いや、悪いのは自分だ。自分の失態で捕まり一年近くも戻らなかった。

母も、肩を落としてトモキの前に座っている。両手はトモキの肩に置いたままだ。

しばらくそのまま二人止まっていた。遠くで鳥の鳴く声がする。立ち上がらなければ。立ち上がってゲンブの町へ行かなければ。それでも力が入らなかった。このまま、ずっと黙って座っていたかった。

「あの子が……」

母が小さな声で言う。

リウヒの事を言っているのだと分かった。

「ここを出ていく時に……」

「うん」

「わたしの事をかあさんと呼んでくれたの」
そういつてはらはらと涙を流した。

「うん」

「それまでは、ずっとよそよそしかったのに……」

かあさんと呼んでくれたの、と母はもう一度繰り返した。

肩に置かれていた母の手に、自分の手を添える。水気を失って乾いた手を握りながら、リウヒを探しに行こうと思った。東宮でも、よく練り広げたではないか。ぼくはいつだってリウヒを追いかけている。

目の前のリウヒにキャラは口を尖らせた。

「なんで？なんでそんなに不器用なの？」

「好きでそうなったわけじゃない」

自分の指に針を突き刺したりウヒも応酬する。

「キャラの刺繍だって、見本とまったく違うじゃないか」

「うるさいっ」

「はいはい、それくらいにして口より手を動かさなさい。明日中に仕上げなきゃいけないんだから」

マイムが呆れた声を出すと少女たちはお互いを睨みつけ、大人しく手を動かし始めた。三人の前には大きな布があり、これに刺繍を施す仕事を請け負ったのだが、仕上がりに程遠かった。あとで、カガミとカグラにも協力させよう。針を手取るオヤジの姿にも笑えだが、刺繍作業をするカグラを想像してマイムは吹き出しそうになった。

ゲンブの町をでて約半年が経つ。

カガミの目論見どおり、トモキを探索するという名目であちらの町、こちらの村と言う風に王女を連れまわしている。この町で三つ目だ。その度に「働かざる者、食うべからず」の精神で色々な仕事を請け負った。

「お金は無限にあるものじゃないからね。宿代もけっこうバカにならないんだよ」

とカガミが少女たちに諭していたが、実は稼いだお金の大半は、大

人三人組の酒代に消えていた。

物心ついたときから後宮暮らしで「お金」の概念が全くなかった王女は、その仕組みに大層驚いていた。そんな事も知らなかったの、信じられな―いと笑うキャラに

「知識はあつたけど、実感がなかった。やるのとやらないのでは全然ちがうんだな」

と一人で納得していた。

逆にキャラはしっかりしていた。

宿さがしても口をだしてくる。物を買うときも値切ろうとする。

「お酒なんて、飲めばなくなっちゃうじゃない。どうしてそんなに飲むの？」

と目を吊り上げて言う少女に、オヤジが真剣に反論した。

「古代より酒は人々にとつて欠かせないものなんだよ。癒しの効果もあるし、一緒に飲むことでより近い気持ちが生える。生活を営む人間の間に行われる知識、感情、思想の伝達をより豊かにできるんだ。また、その事によって己の動機づけの向上、さらに強い仲間意識の強化だつて図れるんだよ」

「じゃあ、あたしも飲みたい」

「ダメ」

愛想がよくて大人の輪に入りたがるキャラと、無愛想で人見知りするリウヒは対照的だつたが、頑固なところだけは共通していた。ゆえに争いが絶えない。大人から見ると微笑ましいものだつたが、当人同士はいたつて真剣なのだろう。

「ねえ、マイムさん」

キャラが焦げ茶色の目で見つめてくる。

「ここにもトモキさん、いないのかなあ」

小さな肩を落としている。罪悪感がちらりと疼いた。

王女はともかく、この少女がただただトモキに会いたい一心で、行動を共にしているのは気が付いていた。

トモキの話をする度に瞳が輝く。表情が華やぐ。それはもう嬉しそ

うで背後に花でもしよっているのかと思うくらい周りが明るくなつた。

同期や後輩の中にも、恋愛の話をするものもみな一様に同じだった。相手の話をする度に顔を輝かせる。片思いから光を増し始め、両想い寸前で光は最高潮に達する。しかし、いざ付き合いを始めたり結婚してしまつたりすると、輝きは不思議な事に急速に失われるのだつた。

マイムが口を開こうとしたその時、カグラが部屋に帰ってきた。

「あ、丁度よかつたわ。手伝つて」

針と刺繍糸を渡す。

「わたくしがですか」

「ええ、あなたが」

少女二人がクスクス笑う。

カグラは仕方なさそうに椅子を引き寄せると娘たちの輪に加わつた。刺繍なんてやったことがないというカグラに、キャラが教えている。その横顔を見て、小さくても女なのね、と苦笑した。

リウヒは黙って真剣に手を動かしている。たまに指に針を刺して、痛そうに手を振っていた。

「すごいカグラさん、うまい」

呑み込みの早い男なのだろう、器用に針を動かしては鮮やかな手つきで進めていく。その姿も様になっていて、マイムはなんだか面白くなかつた。うっかり見とれていたら、カグラが一瞬、得意そうにマイムに視線を投げかけた。

思わず顔を顰める。負けるものか。

それから、しばらく四人は黙々と針を動かしていた。余りにも夢中になっていたのでカガミが帰ってきてても、誰も気が付かなかつた。

「いやあ、がんばっているねえ」

その声にみな弾かれたように驚き、散々文句を言ったあとと哀れなオヤジも巻き込んで再び針仕事に精を出し始めた。

手の感覚がおかしい、と目の前の男がこぼす。ぼくもだよ、とその横のオヤジも同意した。

「まあまあ、お疲れ様でした」

と二人の猪口に酒をついでやるとしなやかな腕と、丸い腕が同時に伸びた。

刺繍は見事に完成した。

その布をマイムが広げると少女たちは歓声をあげ、カグラはぐったりと壁に寄りかかり、オヤジはきれいな円を描いてひっくり返った。どおんと音がした。

「やっぱりみんなでやると早いわねえ。また手伝ってもらおうかしら」

と男二人に流し眼を送ると、カグラとカガミは同時に首をふる。それをみて少女たちが軽やかに笑う。

「刺繍仕事は金になるんだぞ」

「それにすごく楽しかった」

そう、楽しかった。

ただ針を動かしていただけなのに。五人とも無言で、ただ手を動かしていただけなのに。なぜなのだろう。

「ずっと同じ姿勢でいたからでしょうか、妙に肩が痛いのです」

「ああ、それ凝っちゃったんだよ。ぼくも痛いんだよ。きれいなお姉さんに揉んでもらえば、治ると思うんだけど」

「湯につかれば治ります」

ぴしゃりというと、オヤジはしよげた。

でも、あのカグラが一瞬みせた得意そうな顔。思い出す度笑ってしまふ。子供が見せるような、無邪気な顔。澄ました表情しかできないと思つたら、あんな顔もできるんじゃない。

いや、でもだめだ。この男は何を考えているのか分からない。油断はできない。

マイムは慌てて顔を引き締めると、目の前の酒をあおった。

目の前で恐縮するように頭を下げる副將軍たちに、シラギはため息交じりに言った。

「おもて面をあげてくれ、もう終わったから。報告してくれて助かった」
「いいえ！」

宮廷軍唯一の女性である副將軍モクレンは強い口調で遮る。

「中將軍の管轄とはいえ、目の行き届かなかつたわたしの不始末に
ごさいます！ 何卒、お咎めを！」

「何を言う、小娘めが」

その隣で同じく腰を折っていたもう一人の副將軍、タカトオが吐き捨てるように口を開いた。

「一人いい子ぶろうとしたってそうはいかん。シラギさま、この老人にも責はございます。ぜひお戒めはこのわしに！」

「貴殿には関係ないだろう、しゃしゃり出てくるな」

「連帯責任じゃ、馬鹿者が」

器用にお辞儀をしたままの体制で、老人と女は低次元の言い争いを始めた。

「いいから」

シラギのため息はますます深くなる。この二人はいつだってそうなのだ。仲良く喧嘩をしながら自らの孫だのをお勧めしてくる。

監視役の男たちに金を握らせて、外に出しておいて正解だった。

「タカトオ、モクレン。仕事に戻れ」

副將軍たちはびたりと口を閉ざすと、もう一度礼をしてそれぞれの卓に戻った。

宮廷はシヨウギの天下となっていた。意気揚々と朝議に出席し、王気どりで口をはさむのだ。その周りを固めているのは、甘い汁を吸おうとする奸臣たち。喜んで暗躍している。しかし、宰相は何も言

わず諦めきつたように政務を進めていた。国王は寝台に伏せつたままで、まったく表に出てこない。

シラギも混乱したままの軍や、兵士を整理するのに必死だった。それ以上に、上から雑務を押し付けられる。あつという間に一年が経った。そんな中、西牢獄の看守、シクロからモクレン経由で報告があった。トモキが投獄されているというのである。騒ぎからしばらく後、城下で宮廷の様子を探っていたらしい。

城下及び国内の治安を統べるはずの中將軍は、只今賄賂請求とシヨウギの胡麻ごま播りで大忙しだ。

「信用できる人間がなかないませんで」

シラギにふてぶてしくも、髭面の男シクロはそう言った。

「看守の一存では中々動けません。後ろ盾が必要な訳で」

「分かった」

急ぎ西牢に駆けつける最中、ふとシクロに聞いた。

「お前はトモキと知り合いだったのか」

「そう言われれば、そうなのですが」

シクロは前を見ながら淡々と答えた。

「惚れた女の息子を守りたいと思うのは、男として当然ですから」
シラギは何も言わなかったし、言えなかった。

洞窟に手を加えただけの牢の中にいたのは、やはりトモキだった。すぐに逃がした。一年も放置していたなんて。申し訳なさと共に腹立たしさも湧いてくる。なぜ、わざわざ火に飛び込んできた。

だが新しい情報も入った。王女は無事だ。

ため息をついて、背もたれに寄りかかった時、扉が叩かれた。

宰相が倒れたという。シラギは椅子を立ち、急いでその元へ向かった。

確かに父は寝台に横たわり苦しそうに息をしている。

「すまんが、下がってはもらえんかね」

宰相はシラギと自分の監視の男たちに言う。

「これが息子への最後の言葉になるかもしれん」

男たちは、顔を見合わせると黙って頷き部屋を出てくれた。扉の前で待機しているようだ。多分買収でもされているのだろう。彼らが出て言った後、宰相はよいしょ、と起き上った。

「お、起き上がられて大丈夫なのですか」

シラギがうるたえた声をだすと

「む。仮病じゃ」

とケロリとした顔で答えた。

「何かしら理由がないと、ゆっくり話ができんからな」

「……」

「頼みがある」

「はい」

「先日、王女は生きていると言っておったな」

声をひそめて話す宰相にシラギは頷いた。

「その王女を宮廷に連れ戻してくれ。そして王座に付けるのだ」

「しかし、今の状態では難しいでしょう」

なあ、息子よ。と宰相は小さな声で呟いた。

「わしは、王の血を引いてない者にこれ以上頭を下げたくないのだよ。王の愛人としてならいくらでも下げよう。しかし、その血を一滴もひいておらぬものを王として崇め、頭カウを垂れるのは我慢がならん」

それならいっそ、あなたが王になったらどうです。とは言えなかつた。

その心を読み取ったように宰相は続ける。

「人はそれぞれ矜持というものがある。あのシヨウギでさえもっているだろう。そしてわしの矜持とは、三百年続いたこの王家に仕えることなのだ。今更その血を引いていない輩やからに仕えることができるか」

それはそのままシラギの心でもあった。

「もしかして、今まで知らぬ振りをしていたツケが来たのかもしれない」

見て見ぬ振りをして、その場をやり過ぎす。王を諫める立場にありながら、己の身が可愛くて黙っている。自分の考えに蓋をして、ただ与えられた仕事だけをこなす。

そして国は傾いていくのだ。今はその兆候が見えなくとも、長い目で見れば確実に沈むだろう。たとえ、シヨウギが王になったとしても、甘言しか聞かない彼女が優れた政治をする訳がない。

「分かりました。行ってまいります」

「宮廷の事は心配するな、内側から固めておいてやる」
頷いて了承した。

「ただし王女を見つけたとしても、すぐには戻ってはならぬ」

宰相は髭をしごきながら、思案顔で言う。

「国王が崩御してからじゃ。わしが舞台を用意しよう」

政治家の顔で笑う父を目の前に、シラギは呆れた。また、舞台上に立って踊らなければならぬのか。御前試合どころではない、国と言う舞台だ。しかも踊るのは王女。

「父上」

「なんじゃ」

「もしかして楽しんでおられるのではないですか」

「楽しんでいても。今までの恨みを晴らしてやるわ」

この人は何を言っているのだろう、こつこつ性格だっただろうかといふと訝る。もしかしたら壊れてしまったのかも知れない。

外の世界 3

壊れた場所に当て木をして、藁を巻きながら思う。

人間、分らないものだな。

自分がこんな事をしていて、しかも楽しいと感じているなんて。

カグラは青空の下、村の柵の修繕をしていた。隣ではカガミがふうふういいながら汗を流している。あまり器用でないらしく、木を落としたり結んだ藁が緩んだり、絶えず小さな悲鳴を上げている。

背中には熱い視線が張り付いていた。大方、この家の娘が嫁だろう。振りかえると、人影が慌てて窓から離れた。小さく笑って作業に戻る。

カガミとカグラは大抵外での仕事を請け負う。カガミは元々大学の講師である。学問一筋、外で働いた経験はない。カグラも太陽の下で働いたことなどない。

「でも男の人は外で働くものでしょう」

「外の方が、割がいいんだぞ」

「じゃあ、刺繍する？」

とマイムが笑顔で針と糸を見せたので、男二人は慌てて首を振った。あんな思いはもうごめんだ。外で体を動かしていたほうがいい。いい歳をした男たちは初めて陽の下で汗を流すことになった。しかし、やってみると案外楽しい。

おれって、意外と家庭的な男だったかもしれない。

ふと感慨深げにそう思ったりもした。

「あれ、リウヒくんじゃないか」

坂の下を、藍色の頭がひよこひよこ動いている。どうやらリウヒが弁当を持ってきたらしい。

「弁当もってきたぞ」

カガミがさあ休憩だーと、嬉しそうに竹かごを開けると、固まった。「リウヒくん、これなに」

その手には崩れた飯の塊が乗っていた。

「握り飯じゃないか、見れば分かるだろう」

「分らないよ、これじゃあ可哀想なご飯だよ」

「失礼な」

リウヒは、拗ねたように鼻を鳴らした。

カグラも一つとって食べた。一応、飯の味はした。

「美味しいですよ」

少女は嬉しそうに笑う。

風がふいて、カグラとリウヒの髪をそよがせた。カガミのほつれ毛もなびいた。

遠くにティエンランの都が見える。宮廷も小さく見えていた。修復工事は未だ進められている。あそこを出てから一年半近く経つ。

「外に出て良かった」

リウヒはぼつねんと呟いた。

「あの中だけが世界だと勘違いしていた。視野が狭いということは恐ろしいものだな」

「世界というものは、もっと大きなものだよ」

カガミが隣で微笑んだ。

「でもそれに気が付いただけでも進歩だ」

「いつか、わたくしが連れて行ってあげましょう」

気が付くとそんな事を言っていた。

「海を渡った遠い世界へ」

うーん。とリウヒが変な声を上げた。

「気持ちは嬉しいし、すぐく行きたいけどやめておく」

そんな返事は初めてだ。

「なぜです。わたくしの何がいけないのですか」

「マイムがカグラには気を付けろって。あれは天性の女たらしだから信用してホイホイついて行っちゃあいけないって。なあカガミ、女たらしでなんだ」

あの女。

眉を顰めるカグラの横で、カガミが丸い体を震わせて必死に笑いを堪えていた。

宿に戻ると、マイムとキャラが待ち構えたように転げてきた。

「何かあったのかい」

マイムは無言をいわずカグラとカガミを引つ張って行く。キャラはリウヒに「あんた何もんなの？ねえ！」と問い詰めていた。

「シラギが来たのよ」

思わずカガミと目を合わせる。今更何の用だろう。

「王女の行方を知っているかと聞くから今いないって答えたら、また来るって。でもキャラにリウヒの正体ばれちゃって」

「その他にはばれていないのでしょうか」

「今更何をしに来たのかしら」

同じ疑問をマイムが口にした。

「連れ戻しに来たか、同行しにきたか、その両方じゃないの？」

マイムとカグラがオヤジをみた。

「まさか、殺しにきたなんてことは」

マイムが口に手を当てる。

「それはないでしょう」

とりあえず、シラギと話してみたら、と言う事でまとまった。部屋にはいるとキャラが怒り狂っており、リウヒが困った顔で立っていた。

「信じられない」

小さな体から怒りを発しながら言う。

「みんなして騙していたなんて」

マイムとカガミが、カグラをずいといと前に押しやった。そして早々と退散する。

専門分野でしょう、ひとつよろしく。

カグラは苦笑して、椅子に腰かけた。

「騙していたわけではないのですよ」

「騙していたわ」

腕をくんでカグラをにらむ少女。

「申し訳ありません。でも、あなたの為だったのですよ」

「あたしの為？」

キヤラの目が揺れ動いた。

「王女と知られると危険が高くなります。それを回避し、あなたをも守ることが大切だったのですよ。結果的にあなたを苦しませることになってしまいましたか…」

「もういいよ」

キヤラは笑っていた。たとえ小さくても女は女。「自分は特別」という意識を持たせればよい。そして原因をうやむやにする。もしくは正当化する。

「やっぱりキヤラには笑顔が似合いますね」

やだもう、と照れ笑う少女を尻目に、もう一人の少女は黙って階下にいき、そこにいたマイムとカガミに「女たらしがどういうものか分かった。今、分かった」と報告した。

まったくもって分からない。

シラギは王女の周りにいる面々をみて驚いた。

講師だったカガミ。元踊り子のマイム。王の愛人の愛人のカグラ。

村娘のキヤラ。

何だこの脈絡のない面子めんつは。

てつきりトモキと二人でいるのだと思いこんでいた。ところがその行方が知れないという。

「いろんな所で目撃されているから探してはいるんだが」

「なかなかつかまらないんです」

そういう少女たちに大人の方は目を背けた。

王女に会えてよかった。思ったよりもあっけなく見つかった。

絹ではなく粗末な綿の衣を着ているリウヒは、その辺の少女と全く見分けがつかず本当に普通の娘のようだった。「何しに来たんだ」とシラギをみて笑った。

五人で宿の夕餉をとった後、マイムがあなたたちはもう上に行きなさい、という少女二人は声を揃えて「嫌だ」と反発した。

「いつものけ者にして」

「今日はずつといてやるんだから」

ねー。頷き合うと、食卓にへばりついた。

「そうかい、じゃあ仕方がないねえ。今日は特別だよ」

わあい、と嬉しそうに喜ぶリウヒとキャラだったが数分も経たないうちに飽いてきた。

カガミの話が難解すぎるのである。

これは大学講義の水準ではないか。シラギとカグラはかろうじてついていくものの、マイムは最初から参加せずに黙々と酒を飲んでいく。

しばらくは頑張った少女たちだったが、眠くなったからと言ってそそくさと上上がった。

「やれやれ、やっと部屋にいつてくれた」

「最近、変に突っかかってくるのよね。二人とも」

「反抗期でしょうか」

やけに家庭的な会話がなされた後、

「さて、宮廷の様子を話してもらおうか」

と三人の目がシラギに向いた。

すべて正直に話した。宮廷の事。シヨウギの事。トモキの事。宰相の事は言いよんだが、カガミは何かを察したようである。

シラギも聞いた。聞いてそして呆れた。

「仮にも王女を騙して連れ歩くなど。しかも働かせているとは」

「しかし、ずいぶん成長遊ばれましたよ。外に出て良かったと今日おっしゃっていました」

カグラが思い出すように遠くを見る。
気に入らない。

「お前は どうしてここに いるのだ」

「カガミさんに 感銘を つけまして。何か 問題でも？」

「存在 自体が 胡散臭い」

笑顔で 答える カグラを 一言で 切り捨て、

「あなたは」

と マイムに 聞いた。女は 隣の 男を 指差し、これも 一言。

「牽制 役」

そうか、と シラギは 思った。かつての 敵の 愛人が なぜ 王女と 同行しているのかは 分からないが、この 女は 王女を 守ろうと 見張っているつもりなの だろうと 理解した。しかし なぜだ。

「そういう 訳で、シラギ くんも 王女とは これから 言わない ように。」

ばれたら 困る から ね。砕けた 感じで 接して ね。あと その 衣も 目立つから、 売っ ちゃって よ」

そんな こと 言われて も。

「厄 介事が増える のは 嫌なの よ。がんばって ね」

マイムが どうでも よさそう に 応答した。

「楽しみ ですねえ」

楽しむ な。

「ところで トモキ くんは 本当 にどこに いったん だろう」

「探している ことは 探している のだけ けど」

「都に いるはず は ない ですね」

「結構 いろんな 所を 回った のに とんと 足が かり がない」

まさか とは 思う けど。カガミ が 頭を かきながら 言う。

「海の上 とか……」

テイ エンラン の 貿易は 盛んだ が、あまり に も 突飛な 発言に 他の 三人は 苦笑 した。

「まさか ね」

「ですね」

「あり得ないな」

あり得ない。

トモキがそう言うと、隣の男はおかしそうに笑った。

赤茶けた癖の強い髪を、潮風に靡かせながら。

「あり得ないという事はあり得ない」

シシの村からゲンブの町へ行き、数件しかない宿屋を片っ端から訪ねた。リウヒは確かにここにいた。妙に目立った一行だったという。オヤジが一人に少女が二人、優男が一人に色っぽい女が一人。

トモキは首をかしげた。てっきりカガミと二人で行動しているものだと思っていたからである。あとの三人は一体誰なのだろう。南のほうへ行ったらしいという宿の親父に礼をいい、スザクの港へと向かった。おおよそ二日ほどかかる長い道りである。それでも歯をくい縛りただひたすら歩いた。

長い軟禁生活で弱りきった体は悲鳴を上げた。スザクについた瞬間、引っくり返ってしまったのである。早い話が行き倒れた。

起きたら船の上にあった。はるか広がる海原をみてトモキはてっきり自分は死んだのだと思った。ここが本で読んだ西の果てというものか。ああ最後にリウヒに会いたかった。

が、その割には猥雑過ぎる。荒っぽいむさ苦しい男たちが盛んに動き回っており、何かを叫んでいる。

「気が付いたかい」

その中でひときわ目立つ男がトモキに声をかけてきた。荒くれ男たちと同じような恰好をしているのに、その男だけ周りの雰囲気が違う。

「港で倒れていたんだよ。そのまま見殺しにするのは忍びないから、

つい担いできてしまった」

「すみません、命を助けていただいたんですね」

ありごとうございます、と頭を下げてから、じゃあ、ぼくはまだ生きていますのかと思った。

「どういたしまして。こちらも人手が足りないから、手伝ってもらえると有難い」

それはもう。とトモキは言った。この人は命の恩人なのだ。

「でも、探している人がいるんです。はやく見つけないと」

リウヒ。小さな王女。無事であるだろうか。

あの時、自分が一人で都に乗り込まなければ。もつと慎重に動いていればこんな事にはならなかったのに。悔やんでも悔やみきれない。そんな自分を嫌悪する。

「探し人は、あそこにいるのかい」

二人は遠く彼方の陸地に目をやった。

「あれはティエンランですよね」

「そうだよ。こんなにもちっばけに見える」

その声に若干の郷愁が入り混じっているような気がしてトモキは、男の顔をまじまじとみた。とこかで見たことあるような、ないような。記憶の片隅に引っかけかかっていてなんだか気持ち悪い。

「君には申し訳ないが、出港したばかりでしばらくは陸地には戻らない」

その代り、戻ればすぐにでも君を下ろそう。と約束してくれた。ありがとうございます。トモキは再び頭を下げる。

「どれぐらいで陸地にもどるんでしょうか」

「分からない」

はい？

「それはどういう…」

その時、背後の動きが慌しくなった。荒くれ共が走る。空気が高まる。

「頭領、商船を発見しました。かなり大きいです!」

頭領と呼ばれた隣の男は、

「進路をとれ、面舵一杯、砲の用意を！」

大声で指示を下すと、身をひるがえして立ち去ろうとした。

「あの、ここはもしかして」

男は振り向いてトモキを見ると、にやりと笑った。

「海賊船へようこそ」

「船だ！」

キヤラは歓声を上げると、丘の上へと走った。風が強い。暴れる髪を抑えて立ち止まると遠く広がる水面をみた。はるか遠くまで陽の光をうけてキラキラしている。

シシの村からは都は見えても、海は切れ端しか見えない。

こんなに広いものだとは思っていなかった。まるで自分が小さな存在に見える。

例えば、今この崖の上から身を投げても海は変わらず波打っているだろうし、日常は変わらず流れていくに違いない。

幼い頃、世界は自分のものだと思っていた。あの小さな村の片隅で。

「この先にまた国があるんだな」

「いつかお連れしますよ」

「お前、いつもそんな事ばかりいつているのか」

後ろでリウヒたちの声がした。

やっぱり気に入らない。キヤラは口を曲げた。

シラギという男が加わってから、何だかみんなリウヒばかり構っている気がする。

キヤラは昔から、輪の中心になる方だった。明るくて愛想が良かったから、同じ年の友達の中でも気がつけばキヤラを中心に物事が進められていた。それが当たり前だったのである。

ところが今はどうだろう。

以前ほどは暗くはなくなつたが、無愛想で人見知りするリウヒばかり、大人たちは話しかけている気がする。ただ、王女というだけじゃないか。

仲間外れにされているような、疎外感が日ごとに増していく。

そりゃあ、無理やりついてきたのはあたしだけ…。

一人頬を膨らませていると、マイムが横に立っているのに気がついた。

リウヒたちの会話にも参加せず、ただ黙って海を見ている。

「海って広いね」

話しかけるとちらりとこちらをみて静かに微笑んだ。

キャラはマイムが好きだった。擦れてなくて凜とした印象を受ける。背筋が伸びていて仕草や立ち方の一々に決まっていた。大人の女という感じがして憧れた。そしてリウヒとキャラを対等に扱ってくれる。

「歴史というものは、川のようなものだ」

カガミの声が聞こえた。リウヒたちも話をやめて聞いている。

「月日という雫が積み重なって、濁流となり海へ流れている。その流れを変える力を持っているのは、他でもない、君たち若者なんだよ。無限の可能性を秘めている君たちなんだ」

しばらく、誰も何も言わずに海を見つめていた。

「さて行くこうか。ぼく、お腹がすいちゃったよ」

歴史学者の顔からオヤジの顔になったカガミに、みな苦笑しながら踵をかえして歩き始めた。

スザクの港へ。

「港につくのは明後日だってよ」

橙頭の男が教えてくれた。この船のことを色々トモキに教えてくれ

た親切な男だ。

「よかつたなあ。コレが待つているんだろ」

齒が三本抜けている男が小指を立てると、あちらこちらからヒューヒューと野次が飛んだ。そしてなぜかそのまま大宴会へ。

船の底にある大部屋は至る所に吊床が下げられており、酒が飛び交い、野次が飛び交い、酔ったオヤジも飛び交った。でたらめな歌を合唱して瓶に口をつけて酒を飲んでいゝ。

この船に乗つてどれくらい経つたか分からないが、恩人の為精一杯の事はやつた。頭領は気持ちのいい男だったし、その頭領に心酔しきつてゐる荒くれ共も一樣に賑やかで酒好きで面白い男たちだった。

「どんな女なんだよ」

「美人か」

どうも探し人がいるというのが勘違いされて伝わり、いくら訂正しても同じ間違いに行きつく。面倒くさくなつて否定もしなくなつた。リウヒが恋人と言われるのは何か違う気がする。なんだろう、大切なのは間違いないのだけだ。

いきなり背中を叩かれた。酒を吹いてむせる。

「照れんなよーう！」

「おらもつと飲めー！」

乱暴に頭を撫でられ、小突かれ揺さぶられた。みな一様に酔っぱらつて大笑いしている。こんな酒の席はもちろん経験したことがなかった。今まで酒といえば、宮廷の自室でカガミやシラギとひっそり静かに飲んでいたくらいである。

ところが目の前の男たちは、毎晩「この世の終わりがきても後悔しない」と豪語するほど、酒を浴びるように飲み歌い笑い踊るのであつた。そしてあくる日はきちんと起きて頭領のもとに集う。

その頭領も不思議な男だった。どこかで見たことがある気がする。

「頭領つてどういう人なんですか」

と聞いても、ほとんどのものが素性を知らない。気が付いたら頭領に納まつていた、と口を揃えていゝ。

「元々は旅の一座にいたと聞いた」

「おれは先代の隠し子って」

「貴族の息子じゃなかったか」

みなはつきりしたことは分からない。名前すら知らない。でも、いいじゃないか。そんな事は。おれたちはあの人だからついて行くんだ。

「そうだろうおめーら！」

「おうー！」

「イヤッサイイヤッサイ！」

「ゴジョウ！ ゴジョウ！」

独特の掛け声を発して再び始まる大宴会。

トモキはそっと抜け出して甲板にでた。

下の騒ぎが嘘のように静まり返っている。波の音だけがひっそりと響いた。あの雰囲気は好きだけれど、なんとなく交われないでいる。遠くに陸地が見えて、灯りがポツポツと灯っていた。

あの灯りが集中しているところが港だろうか。あのどこかにリウヒがいるのだろうか。ぼくはいつまでリウヒを追いかけていけばいいのか。

波も夜空に煌々と浮かぶ丸い月も、何も答えずにただ音と光でトモキを包むだけだ。

再再会

酒場の煌々とした灯りの中、大人組の四人カガミ、シラギ、カグラ、マイムは酒とつまみを注文しつつ席に着いた。港の大きな酒場だけあって活気がある。

隅の方に小さな舞台があり、年老いた女が一人月琴の音をお供に歌っていた。

「下手くそ」

マイムがつまらなそうに呟く。

この女はそういえば宮廷の踊り子だったとシラギは思った。その頃はもつと愛想があつて、堂々としていた。自信がみなぎっていた。今はなぜこんなな投げやりな態度なのだろう。

「自分の方がうまいと思つているのでしょ」

カグラがニヤニヤ笑いながら酒を注ぐ。

「当たり前じゃない」

マイムが腕を組んで鼻を鳴らす。

「ヒヒハヒヒンハハヘエ」

カガミが口をせわしなく動かす。

「カガミさん、せめて飲みこんでから話されてはどうか」
呆れたようにシラギが酒を啜った。

「それならあそこに出て歌つたらどうです」

「やあよ。一銭にもならないもの」

「ああ自信がないのですね」

マイムが隣の男をギツと睨んだ。

どうやらカグラはマイムを焚きつけて遊んでいるらしい。二人はなんだかんだと言ひ合ひを小声でしていたが、シラギもマイムの声を聞いてみたいと思つた。

「一度拝聴したいものだな」

「ぼくも聞きたーい」

「わたくしもあなたの舞しか見たことがないので」

あんたら。マイムが目の前の男らを睨みつけた。そして何かを思い付いたらしく、にっこりと笑う。

「じゃあ、賭けをしましょう」

「賭け」

「そう、賭け。あたしがお客から歓声なり拍手なりもらったら金をよこせと言いつつ」

「でも、もし何の反応がなかったら？」

「その時は、あなたたちの言う事を何でも聞くわ」

艶然と微笑むとマイムはゆっくりと席をたった。そのまま舞台の方へ歩いて行くのを男三人は口を開けて見送った。

「何でも言う事を聞くんだって」

「あの女がそんな事を言うなんて」

「よほど自信があるのだな」

マイムは月琴を抱えた女と二言三言話すと、笑顔で席と楽器を譲った女に軽く頭を下げつつ、椅子に座った。確かめるように、音を鳴らしている。

「お手並み拝見」

カグラが腕を組み後ろの壁にもたれた。

歌声が響き始める。酒場の喧騒はその歌声に反応したように揺れ、波が引くように静まっていった。静寂の中をただ月琴の音とマイムの歌だけがゆったりと支配する。

声はまるで楽器の音のようだった。女の唇は言葉を紡いでいるが、言の葉はもう一つの音と絡まるように踊るように空間を漂う。

民話を基にした有名な歌だ。

あるところに男と女がいた。

二人はお互いを想いあい、中睦まじく暮らしていた。

ある日、突然男が消えた。

女は泣いた。泣いて泣いて涙が枯れてもまだ泣いた。

あの人はここに必ず帰ってくる。

あの人の帰る場所はここだけだから。

そう信じた女は待った。

ただひたすら待った。

待って待って、年をとっても老女になっても待ち続けた。

いつしか女は松の木になつてしまった。

それでも待ち続けた。

この身が松になろうともあの人はここに帰ってくる。

月日が幾度となく巡つたある日、松は燃えた。

炎は天高く舞い空の星となつた。

星になつても男を待つ女の気持ちは変わらなかつた。

その星は夜のとばりがおりると真つ先に輝く。

男が帰ってくるのを今でも待っている。

永遠に待っている。

月琴の音を従えて舞い踊る歌声に、シラギは不思議な感覚が足の先から這い上がってくるのを感じた。

女の奏でる音以外には咳せきひとつ聞こえない。酒場中のすべてが停止していた。

月琴の音が途絶えると、数秒間の空白のあと引いた波が返すように戻ってきた。それは次第に高まっていき、割れるような歓声と拍手に変わる。涙を流している者もいた。興奮して腕を振り回す者もいた。飛び跳ねている者までいた。

その歓声を一心に浴びたマイムは優雅なお辞儀をすると、シラギたちのもとへ戻ってきた。

そして誇らしげに宣言する。

「あたしの勝ちね」

先に泣いた方が勝ち。

それがキャラの常識だった。

泣けば母は兄を叱り謝らせ、友達は動揺し、すぐに謝罪した。謝った方が負けなのだ。

それを見るのは気持ちのよいことだった。勝った。いつもそう思った。

でも、今自分は泣いて目の前の少女は謝っているというのに、なぜこんなにみじめな気持ちになるのだろう。涙が出れば出るほどみじめさは増長してゆく。

大人たちが夜の町へと繰り出した後、リウヒと部屋に戻った。なんとなく二人で話している内に争いになった。原因は下らないことだったが、キャラの今までたまっていた不満が爆発したのだろう。

「何よ、いつでもどこでも心配してくれる人がいて、それに甘えて」「甘えてなんかいない」

「甘えているじゃない。それが当り前なんですよ、あんたの中では」

「キャラは何か勘違いをしているんじゃないか」
勘違い。勘違いと言うか。

あたしが味わったような疎外感など今まで経験したことないくせに。王女と言うだけでちやほやされて。ただ生まれが違うだけで。

涙は止まらない。くやしくて腹がたつてしょうがない。

「いいわよね、王女さまって！偉そうにしていればそれでいいんですよ！」

「みんな、わたしを心配しているわけじゃない。わたし自身を見ているわけじゃない。わたしが王女だからそうしているだけだ。そうじゃなかったのは」

リウヒの顔が一瞬変わった。柔らかい笑顔。

「トモキだけだった」

でも、キャラに不快な思いをさせたのはすまなかった。とうつむく。腹の底から怒りが沸いた。頭が痛い。割れそうだ。

「あんななんか大っ嫌い！」

感情のまま手を挙げる。リウヒが素早くよけた。

この少女が体に触られるのも、人に触れることも嫌がるのは分かっている。寝るときは寝台の隅と隅にわかれて寝たし、実をいえばどうでもよかった。

「ただ今殴らせろ。」

しかし、リウヒはそれを避けつつ逃げる。しばらく狭い部屋で二人暴れていたなら、階下からドンドンと音が響いた。うるさい静かにしろという注意なのだろう。

少女たちは、息を弾ませて睨み合っていた。

「下々の者には触らせないってか。さすが王女さまよね。」

皮肉をこめていうと、リウヒが顔色を変えた。

「違う。」

「なにがどう違うのよ。何か原因があるなら言いなさいよ。どうせないんだろっけど。」

キャラはチンピラのごとく顎を突き出した。

リウヒは真っ青になって、口を開けたり閉じたりしている。何か言いたいけど言いにくい、そんな感じだ。

見ているとますます嗜虐心が煽られる。

「ごめんなさいねえ。こんな下の者には言えないわよねえ。ずっと一緒にいて友達だと思っていたのに。」

そんなことはちりりとも思っていないけど。

リウヒが意を決したように息を吸い込んだ。そして話し始めた。

「昔、気が付いたら全然知らないところに連れて行かれた。」

母や兄たちのいない、変にきれいな所。美しい衣を着せられて見たことのない広い部屋を与えられて嬉しかった。当然母や兄たちも来るものだと思っていたら、もう会えないという。何を言っているのだろう。早く帰りたい。にいちゃんたちがいるあの家に帰りたい。お願いと泣いても、回りの大人たちは仕方なそうに笑っただけで何もしてくれなかった。

不思議な女の人に会わせられた。人形を自分の子供だと思い込んで

いる美しい人だった。自分の母だといわれた。全然違う。母はいつも陽のあたる台所にいる。いつも忙しそうでリウヒがいたずらをしたら、ものすごい顔をして尻をぶった。

やさしそうなお爺さんにも会わせられた。お爺さんは喜んでリウヒを膝の上のせて離さなかった。この人なら頼りになれそうと思っただ。ところが。

「寝ていたら、そのお爺さんが来て寝着を脱がせられた」

キャラが息をのむ。リウヒの顔は青を通り越して白くなっていた。小さく震えている。

「何をしているのか分からなかったけど、すごく気持ちが悪くて怖かった」

やめて、お願いやめて。泣いても暴れても懇願しても老人はやめてくれなかった。

にいちゃん、助けてお願い誰か。兄は来てくれなかった。誰も来てくれなかった。

老人は毎晩来る。夜が恐ろしかった。後宮が恐ろしかった。

誰も助けてくれない。ただ仕方なさそうな顔をして笑っているだけだ。

まず人が怖くなった。触られると悪寒がして気持ちが悪くなる。

そうだ、悪い子になれば、みんな呆れてわたしを嫌いになって、ここから出してくれるかもしれない。そしてあの家の帰してくれるかもしれない。かあさんとにいちゃんのいるあの家。それだけがリウヒの希望になった。だが、それすらも叶わなかった。

老人はいつしか来なくなつたが、周りの態度は変わらなかった。仕方なさそうに笑って、見て見ない振り。

いつかここを自力で出ようとしょっちゅう部屋を抜け出した。ただし、体力をつけるために食事だけはしっかりとった。かあさんが言っていたもの、ご飯は大切だって。衣を着させられる事は必死で我慢した。もしここを抜け出したとしても金が必要だ。その時はこれを売ろうと袖に施された美しい刺繍をみて思った。

「ごめん」

目の前のリウヒは、小さく震えながら膝に頭を埋めていた。まるで自分の身を守るように。

「もう言わなくていいから。ごめんね」

キヤラは同じ年の少女の肩を引きよせそうとして、手をひっこめた。触れない。

ああ、触ることで伝えられる事もあるのに、言葉で表せないから抱きしめて慰めたいのに、それができない。なんてもどかしいのだから。

ごめんという言葉もそうだ。すべてが帳消しにできる言葉だと思っていた。帳消しになんて無理だ。あたしはこの少女の闇を掘り起こしてしまった。

でも今はそれしか言う事が出来ない。

「ごめんね」

膝を抱えて震えるリウヒと、ただ立ちすくむしかできないキヤラを、窓から差し込む月の光が照らした。

月明かりを受けて黙って歩く。

カガミはもう少しここにいるから、と言い、カグラはいつの間にか消えていた。大方女でもひっかけに行ったのだろう。シラギと二人宿に戻る途中だった。

目の前には陰気な男の背中がある。最近では表情が出るようになったのかもしれない、とマイムはクスリと笑った。

「いい歌だった」

突然、シラギが振り返りもせずポツリと言った。

考え事をしていたマイムは一瞬、何を言われたか分からなくて止ま

った。

「今何て？」

「きれいな声だったと言った」

その声に若干の照れが混じっている様な気がして、つい動揺してしまっ

「あ、ありがとう」

ひっくり返った自分の返事に内心舌打ちをしながら

「まあ、宮廷一の踊り子なめんなって感じかしらね」

と軽口でごまかした。しっかりとしろ、あたし。と心の中で叱咤する。初な小娘じゃあるまいし、歌を褒められたくらいでなにをうるたえているのだ。

「陛下が気に入っていたのも分かる気がする」

「何それ」

そんな話、聞いたことがない。

「どういう事」

目の前の男の腕をとると、男は振り返った。その目には「しまった」と後悔の色が浮かんでいたが、知ったこっちゃあない。

「言いなさいよ」

掴んでいた腕を揺さぶると、シラギはため息をついて白状した。

「宴で踊るあなたを見て、陛下が側に召そうとしたことがある。シ

ヨウギ側にこっそり密告して事なきを得たが…」

「ちよっと待ってよ、それはあんたの一存で？」

シラギは頷いた。王女の時もそうすればよかったのだ、とため息混じりにブツブツいっていたが、そんな事はどうでもいい。

「何を、何を…」

怒りで手に力がはいる。

「何を余計な事をしてくれたのよっ!!」

怒鳴りつけると、シラギは目を見開いて身じろぎした。

「たんまり金が入ったのに、余計な事を、もう」

「わたしはあなたの為を思って」

「それが余計な事だつて言っているのっ」

ああ、どれだけの金になったのだろう。頂ける宝珠なんかも国宝級に違いない。何ておいしいことを。

頭の中を色んな欲望が回っている。すべて幻になってしまった欲望。「先ほども金を要求していたな」

目を上げると、嘲るような男の顔があった。

「そんなに金が大事か」

マイムの中の怒りの炎がさらに燃え上がった。何を言っているのだこの馬鹿は。

「当たり前じゃない」

低い声がでた。

「名家のお坊ちゃんには分からないでしょうね。今流行りの精神的外傷よ。家には金がないばかりに、弟は死んでいったわ。医者に見せることもできないで、この腕の中で死んでいったのよ。だから、世の中お金が一番大事なの！」

一気にいうと、掴んでいたシラギの腕を払うように離れた。

呆然としている男を尻目にずかずかと立ち去る。

しばらくは怒りが収まらなかったが、それが静まってくると今度は顔が緩み始めた。

阻んでくれた。

あのしわがれた老人の手から、仏面顔の愛想のかけらもない男が守ってくれた。

「わたしはあなたの為を思つて」

「いい歌だった」

「きれいな声だったと言つた」

シラギの声が頭の中をクルクル回る。

もう、本当に初な小娘じゃあるまいし、宮廷の荒波をかくぐつてきたこのあたしが、あんな男に、あんな台詞に喜んでしまうなんて。顔を引き締めようとしても、どうしても緩んできてしまう。なんだか胸が温かい。

マイムは頬を手当てると、一人笑いながら宿を目指した。

港の宿の部屋に入ると、トモキは寝台にひっくり返った。

久しぶりの蒲団の感触を楽しむ。海の上では吊床で、意外と寝心地はよかったもののやはり蒲団の感触には負ける。

頭領と愉快的な仲間たちは、約束通り港でトモキを下ろしてくれた。いくばくかの金ももらった。余所から奪った金を頂くのは気が引けたが、背に腹は代えられない。頭領はもし用があつたらここに来てくれと港はずれの一軒家をさした。誰かしらいる筈だからと。

明日からは、リウヒを探しに行こう。

別れてから二年近く経つ。あつという間に経ってしまった。東宮で王女と追いかけてくをしていたのが嘘のように遠く感じる。そして意識も遠くなつていった。

翌朝、身支度をして宿の朝餉をとってから外に出た。

今日も朝から日差しが厳しい。どこに行こうか。とりあえず、また片っ端から宿に聞いて回ろうと踵を返した瞬間。

信じられないものをみた。

こちらに向かつてくる集団のなかに、リウヒがいる。トモキが知っているリウヒよりも、たいぶ背が伸びている。人違いか。しかし、見覚えのある藍色の髪の毛は、依然と変わらず陽の光を浴びて輝いていた。

少女と何か話しながら、ふとこちらを向いたリウヒはそのまま止まった。

トモキも足が動かない。

あんなに会いたかった少女が目の前にいるのに体が動かない。声すらも出なかった。

リウヒの周りにいた五人もこちらを見て固まっている。
長い時間が流れたような気がした。

「トモ……！」

リウヒの隣にいた少女が叫んだ瞬間、リウヒがこちらに向かって駆けってきた。

風が吹いて木々を揺らす。リウヒの足が地を蹴る。

そしてゆっくりとトモキの胸へと飛び込んできた。

その体を受け止める。腕に力をいれて抱きしめると、太陽の香りを感じた。

マイムがほほ笑んだ。

カガミが感嘆の声を上げた。

カグラが口笛を吹いた。

シラギが目を見開いた。

キャラが顔を背けた。

二人はそんな面々に全く気が付かずしっかりと抱き合う。

「待っててろって言っただろう」

トモキがリウヒの髪に顔をうずめて言う。王女への言葉づかいではなかったが、もうどうでもよかった。ずっと会いたかった。狂おしいほど会いたかった。この腕の中で、リウヒの存在を確かめている。今でさえ現実感がないほど会いたかった。

「心配かけさせないでくれ、この馬鹿」

「馬鹿はお前だ」

トモキの胸に顔を擦りつけるようにして言い返す。その手はトモキを確かめる様に、背中を掴んだ。

「二度とわたしから離れるな」

返事の代わりにもう一度腕に力を込めた。リウヒが苦しい、と言って笑っても力を抜くことはできなかった。

「いつまでそうしているつもりなの」

呆れた声に顔を上げるとそこに立っていたのはマイムだった。

「マ、マ、マイムさん！」

なぜこの人がここにいるのだろう。

慌ててリウヒを引き剥がす。リウヒはきよとんとした顔でトモキを見た。

「いやあ、ぼくはちょっと感動しちゃったよ」

「カガミさん！」

変わらない赤ら顔と髪型が懐かしい。

「堪能させてもらった」

「シラギさままで……」

なぜここにいるんだろう。宮廷から出たのか。

「感動の再会ですね」

誰？

ああ、昔シラギと打ち合った人だ。この人もなぜここに。

その横にいるのはシシの村の、友達の妹ではないのか。名前が思い出せない。どうして王女と一緒にいるのだ。その子は拗ねたように横を向いていた。

不思議な面々だった。

その後、カガミの提案でリウヒたちが泊っている宿に向かい、部屋で色々な話をした。自分を探して色々な村や町を彷徨っていたという。海賊船に乗っていたといったら、リウヒが目を輝かせてうらやましがった。

「あら、もうこんな時間」

日はだいぶと高くなっている。

「あなたたち、今日は港での仕事があるんでしょう。早く行きなさい」

マイムが少女たちに言うと、二人はえー、と口を尖らせた。

「働かざる者食うべからず。じゃないと今日の夕餉は抜きですよ」

銀髪の男が笑うと

「トモキの再会を祝って、特別にみんなで酒場に行こうと思っただけだ」

とシラギも笑う。すると二人は先を争うように部屋から出て行った。
「君たちも大分、扱いがうまくなったねえ」
カガミが笑っている。

トモキ一人、訳が分からずぼんやりしていた。

「さて、ここからが真剣な話だ」

カガミが言うと、四人の顔が引き締まった。

彼らは、トモキを探しつつも王女の為仕事を請け負いながら、町や村を飛び回っていたという。

トモキが見つかった今、これからどうするかという相談であった。

「その事なのですが」

シラギが迷いながらも口を開く。宰相が言った言葉。若干、カグラを警戒しているようだったが、カグラは涼しい顔をしていた。

「一理ありますね」

シヨウギの元愛人は口に手を当てながら言う。

「国王はシヨウギの手の内にあるのでしよう。今行動を起こせば謀反征伐の大義名分を与えかねない」

「なるほど」

「狙い目は国王崩御か……」

「あの、どうしてもリウヒさまに王位に就いてもらいたいんですか」
トモキが口をはさむ。

「ぼくは、わざわざあの宮廷へ戻るより、このまま外の世界で平和に暮らしてほしいのですが」

その方がリウヒの為になるに違いない。贅沢で醜悪な場所より、多少貧しくても清らかで美しい場所にてほしい。

「トモキくんがそんな事をいうなんて」

カガミが珍しく怒り出した。

シラギも険しい顔でこちらを見ている。

「昔、君は王家の人間は、自分で稼いだ金ではなく国民の税で暮らしている。だからこそきちんと教養を受けて国に恥じない人間になるべきだと言ったね」

言ったような、言っていないような。あまり記憶にない。

「ぼくはそれを聞いて、たいへんな衝撃を受けた。そしてそうあるべきだと思ったんだ。さらに言えば、王家の人間には国を治める義務がある。それがどんなに困難であろうともね」

「わたしも王家の血を引かぬ者に仕える気はない」

シラギが語気も荒く言った。

「まっぴらごめんだ」

この人はこんなに表情豊かだったのだろうか。トモキは別の所で疑問に思った。

「宰相の言う舞台が気になりますね」

思案顔でカグラが言う。

「内側から何か工作をする気でしょうか」

「どちらにしても、今は動けないのでしょうか」

マイムが髪をかきあげた。窓辺に腰かけて腕を組んでいる様子はそれだけで絵になる。

「このまま旅を続けるのがいいんじゃないかしら
みな頷いた。

「しかし、国王もがんばるね」

「寝ついてもう何年経つのだろう」

「シヨウギが用済みだと思ったら、毒殺でもされるでしょうね」

カグラに視線が集まる。

「可能性の話ですよ」

「もしかしたら、以外にシヨウギは宮廷で孤立しているのかもしれないね」

部屋に沈黙が訪れた。

「ああそうだ、トモキくん」

カガミが呑気な声を出した。

「一応、リウヒくんが王女と言うのは伏せて旅しているからね。碎けた感じで接してちょうだいよ」

「そうそう、あの感動の再会の時みたいに」

マイムが笑いながら言う。

「やめてくださいよ！」

トモキが顔を赤くした。

「リウヒも随分変わったな。自分から抱きつくなんて」

「あなたもではないのですか。最初は王女を呼び捨てに出来なかった黒將軍」

「それを言うな、白將軍」

軽口を叩き合う二人の男に、カガミとマイムは笑い声を上げた。

御前試合で死闘を繰り広げた男たち。この人たちはいつの間にかこんなに仲良くなってしまうたんだろう。

トモキはちよっぴり疎外感を味わったのだった。

夕方になって、リウヒとキャラが戻ってきた。労をねぎらう大人たちに得意そうな顔をしている。そして、初めて参加を許される酒場への同行に興奮を隠せないでいた。今まで理由をつけては追い返されていたのに、今回は特別なのだ。二人はクスクス笑いながら、いっぱい食べようね、お酒もこっそり飲んじゃおうか、などとろくでもない相談をしていた。

「最近、なんだか妙に仲良くなっちゃって」

少女たちをみながらマイムが笑う。

「前はあんなにいがみ合っていたのに不思議ですね」

「良いことではないか」

「やっぱり旅はいいものだねえ」

「あの子は何でついてきたんですか」

「ん？ 世の中を見てみたいんだって」

隣にいたマイムが一瞬微妙な顔をしたが、トモキは気が付かなかった。

以前、マイムが歌を披露した酒場の扉を開ける。喧騒が七人を包んだ。

少女たちが物珍しそうにあたりを見回す。舞台があるよ、酒の瓶が

あんなにあるんだとはしゃいだ声を上げた。

「こおら、落ち着きなさい」

マイムに注意されても聞く耳をもたない。あたしたちもお酒を飲みたい、ねえ、いいでしょうと声を揃えてねだった。渋い顔でたしなめる大人組にカグラが

「果実酒を薄く割ってもらえばいいでしょう」と提案すると歓声をあげた。

キャラはともかくリウヒはこんな性格ではなかったはずだ。こつそりシラギに聞くと

「トモキがいるのと初めての酒場で喜んでいるのだろう」と笑った。

七人は大いに食べて飲んで笑ってしゃべった。特にリウヒはみなが呆れ心配するほど食べた。

シラギはひっそりと、しかし笑いながら飲んでいる。

カグラが手品を見せてくれた。カガミが腹をゆすらせながらでたらめな歌を歌い、みなを爆笑させた。

トモキがリウヒにねだられて、船上の話を面白可笑しく語る。

マイムは基本的に黙ってはいたが、時たま絶妙な突っ込みを繰り出した。

キャラはただただ、笑い転げていた。

こんな酒は初めてだ。かつてカガミやシラギと部屋で飲んだ時とも、気のいい海賊たちの宴会とも違う。

リウヒがいるからだ。

トモキは目の前で楽しそうに笑う少女を見た。少女はその視線に気が付き、にっこりと笑い返した。

腹も膨れ、酔いもだいぶ回ってきた時、賑やかな団体が入ってきた。頭領と愉快的仲間たちだった。騒ぎながら酒場の隅を陣取っている。

「元気な集団だね」

「あ、ぼくがお世話になった人たちです」

そつだ、頭領にあらためてお礼を、探していた人が見つかったという報告をしないと。とトモキが席を立とうとした瞬間。

シラギが弾かれたように中腰になった。勢いで倒れた猪口からは酒がこぼれているにも関わらず、一点を凝視している。

「もう、なにやっているの……」

マイムが猪口を戻しながら同じ方向をみて固まった。

カグラがその視線を辿ってむせた。

カガミに至っては目を見開き、開いた口からは酒がだらだらとこぼれている。

リウヒはそんな面々を不思議そうに見ていたが、視線の先をみて驚いた。

トモキは今初めて気がついた。そうか。だから、どこかで見たことがあると思っただんだ。

キャラだけが何も分からず「なに？ どうしたの？」と聞いていたが、だれも答えられなかった。

最初に行動を起こしたのはシラギだった。

つかつかと海賊たちに歩いて行く。中の一人がそれに気が付き

「あんだあ、兄ちゃんなんか用かい」

敵愾心もあらわにした声をだした。

「その男に用がある」

「ああ？」

「その笑いながらこちらを見ている男だ」

荒くれ共はいきり立った。

「うちの頭領を馬鹿にしてんのか」

「なんだお前」

殺意が走る。海賊たちはそろって構えはじめ、シラギも剣の柄に手を添えた。

「はいはいはい、ちょっと待った」

突然色つばい女が間に立ち、手を広げた。

「ごめんなさいねえ。懐かしい顔が見えたものだから、うちの連れ

がつい興奮しちゃって」

うふ、とシナを作りながら流し眼を荒くれ共に送る。根は単純な男たちである。ふにゃんと相好が崩れた。

その間にシラギは、カグラとカガミに両脇を挟まれ引きずられていった。

「なんだよ、ねえちゃん。うちの頭領と知り合いかい」

「そうなの、こんなところで会うとは思っていなかったから、びっくりしちゃって」

だから是非ともお話がしたいな」と、女は上目づかいで頭領を見た。

「わたしも驚きましたよ。とても珍しい方たちがいるものですから頭領が笑いながら女に言った。普段とは違う言葉づかいに男たちは顔を見合わせる。

「話すことなどありませんが、そちらはそうはいかないでしょう」
良ければ場所をかえませんか。と不敵に笑う頭領に女も花のような笑顔を返す。

「ええ、ぜひお願いいたしますわ」

その笑顔は華やかだったが目は笑っていないかった。

「アナンさま」

遠くでそのやりとりを聞いていたトモキの耳に、聞こえるはずのない潮騒が聞こえた。

思惑

リウヒがトモキに抱きついてトモキが抱きしめた。
キャラはぼんやりと波止場に腰をおろした。

リウヒがトモキに抱きついてトモキが抱きしめた。
膝を抱えてその間に顎をのせる。

リウヒがトモキに抱きついてトモキが抱きしめた。
涙が出てきた。

リウヒがトモキに抱きついてトモキが……。
もういい、もうやめて。

思い出す度、心がよじれて苦しいのに、頭の中は繰り返しの場面を再現する。

シシの村で久し振りにトモキに会った時、自分も同じ事をした。嬉しさの余り、思わず抱きついた。

トモキは笑って頭をなでてくれた。ただそれだけだった。
鼻をすする。

みんなは変な男たちと一緒に、どこかへ行った。知り合いらしかった。キャラは先に宿へ帰ると告げて一人離れた。

もう限界だったのだ。心の中に大きな穴があいて、無理やり元気を出さなければ、そこに吸い込まれそうだった。でもはしゃげばしゃぐほど苦しくなった。一人になりたかった。

あんなに会いたかったトモキを見るのがつらかった。だって、トモキの目線の先にはリウヒがいる。

嗚咽をあげる。

物心がついた時から、トモキが好きだった。一番古い記憶は四歳の時だ。転んで膝をすりむいたキャラを、トモキはおぶって家に送り届けてくれた。その背中の上で、キャラははつきりと思った。

「あたし、この人が好きだ」

兄の遊び友達だったから、始終兄について回った。兄は嫌がったが

一緒にいればトモキに会えたのである。トモキは他の子らのように邪険にせず、優しくかった。ますます好きになった。兄たちが小学に行くようになって無理やりついて行った。年齢制限はなかったから、大人しくしていればいくらでもトモキを見ていられたのである。ところがある日突然、トモキはおかしくなってしまった。ぼうつとしていて、心がここにはない感じ。話しかけても反応してくれない。トモキの家で預かっていた女の子が消えたという大人たちの噂を聞いた。母親いわく、赤子の頃キャラと一緒に乳をやった女の子だそう。そんなの知らない、早くトモキがこちらに帰ってくればそれでいい。それだけを願った。

そうこうしている内に、今度はトモキ自身が消えてしまった。あの時の絶望感。宮廷が憎かった。

何かに頼りたくて星に祈った。想い人を待ち続ける一番星に。自分の周りで繰り返られる幼い恋を鼻で笑った。

あたしの思いは誰にも負けない。強く思えば思うほど、願いは叶うと信じていた。信じていたのに。

また涙が出てきた。

星降る夜空の下、キャラは小さく声をあげて泣いていた。

どれほどの時がたっただろう。横に人の気配を感じた。顔を上げるとマイムが立っていた。キャラに声をかけるでもなく、慰めるわけでもなく、ただ立っている。

その横顔は相変わらず美しく、この人はこんな思いをしたことはないんだろうな、と思った。

「失恋しちゃった」

失恋。あたしの恋は死んだ。

マイムはしばらく無言で海を見ていたが、

「よかったじゃない」

ぼつりと言った。

あたしはこの人に嫌われているのだろうか。失恋して良かったただな

んで。また涙がでそうになる。

「本気の恋なんてあたし、したことないもの。うらやましいわ」
そう言ってさびしそうに笑った。

「じゃあ、夜も遅いし危ないから、早く宿に戻りましょうか」
心配してくれたんだ。

心が少し軽くなった。トモキの顔を見るのは辛いけど、リウヒも前ほど嫌いにはなれない。あの告白を聞いてから守らなきゃという気持ちになった。同い年だけど、自分がお姉さんになったような気がした。

宿に帰ろう。キヤラは腰をあげて埃を払った。顔も拭う。

宿に帰って、湯を浴びて、さっぱりしてから思う存分寝てやるう。

あたしの恋は死んだけれど、あたしは生きていかなきゃいけないもの。

「生きておられたんですね」

シラギの低い声が部屋に響く。

「よくご無事で」

「ありがとう。この通りピンピンしているよ」

対象的なアナンの朗らかな声が答えた。

酒場での再会の後、アナンの提案で港はずれにある海賊の隠れ家に案内された。その一室に入ると、頭領は部下たちに人払いを命じシラギたちと向き合った。戸の外では男たちが張り付いて耳を澄ませているだろうが、どうでもよかった。

「なぜ、兄さまは海賊をされているんだ？」

リウヒが首をかしげながら問う。わたしも乗ってみたい、と言うリウヒにトモキが小声で窘めた。

「ここがわたしの居場所だからだよ」

「それでは困る。即効宮廷に戻っていただく」

険を含んだシラギに

「それは断る」

アナンは即答した。

「断る？断ることなどできると思っているらっしゃるのか。あなたは王位継承者なのですよ。王の血を引いておられるのです。国を治める義務があります」

「それはここにいる妹もそうであろう」

頭領は、目の前にいる少女に笑いかけた。少女は目を見開いて兄を見返す。

「待つてくださいよ、自分が嫌だからってそれをリウヒさまに押し付けるなんて」

トモキが憤慨した声を出す。

「わたしでも王女でも構わないんだ、宮廷のものは」

腰かけながら椅子に座り、足を組んだ。両手を頭の後ろに回し、陽気に話す。

「王の血を引いていれば、誰だつてかまわない。三百年続く王家に仕えている矜持、そんな犬根性が染みついちゃっているんだよ。上官も下官もね」

でもね、と続ける。

「上に立つのは誰でもいいんじゃないか。別に血を引いていなくても。民にしたら、王が変わったところで生活に大きな変化があるわけでもない。ただ毎日を必死に生きていくだけだ。そりゃ王が名君であれば国はもっと発展するだろう。豊かになるだろう。だけど」
父のように遊び暮らしていてもそれなりに国は動いていたじゃないか、と元王子は笑った。

シラギは拳を握った。こめかみが脈打つのを感ずる。

一理ある。一理あるが、なんて無責任な。

この拳を、目の前で笑っている男に振り回したい。衝動が湧き上がる。いっそ殴りかかってしまおうか、と思った時、ひんやりとした

手がその拳に触れた。

カグラだった。その目が落ち着くようにと諭している。

「なぜ宮廷を抜け出されたのですか。そして海賊などにカグラが聞く。」

「王子の頃のわたしは、人形だった。陽気で快達な王子。それが与えられた役割だった。朝から晩まで演じ続け、誰にも本心を打ち明けられることもなかった。ある日、一人の男から外を見てみないか、と持ちかけられた」

アナンはこちらをみて笑った。誰を見て話しているのだ。

「普段なら一笑で片付けるところだったが、信用はしていた人物だったからね。息抜きにと思いその者の手引きで外に出た」

そして感じた圧倒的な開放感。息抜きのつもりが、そのまま出奔した。ただ、箱入りの王子は外の知識が全くなかった。気が付けば船に乗っていた。

「そのトモキくんと一緒にだよ。港で行き倒れて海賊に拾われたんだ」

拾ってくれた先代は、アナンを大層気に入り色々な事を教えてくれた。アナンも初めて自分の居場所というものを感じた。幾度か死にそうなる目にあつてその度に生きている実感を味わった。

「始めは戻るつもりでいた。しかし」

先代が死んだ。死ぬ間際、この船をよろしく頼むと震える手でアナンの手を握った。

「宮廷での謀反のうわさも聞いた。母や弟たちが死んだとも声が沈んだ。」

「でも、もうあそこに戻る気はない。今でもない」

「では、力づくで連れ戻すだけです」

シラギが怒りを含んだ声で言いながらも剣を抜こうとした。

「あまりの我儘に反吐がでそうだ」

その殺気に周りのものが身を引いた。

「黒將軍はなんだか表情が豊かになつたね」

アナンは体制を崩さず、相変わらず呑気に言う。

「わたしを脅そうが、連行しようが無駄だよ。可愛い部下たちが黙つちやいないからね」

そうだ、この殺気はシラギのものだけではない。戸の後ろから漂う異様な熱気。

しばらく部屋の中を極度の緊張感が支配した。誰かが咳をしようものならシラギはアナンに飛びかかり、そのシラギを殺そうと海賊たちは雪崩打って部屋に転げてくるだろう。

誰もが微動だにしなかったその時、少女の声が響いた。

「わたしが王に立ちます」

緊張は一気に解けた。視線が少女に集まる。

リウヒは踏ん張り息を吸い込んだ。

「わたしが王族の義務を果たします。だから兄さまは今までどおり、ここにいてください」

誰も助けはくれない。

シヨウギはため息をつきながら、扇を開いた。そのまま仰いで彼方に目をやる。

王座は意外に座り心地が悪かった。見てくれだけは豪華で精巧な彫りが施されており、それが痛いのだ。

わたしなりに努力はしているのに、なぜ臣下の者はただ追従の笑みを浮かべるだけでそれを認めてはくれないのだろう。だからこそ、後ろ盾である王は生かしておかなければならない。

国王は未だ病に伏せている。死臭なのか老人臭なのか嫌な臭いがするようになってきた。死期はもう目の前だ。もし死んだとしても、しばらくは隠そうと思った。

政務をとる人間がいらないから自分が朝議にまで出席しているのに、

見える顔は冷たい目をした馬鹿しかいない。苦言を呈してくるものは怒りのあまり、罪をでつちあげて幽閉したり殺害したりした。臣下の姿は更に少なくなった。

味方は誰もいない。誰も離れていく。最初は自分をおだてて群がっていた者さえも。頭でつかちの大卒者ばかり。閉鎖された空間で与えられた知識だけで育ってきた貴族の子供たち。政を動かせるのが不思議だ。そして彼らは血で繋がっている。何かしらの血縁者がいるため身内意識が大層強い。

シヨウギは孤立していた。

扇を閉じて再びため息をつく。

昔、色町にいた頃老人に声をかけられた。贅沢な暮らしをしたくはないかと。たった一人の男を垂らしこむだけで、この国のすべてが手に入ると。勿論飛びついた。たった一人の男とは国王だった。

国王はあつけないほど簡単にシヨウギに夢中になった。時には処女のように恥じらい、時には娼婦のようにふるまう女に尻尾をふつて側室の一人が怒り何か国王に吹き込んでいたが、色町で生きる為に付けたシヨウギの術に、名門のお嬢さまがかなうはずがない。その側室は気がふれてしまったと聞いたが、なんの感傷も湧かなかった。女と女の間には勝ち負けしかない。男と女の間にも勝ち負けしかない。

そしてわたしは今ここにいる。見事な細工を施された扇をしげしげと眺める。

ただ一人の味方だった愛する男が消えてから、すべてが前ほどは美しく思えなくなってしまった。それでもこの場所を動かたくない。

「母さま、どうしたの」

息子がほほ笑みながら、近寄って来た。

ふつくらと丸いわが子を胸に抱きながら思う。この子を必ず王座につける、と。今の自分にはその力があるはずだ。邪魔な王族は死んだ。消した。

わたしが必ずこの子を王座に座らせてやる。

その時、竜を掘った扉の外から声がした。宰相だった。

最近、嫌に協力的になってきた。心を入れ替えたのだろう。息子の方は体を崩したとかで、表に全く出てこない。軟弱な男だこと。

「恐れながら、本殿の建築に想像以上の金がかかってしまいました。これ以上国の予算で賄うのは無理でございます」

金の話は苦手だ。

「どうすればよいのじゃ」

税を上げてはどうか、と宰相はいう。今年も豊作なのだから多少上げて民に負担はかからないだろうと。

「あい分かった、ではそのように」

御意と、宰相は下がった。その前に。

「王の崩御が近いですな」

シヨウギは黙って男の顔を見る。

「上意の礼をご存知ですか」

この国の国王は一生に一度だけ民に頭を下げる。即位時に本殿前の正門にて、民に向い跪礼をするのだ。最高位の礼を。民は声をあげて新しい王を祝福する。いつの頃からか、こんな慣習が生まれた。もちろんシヨウギも知っている。

「その準備をしておきます。あなたもお覚悟なされ」

宰相は一礼をすると出て行った。その際に口元が歪むように持ちあがったことをシヨウギは気が付かない。

「母さま、税を上げても菓子や果物があるから、民は食いつぶぐれる事はないよね」

「まあ、お前は本当に頭のいいこと」

でも、そんな心配はしなくていいのですよ。とシヨウギは微笑んだ。国を動かしているのは外の民ではなく、宮廷の中心にいる自分なのだ。

多少税があがるうとも文句を言われようとも知ったことではない。

「最近、税が上がったので節約体制で行きたいと思います」

「その一、宿の質を下げる」

「その二、請け負う仕事を増やす」

港町の宿にて。少女二人が大人組に向かって声を上げた。

「その三、酒場出入り禁止、酒は一日一本まで。ただしみんなで一本」

そんな、と大人組から抗議の声があがる。少なすぎるとか、酒ぐらい自由にのませるとか、せめて一人一本とか。

「だまらっしゃい！」

リウヒが一喝した。

「飲めるだけ有難いと思え」

「そうよ、お酒代も馬鹿にならないのよ」

大人たちは不承不承納得した。

税は上がっている。以前は一割だったのが二割に増え、今では半分だ。おかげで仕事も賃金も少なくなってしまった。

「そうだ、リウヒくんの宝玉を売った金があるじゃないか」

「あれはわたしの金だ。勝手に使うな」

がめつく育ったな。トモキ以外の全員がそう思った。

「マイムも大金持っているじゃないですか」

「あれはあたしの命よ。使ったら殺す」

本当に殺されそうだな。部屋にいる全員がそう思った。

マイムはリウヒに目をやる。本当に大きくなっちゃって。今朝の出来事を思い出し口元が緩んだ。

朝起きて、下に降りるとリウヒとトモキが抱き合っていた。えらく真面目な顔をして。

「あんたら何やっているの」

呆れた声が出た。

案の定、トモキはあわててリウヒから体を離れた。リウヒは目を丸

くしてマイムを見ている。この子、少しずれているのかもしれない、とマイムは思った。

「そんな事は夜、人気のないところでやりなさい」

「違うんです違うんです」

トモキが大慌てで否定したがマイムは聞く耳持たなかった。

「朝っぱらから見せつけてくれるわね。ま、あたしには関係ないけど。若いつていいわね。ま、あたしには関係ないけど。じゃ、関係ないあたしは失礼します」

「だから違うんですマイムさん、聞いて」

トモキが裾をつかんだ。

「再会した時、リウヒから飛びついて来たじゃないですか。でもこの子、触られるのも大嫌いだったんです。だからさっき、もう治ったのかなって試しにリウヒの頭に手をのせてみたら、しばらく止まった後気持ち悪くないって言ったんです。その言い方もどうかと思うんですけど、それじゃあって試しに抱きしめてみたら、やっぱり気持ち悪くないって言うんです。やめてその言い方って思って……」

まくし立てるトモキを無視して、マイムはリウヒの頭に手をのせてみた。

「うん、大丈夫」

リウヒはマイムの目をみて頷いた。

昔、その体を触ろうとして振り払われた手はしっかりと少女の頭上に乗っている。すこしジンとして涙が出てきた。

「おめでとう！ 良かったわね！」

思わずリウヒの体を引き寄せて抱きしめた。

「マイム苦しい、胸が、息が、ちよっと、死ぬ！」

腕の中で少女がもがいたが、マイムは感動に浸ってその腕を緩めない。

後ろではトモキが呆然とした顔で立っていた。

その様子を二階の廊下から見ていたのは。

「あの女、王女を殺す気か」

「止めないと死にますよ。いや、本当に」
かつて黒將軍、白將軍と呼ばれた男たちだった。

一度浮かんだ疑問はなかなか消えない。

シラギは朝餉の後、茶をすするカガミを見ている。

最近、この男の動向がおかしい。というより奇妙な引っかかりを感じようになった。

「今日はこれから隣町の漁村にいつてみようか」

カガミがのんびりした調子で言った。

「宿の親父が何もないとところだと言っていたけど、ぼくらは観光しているわけではないしね」

「じゃあ、お弁当をつくってきます」

「手伝おう」

みな慌しく動き始めた。

「このところ、カガミさんが変だと思わない？」

マイムも同じ事を考えていたらしい。こっそりとシラギに耳打ちしてきた。

「妙に大人しいというか、何というか」

「あと、気が付いたら消えている時がある」

「たいがい夜だ。そしてその時はなぜか必ず。」

「カグラもないのよ」

マイムとシラギはしばらく見つめあった後、想像を消すように手を振った。

「いやいやいやいや」

「ないないないない」

今度、そういう事があつたら後をつけてみる、とシラギが言った。

見て見ぬ振りは今もうやめたからと。マイムも大きく頷いた。

「でももし、そういう関係だったらそつと帰ってきてね。人の恋路

を邪魔しちゃだめよ」

「やめてくれ。悪寒がする」

真剣な顔で助言するマイムにシラギは眉を顰めた。

いくよーと声がして、一行はぞろぞろと宿から出た。

海沿いに続く道を、一行は歩いて行く。

マイムはみたような風景に自分の足が遅くなるのを感じた。この道を知っている。もしかしてこの先は。

「見えてきた」

「人の気配がしないね」

ああ。思わず声を上げる。マイムの故郷だった。

寂れた貧しい村。今は人つ子一人いない。崩壊寸前の家もあり、大體は砂に埋もれつつあった。

「こんな村もあるのか」

リウヒが呆けたような声をあげる。

みなは散り散りになって村のあちらこちらに行った。

マイムの足は自然と一つの小屋を目指す。かつて家族で住んでいた家とはとても言えない小屋。それはもう骨組しか残っていなかった。父と母はどこかへ行ってしまったのだろうか。それとも死んでしまったのだろうか。自分が華やかな宮廷で舞い踊っている間に。

マイムは裏手に回った。砂地に粗末な木板が刺さっている。その下に弟は眠っていた。

「ごめんね」

一度も来なくて。しゃがんで話しかける。姉ちゃんが生き残ってごめんね。あんたも生きててほしかった。

花ぐらい摘んでくれればよかった。後悔したがこの村の中には草木の一本も生えていない。

涙は出ない。もう出つくした。吹っ切れたものだと思っていた。ではこの目から溢れるものはなんだろう。なぜこんなに胸が痛いのだろう。

マイムはそのままひっそりと泣いていた。どれぐらい時間が経ったのか、横に人が立った。

「何よ」

声がつつかえてうまく言葉にならないのが悔しかったが、なにも言わないよりマシだ。

「それ、あんたが汗ふく布じゃない。いらないわよ」

「洗ってある」

横に差し出された布を乱暴にもぎ取った。なんだか恥ずかしくて、八当たりしたいような。ついでに鼻水も拭ってやった。

「以前、言っていた弟君の墓か」

そうよ、だから何よ。と顔を上げたマイムは、悲しい気持ちにも関わらず笑いだしてしまった。

シラギの手には花が摘まれている。余りにも釣り合いのとれていない姿がおかしかった。

「ごめん、あまりにも花が似合っていないから」

ウククツと体をねじ曲げてまだ笑うマイムにシラギは当然眉を顰めた。

「そうか、それは申し訳ないことをした」

踵を返そうとするシラギを慌てて止める。

「ごめんごめん、でもありがとう。わざわざ摘んできてくれたのね」人は見かけによらないものだなと思った。この男がこんなに優しい人だったなんて。マイムの手握られている布。村の外までいって、摘んできてくれた花。

可憐な白い花を、シラギから受け取るとそつと墓に添えた。

「本当にありがとう」

目線を墓に向けたまま礼をいうと、いや、と声が返ってきた。

二人はそのまま、微動だにせず潮風に髪を揺らしていた。

カグラは小屋の壁にもたれながら、風に髪をそよがせる二人を見ていた。

一人は藍色のたつぷりした髪で、もう一人は白色の薄毛を天辺で括っている。そよいでいるのは数本のほつれ毛だった。

「なぜ、お前たちは止めたんだ」

「またそれを聞くのかい。次期尚早だと思ったからだよ」

海賊の家での事を言っているのだと分かった。わたしが王になる、と宣言したあと王女はそのままくるりと向いて部屋を出て行こうとした。

どこにくんだと止める面々に宮廷に行くと言った。今は駄目だといふとなぜだ、シラギはいま兄さまを連れて行こうとしたではないか、それでわたしは駄目なのかと怒った。

当たり前である。次期国王として教育され、政務にも関わっていた王子と、ただの授業しか受けておらず、表にはあまり出ていなかった王女。

宰相の舞台がどういうものか知らない、それが整わなければ動けない。国王が死んだときに何か仕掛けるのであるうというのがみな意見だった。

元王子現海賊のアナンは勢いの良いこの妹を気に入り、いつだって協力は惜しまないと約束した。海賊たちもその空気を感じたのか、家を出るときはよく分からない掛声までかけてリウヒを褒め称えた。「次期尚早？ではその時期とはいった。のんびりしている間に、税は上がり民の暮らしは厳しくなっていくってるんだぞ」

「リウヒくん、税は下げるべきだと思っっているかい」

「当たり前だ」

「君が王位についたら」

「下げる」

あのね、とカガミがため息をついた。

「時には、そういう時も必要なんだよ。国ためには民に我慢をしてもらって…」

「それはおかしい」

リウヒはやけにきつぱり言う。

「飢饉や干ばつするときならいざ知らず、今年も豊作だ。なのに、なぜ税を上げる。大方宮廷の建築費用がなくなったとかそういう問題だろう」

「そりゃそうだよ。あれは国の威信だもの」

「建物一つに威信もなにもあるものか。いつそのこと園にでもして掘立小屋でもつくればよい」

「何をいつているんだ、君は」

カガミの声はもう泣きそうだ。

「あまりにも乱暴すぎる。そんな掘立小屋をみて民が王を、国を誇れるとでも思うのかい」

む、とリウヒが声に詰まった。

しばらく二人は黙って海をみる。

「嫌なんだ」

リウヒがポツリと言った。

「民が喘いでいる時に、みんなに守られながらのんびりと旅をしてわたしはあの宮廷に入って国を立て直さなければいけないのに、そう言う立場なのに、何でここにいるんだ。こうしている間にもこんな、人のいない町や村が増えていくのだろう」

「昔、ぼくが聞いた質問を覚えているかい。ある人がいる。その人は自分の為だけに他の人を苦しませている…」

「覚えている」

リウヒが頷いた。

「あの時、君はあきらめると即答したね」
した、とリウヒは再び頷いた。

「今ならどう答えるんだい」

「その人を張り倒す」

「…何ていうか、君は凶暴に育ってしまったねえ…」
二人を尻目に頭を巡らすと、マイムとシラギがこちらに向かってくる。

「あの二人、何しているの」

カガミたちの方を見ている。

「帝王学中ですよ」

「なにそれ」

「タヌキが王女に知恵をつけているのです」

タヌキもタヌキ、大タヌキだ。

「それよりそろそろ飯にしませんか」

ああ、じゃあみんなを呼んでくるわ、とマイムが立ち去った。なんとなくその後ろ姿を見やる。ふと、隣のシラギは海辺に座る、王女とタヌキを見ている事に気が付いた。

そろそろあの化けの皮を剥がさなくては。

「黒將軍、今夜お目にかきたいものがあります」

シラギがちらりとこちらを見た。

「御同行いただけますか」

「分かった」

みなが集まってくる。風が大きく吹いてキャラが悲鳴を上げた。

珍しく風のない夜だった。

丸い人影がちょこちょこ歩いてゆく。それを追う長身の影が二つ。

さびれた村から港町に帰った一行は夕餉の後、部屋で飲み始めた。少ない酒を舐めるようにちびちび飲む。

その内、カガミが酔ったから風に当たってくると言って部屋を出た。その後すぐにシラギとカグラが厠へ行くと言って立った。マイムを見ると頷いて「気を付けてね」と口を動かした。

「たまにああやって抜け出すのを尾行していたのです」
目の前のカガミを追いかけながらカグラが小声で言う。

「なにやら怪しい男と話しているのは確認できたのですが、内容までは……」

「わたしはてつきり、二人で密会しているものだと思っていた」
シラギが小声でからかうと、やめてくださいよ、とカグラが眉を歪めた。

カガミは酒場の裏手に入った。黒ずくめの男と何か話している。シラギたちは耳を澄ませたが、酒場の喧騒が邪魔をしてよく聞き取れない。

「宰相さまが…次の…」

「…王女さんは…」

目を凝らして相手の男を見る。知っている顔だった。

「前の男とは違う」

横でカグラが小声で呟いた。

「あれはわたしの部下だった者だ。ということは宮廷内の者か」
その内男が走り去った。カガミは近くの樽に腰掛け考え事をする。

「何を企んでいるのだ」

シラギの声に、丸いオヤジは文字通り飛び上がった。

「ななな何で君たちがここに」

「夜風に当ろうと外に出たら見知った影が見えまして」

「一人酒場で飲む気だろうとつけてみたら何故かこんなところに」

そらとぼける黒と白にオヤジは汗をかきながら

「えへへ、そうなんだよ。あれじゃあ足りないからさあ。君たちも

どうだい、奢るよ」

目を泳がせた。

「それよりも今のお話が気になりますね」

「ゆっくりお聞かせ願おうか」

「あなたの奢りで」

カガミは両側からがっしりと掴まれ、酒場に連行されて行った。

「舞台とは税のことだったのか」

「シヨウギではなかったのですね」

「提案したのは宰相でも、許可したのはシヨウギだろう。ほらあの

女は何も分かっちゃあいないからさ」

税を上げて民の不安と不満を募らせる。それは当然シヨウギへと向

かう。国王が臥せており、色町上がりの女が実権を握っているの

は民も知っている。アナンの言うとおり、民は概ね誰が国王であつ

ても無関心だ。しかし、生活が苦しくなれば無関心ではいられない。

「そこに王女が立ちあがったと噂を流す」

カガミが声をひそめながら言った。

「噂じゃないね、現にリウヒくんは王に立つと宣言したのだから」

国王を利用し権を意のままに操る女に、迫害された王の血をもつ少

女が立ち向かう。民衆の大好きな勸善懲悪。しかも王家絡みの。

「その筋書きを描いたのは誰ですか」

「この男だろう」

呆れたようなカグラの問いに、シラギがため息をつきながら答えた。

目頭を押さえる。知りたくなかった。もう知らぬ振りはいしまいと決めたのに。

「それで王女は民衆と共に立ち上がり、めでたしめでたしですか」カグラもため息をついて壁にもたれた。

「すべてはこれからだけだね。大学の後押しもあるし」

「大学まで絡んでいるのか？」

なぜ学問の最高権威までが。

「宮廷に居を移しても、繋がりはあるからね。ぼくだけじゃないけど」

まさか。

「宮廷の講師陣も……」

老師タイキ。老女ジユズ。あの二人も茶番に関わっているというのか。

「そうだよ」

あっさりとカガミが頷く。シラギは目眩がしてきた。

「分からないね、なぜそんなに驚くんない」

カグラも同様なのだろう、額に手を当てて深い息を吐いた。

「あなたは、こんな事をして何も思わないのか」

シラギの怒りさえ含んだ声にカガミが首をかしげる。

「そんな事を言われるとは心外だね。いいかい。目的は君と一緒にだよ。王女を王位につける。ただし、勢いが必要だ。それをぼくたちは作り出そうとしているだけだ」

目的は確かに一緒だ。だがしかし。

「歴史の流れが今まさにここにきているんだ。その流れを方向付けたいと思うのはそんなにいけない事なのかい」

「国は、人間は、あなたたちの玩具がんぐではない！」

ほとんど叫ぶようにしてシラギは怒鳴った。カグラが袖を引いても無視をした。

「ぼくたちが道をつくる。君たちが王女の手を引いてその道を辿る。最後に宰相の用意した舞台上で踊ってもらおう。これが最高の筋書きな

んだ」

カガミも吠えるように応じる。酒場の喧騒が一瞬静まった。二人の男は睨み合う。

その時。

「見事な脚本だな」

低い少女の声が出た。三人は弾かれたように振り向く。

腕を組んでこちらを睨みつけるリウヒが立っていた。顔は怒りの為赤くなっている。その後ろではトモキが青い顔をして立っていた。

「トモキさんをあきらめるのは、よそうと思って」

キャラは酒に口をつけながら言った。不味い。薄く割った果実酒のほうがよくばどおいしい。なんで大人たちはこんなものを喜んで飲むのだろうと口を尖らせたなら、じゃあ飲むのをやめなさいと取り上げられた。

宿の部屋にはキャラとマイムの二人だけだ。最初にカガミが夜風に当たると言って消えた。次にカグラとシラギが厠へと立った。その後すぐにリウヒがわたしも、と言って出て行った。トモキが心配そうにその後へと続いた。そしてみんな帰ってこない。マイムに聞いたら「腹でも下しているんじゃないの」と笑われた。

「今日、さびれた村に行つたでしょう。その時思い切つて聞いてみたんです」

リウヒが好きなのかと。

トモキは驚いた顔をしてキャラをみた。

「よくわからない」

その後、海に視線を移した。

「大事なものは確かだけど、恋とかそういうのじゃないと思う。多分」
キャラも、何か引つかかるものはあった。つき合い始めと言つもの

はもっと、見るのもうっとおしいほど二人の世界に入っているものではないのか。しかし、あの二人にはそういう気配はない。意外なほどあっさりしている。リウヒはトモキに対して、妹が兄に甘えているような感じだし、トモキはまるで過保護な兄のようだ。

「そうねえ」

マイムは猪口を手のひらで回しながら相槌を打つ。

「あの二人はどちらかと言うと、兄妹愛に近いかも」

「ふうん」

大人のマイムがそう言うならそうなのだろう。ならば、自分にもまだ機会はある。^{チャンス}

それにやっぱり。

キャラはトモキの横顔を思い出した。駄目だ、やっぱりこの人が好きだと思った。あたしの恋は結構しぶとい。

「まあ、それから発展することもあるから何とも言えないけど？」

からかい口調のマイムに頬を膨らます。

「なんにせよ、あなたたちがうらやましいわ」

「波止場でもそう言っていましたよね。どういう意味なんですか」

本気でない恋もあるのだろうか。

「あるのよ」

マイムは髪をゆっくりあげた。金色の髪はさらさらとこぼれて行く。

「これから知っていくのかもね。まあ、知らない方がいいけど」

意味深な言葉にキャラは首をかしげる。ふと窓の外を見ると、夜空に星が輝いていた。

そういえば、一番星に願掛けをしていた時もあった。今は全くしなくなつた。待つのはもうたくさんだ。ただ押すのみ。

キャラの心を読み取ったように、声がした。

「あんまり好き好き押しすぎない方がいいわよ」

「どういう事ですか」

マイムは目の前の酒瓶をとった。全部飲んでしまふ気がする。

「よくいうじゃない。押しでもだめなら引いてみなって」

キヤラは居住まいを正す。
「詳しく教えてください」

「詳しく聞かせてもらおうか」
リウヒがカガミの顔を覗き込んだ。
「今言ったことが全てだよ」

少女の眼光にオヤジが後すざりをしながら答える。
シラギとカグラは固唾をのんでそのやりとりを聞いていたが、トモキはまだ混乱していた。カガミがそんな事を思っていたなんて。信用していた。信頼していた。それがすべて崩壊する音が聞こえた。しかし、何となく分かる気もした。

カガミは歴史学者だ。そして宮廷にいた。混乱があつて、ずっと王女の近くにいた。その王女を守るために同行している内に、道を作りたくなつたのだろうか。歴史に残る道を。

「お前はわたしを傀儡の王にするつもりだったのか」
「そうならない為にも、色々な所を見せてきたつもりだったけどね」
皮肉まじりの言葉をリウヒは信用してないようだった。

「大学はどう動くんだ」
「都に上る王女の護衛として参加する」

「その数は？」
「三百ぐらいかな」
「ほぼ全員ではないか」
シラギが声を上げた。

リウヒが何か考えるように一点を見つめ爪を噛んでいる。
「今君が一人で都へ行っても、誰もついてきやしないよ。せいぜい今まで一緒にいた仲間くらいだ」

カガミが開き直つたように言う。その言葉にトモキはムツとしたが

正論だった。

「確かにな」

リウヒもため息をつく。

「だからぼくの言うとおりに……」

カガミの声を無視して、リウヒは椅子をたった。

「兄さまに協力を仰ぐ。邪魔したな。ゆっくりしていけ」

一気に言うと、そのまま酒場を出る。トモキが追った。シラギとカグラも席を立つ。カガミはしばらくその後ろ姿を見ていたが、腰を上げて一行の後を追いかけた。

アナンは幸いな事に隠れ家にいた。リウヒたちの一行を覚えていた、海賊たちが歓迎の声を上げる。その一人が頭領の部屋に通してくれた。

「こんな夜更けにどうしたんだ」

リウヒが説明した。トモキとシラギ、カグラも補足した。カガミが反論する。

それをアナンは真面目な顔で聞いていた。

「なるほどね。筋書きは実に大衆向けだ。世間は喜んで王女を担ぎあげるだろう」

「わたしは不服だ」

リウヒは慚然とした。

「でも今の君にはなんの力もない」

少女はうなだれた。

その通りだ。港の外れで何の力もない少女が、どうやって都の王座にたどり着けるといえるのか。

「だから、わたしが協力しよう」

視線がアナンに集中する。

「王女には貸しがあるしね」

にこやかに笑う元王子にカガミが皮肉を放つ。

「海賊って言うのは海にいるものだと思っただけだね。都は陸の

上にあるんだよ」

「残念ながら、わたしの船は空を飛ぶこともできるんだ」
全員が目を剥いた。

「なんてね」

肩をすくめて笑うアナンにリウヒが何だ違うのかと肩を落とした。

「冗談はともかく陸の上でも、我々は強いよ。なんたってわたしが育てた部下たちだから」

戸の向こうで「イヤッサーイ」と掛け声が聞こえた。また戸に張り付けて聞き耳を立てていたのだろう。

「それこそ冗談じゃないよ、海賊だけに王女を守らせてたまるものか」

カガミが体系に似合わぬ素早さで部屋をでた。扉を開けた瞬間、私たちの壁がなだれ込み、しばらくもみ合っていたがそのまま外に飛び出して行ってしまった。

「どこかに連絡を取りに行くのでしょうか」

カグラが冷静とした様子で言った。

「さて、リウヒ」

アナンは膝をおって、リウヒと視線を合わせた。こんな光景を見た事があるとトモキは思い出す。ああ、そうだ。昔宮廷で初めて声をかけてきてくれた時。

「君の気持ちは分かるが、あえて彼らの作った勢いに乗ってみないか」

「でも、民を騙しているみたいで……」

「騙している？ 違うね、今こそ民の協力は必要だ」

「リウヒはなぜ王に立ちたいと思ったんだ」

トモキが聞いた。以前この場所で、同じ所で、少女は王に立つと宣言した。

「最初は無関心だった。外の世界に出ても、宮廷には帰りたくない、このまま外で暮らしたいと思った。でもそれは逃げているんじゃないかと思った」

淡々とした声が響く。

「ここに来た時、兄さまは自分の居場所はここだとおっしゃった。それではわたしの居場所はどこだろうと考えた。それは」
リウヒは息を吸い込む。

「みんなのいる所がわたしの居場所だ。トモキ、シラギ、カグラ、マイム、キャラ、カガミ。みんながいてくれる所がわたしの居場所だと思った。だからそれが外でも宮廷でも王座でも、どこでも良かった。その時は」

全員が身動きせず聞いていた。戸の後ろの男たちも聞いているのだろう。

「その内税が上がって、あつという間に町が苦しくなった。仕事も貰える賃金も少ないし、物価はあがるし、宮廷に疑問をもった。わたしが上に立った方がまだマシな政治をするとも思った。さびれた漁村に行っただろう。人っ子一人いない村。恐怖だった。この国にこんな村があるなんて思ってもいなかった。自分がみんなに甘えて守られてのんびりしている間に、こんな村や町が増えて行くと思うと怖かった」

この子はいつの間にかこんなことを考えるようになったらう、とトモキは思う。

「国王崩御までなんて待つてられない、わたしは今すぐ王に立ちたい」

部屋に沈黙が降りた。

「お供します」

トモキがリウヒに跪礼をとった。この少女の為に、王座だろうが地の果てだろうがどこまでもついてやる。恋とか愛とか好きとか関係ない、それは一種の執念だった。

シラギもカグラも同じ礼をとった。そうしてくれた事に心から嬉しいと思う。

「分かった。よく分かった」

アナンが陽気な声をだした。

「すぐに動こう。準備に取り掛かる。愛する妹の為に一肌でも二肌でも脱いでやる」

そのままリウヒの肩を抱き、ずかずかと入口へと向かう。扉を開けて外にいた男たちに声を張り上げた。

「者ども聞け！ 我が妹を王位に送り届ける。武器を集める。言を流せ。このスザクの港に王女が立つと！」

「うおおう！」

男どもは歓声を上げた。

「イヤツサイイヤツサイ！」

「ゴジョウ！ ゴジョウ！」

その勢いにリウヒが足を踏ん張り、息を吐いたのが分かった。

分からない。民は喘ぎながら言う。

わたしたちが何をしたというのか。なぜこんなにも苦しまなければいけないのか。

穂は豊かに実つたというのに、税は上がり、物価も上昇、賃金は減少、役人は容赦なく取り立てる。必死になって働けば働くほど、暮らしは苦しくなった。

国王は、宮廷は沈黙したままだ。

あの女が悪い。と誰からともなく言い出した。あの女が王を誑かして国を傾けた。

その昔は、色町上がりで貴族を跪かせた天晴れな女と褒め称えたことも忘れて、民は怒りの目を宮廷に向けた。

国王は死んでいるのではないか、と誰かが言う。いや、幽閉されているそうだ、と別の声上がる。どちらにせよ絞られた税はすべて、女の頭を飾る簪や宝玉や衣に化けるのだ。

民のいら立ちが頂点に達した時、南のスザクに王女が立ったという

噂が流れた。宮廷からあの女に追い出された王家の少女だという。民は同情した、そしていきり立った。

その王女を助けてやろう。下賤の女じゃない、我々の王だ。民は声を上げる。

噂は港から町へ、町から村へ、そして都へと突風の如く流れた。

民は次々と武器を持って、スザクの港に集いだした。

宮廷に齒向かうために。立ち上がる王女を助けるために。何よりも自分たちの未来のために。

リウヒたちは、次々に集まる群衆の対応に大わらわになった。スザクの港は混乱状態が続いている。宿はすべて無料開放となり、酒場やアナンの船にまで泊まり込むもの、野宿をするものまで出た。武器や宿の金は、リウヒとマイムの隠し持っている金で補った。

「いい？ これは貸してあげるだけよ。王になったら倍返して返して頂戴」

マイムはしつこいほど念を押して、金を預けた。

キヤラは、海賊らの武器の買い付けに同行し、見事な手腕で値切っていた。カグラはその武器や防具を確認している。シラギは宮廷へ馬を飛ばし、リウヒは民たちの声を聞いている。トモキはそのリウヒを守り、カガミはあれからすっかり寝込んでしまった。医者は、無理をすると命に関わるといふ。マイムはカガミをつきつきりで看病していた。

リウヒが声を上げてから二日目の夜、シラギが帰ってきた。

「どうだった」

息せき切って尋ねるリウヒにシラギは首を振った。

夜、宿の一室。

「戦になる」

「詳しく」

アナンが身を乗り出す。他、リウヒらと各村町の代表者らしき男たちが集まっており、室内は異様な熱気に包まれていた。

宮廷側として王はいる訳である。寝台に臥せて表に出なくても、それに盾突くものはもちろん謀反になる、兵をだして討伐しなければならぬ。

「その王が出てこないから、色町上がりの女が牛耳っているんじゃないか」

そつだそつだと声が上がる。

「宮廷側の兵はどれぐらいいるのだ」

「約一万」

シラギが苦りきった顔で答えた。それはそつだろつとトモキは思う。昔の部下たちとこの人は対峙しなければならぬのだ。ほくだつてそつだ。宮廷を警備していた兵とは顔見知りの者が多数いる。

「こちら側は約五千……」

兵力も多く異なる。かき集められた武器はすべてに行き渡らず、参加する民の多くは鍬や鋤を武器として抱えている。上回るのは気概ぐらいだ。

「いや、こちらには大砲がある。わたしの船から出そつ」

アナンがほほ笑みながら提案した。楽しそつな笑顔。その瞬間、扉の向こうから大勢の人が立ち去る音が聞こえた。聞き耳を立てていた海賊たちが準備に取り掛かつたのだろつ。

「市街には傷をつけたくないという事で、セイリュウケ原で向こうと一戦交える」

スザクと都の中間に広がる原だつた。

「現国王がさつさと逝つてしまえば、事は円滑に進むのですけどね」カグラが不謹慎な発言をした。

「どうする、リウヒ。時期を待つかい」

「待たない」

リウヒが即答した。

「明日、夜明けと共にスザクを立つ」

部屋中が沸いた。みな異様な興奮状態にある。

「そつという訳で、今日は十分な休息をとつてくれ。もう夜は遅いけどね」

元王子が立ちあがつて声をかけると、現王女も立ち上がった。

「飲み明かすんじゃないぞ、二日酔いの奴は海に叩きこむ」

本気で言っているらしいリウヒに人々は声を上げて笑つと、そろそろと部屋を出て行つた。

「初めて宮廷に齒向かいました」

シラギが低い声を出した。すまない、とリウヒが言う。

「みんなの言うとおり、崩御後に都に入る方が円滑に行くのは分かっている。でもそれがいつになるか分からない中、手をこまねいて見ているのはどうしても嫌だったんだ」

「存じております。わたしたちは、あなたについて行くと決めましたから」

みな、頷いた。

「踊らされている事は腹立たしいが、今更引き返せないしな」

「結果、セイリュウケ原の戦です。軍を看破すれば、宮廷は王女に従うと。負ければ」

「殺されるのか」

「いえ、そこまでは。しかしアナンが存命だったことは、宰相には知られていました」

と言う事は借りにリウヒが死んでも、宮廷は元王子という保険があるのだ。

「カガミとマイム、キャラは安全な所で待機するように」

「分かったわ」

二人が頷く。

「カガミさんも連れて行かれるのですか」

「後生だから、一緒に連れて行けと言われた。死んでも構わないからと」

諦めたようにいうリウヒにシラギが言った。

「あなたもそこにおいておいてください」

「いや、シラギたちとでる」

全員が息をのんだ。

何をいつているんだ。この馬鹿王女。トモキは狂おしいほどの思いで息が止まりそうだった。

大切な少女が死ぬ事は絶望を意味している。

「もしもリウヒが死んだら、それこそ終わりなのを分かっているのか」

「分かっているからこそでる」

リウヒは冷静だった。

「シラギとカグラは先陣を切って攻撃しろ。宮廷軍で黒將軍、白將軍の名と実力を知らぬ者はないからな」

それに、と続ける声は静かなままだ。

「黒將軍は部下に大層慕われていたらしいな。そんな男に攻撃されてみる。心理的にも相手に影響を及ぼすかも知れん」

ほー、と間抜けな声が聞こえた。カグラが感心したように頷いている。

「自分の身ぐらい自分で守る。ただ一つ、命令だ。絶対に死ぬな」

シラギはしばらく黙っていたが、仕方なさそうに深い息を吐いた。

「あなたは…本当に我儘な方だ」

我儘な王女率いる民と海賊の集団、対宮廷の軍はセイリユウケ原で真つ向からぶつかった。

そしてあつと言う間に勝敗が決まった。

呆気ないというか、肩すかしを食らったような気分だ、とカグラは思う。

ほとんど、シラギの功績だ。スザクを発つ時から、他の者とは比べ物にならないほど殺気を放っていた。近寄ればその空気で殺されそうである。腰に剣を差し、槍を握って馬を操る姿は堂にいつていた。先頭を馬に乗ったりリウヒが切り、その後ろにシラギ、カグラ、トモキ、アナンが騎乗して順に続く。その周りに武器を持った民と海賊たちが取り囲んだ。

一行は次第に速度を上げてゆき、徒歩の者はほとんど全速力で走った。まるで大きな祭りのようだったとそれを目撃した村の女は言い、

また違うものは丘を越えて行進する様は大蛇がうねっているようだったと語る。

セイリユウケ原では宮廷軍が黒い鎧に身を包んで、構えていた。王女軍は勢いのままそこへ突入する。

リウヒは相手を確認するや否や声を上げ、その声を合図にシラギとカグラが左右から馬を駆って飛び出した。猛烈な勢いで駆けてゆく先陣を切って突っ込んでくる黒と白に、相手側は恐れをなしたように、弓を放ったが全く効かなかった。

あの時のシラギの後ろ姿は忘れられない。戦えることを喜んでいる様にも、やけっぱちにもみえたその男は、槍を後ろで一回転回すとかつての部下たちに、躊躇いもせず切りつけた。

同時に首が三つ飛んだ。

カグラも剣を抜き振りかざす。近くで爆発音が聞こえた。海賊の大砲だ。民や海賊も勢いに乗って狂ったように攻撃している。近くでリウヒやトモキ、アナンも応戦した。

しかし、一番際立っていたのはやはりシラギだった。その行く手では次々と血飛沫があがり、思わずカグラは魅入ってしまいそうになった。

混乱状態が続く中、不思議な現象が起きた。宮廷軍から次々と王女につくと声が上がリ、内輪揉めを始めたのである。それはほとんど広がっていき、いつの間にもやら、王女は全てを率いて都へ上がっている最中であつた。

マイムたちの馬がカグラに追いつく。

「妙に早くない？みんな怪我もほとんどしていないし」

「なんで宮廷軍も一緒にいるの？敵じゃないの？」

疑問だらけのマイムとキャラにアナンが答えた。

「黒將軍のお陰じゃないのか。兵たちは、敬愛する男に歯向かいなくなかったんだろ？」

へー。二人は声をあげてシラギをみた。黒將軍は苦虫をかみつぶした様な顔をしている。

都が見えてきた。民の中から声が上がり始める。それはだんだんと膨れ上がり、歓声に変わった。間に海賊たちの意味不明な掛け声も入る。宮廷の軍もその声に合わせて。快晴の下、彼らは進む。勝鬨の声を声を上げながら。歓喜の声を上げながら。祝福の声を上げながら。

民の声は本殿の奥まで聞こえた。次第に大きくなって近づいてくるのが分かる。

王の座に座っていたシヨウギは力なく扇を落とした。わたしが何をしたというのか。なぜこんなにも苦しまなければいけないのか。ただ、自分の守りたいものを守ろうとしただけではいけないのか。

誰を呼んでも返事はない。辺りには人の気配はなかった。愛しい息子もいない。

それでもこの部屋から出るのは恐怖だった。一步外に出れば、そこは恐ろしい世界が広がっているような気がした。だからこの椅子に座り続けている。座り心地の悪い王座に。ここに座っていれば、わたしは大丈夫だ。

根拠のない言い訳が頭をめぐる。だが、あの扉が開くときが自分の死ぬ時だどこかで分かっていた。竜が花や飛沫や風を従えて、天に昇る様を掘った黄金の扉が開くとき。

歓声がさらに大きくなる。

やめてくれ。誰かあの声を消してくれ。頭を抱えたその時。

扉が開いた。

硬直するシヨウギの目に飛び込んできたものは。

「カグラ！」

かつて愛した男が立っていた。二年前に自分の前から消えて、死ん

だと思っていた男。

王座を蹴って抱きつくとも男は優しく抱き返してくれた。

「可哀そうに、こんなところで怯えていたのですね」

低くて甘い声が耳に響く。

何も要らない。権力も贅沢も王座も何も要らない。カグラと息子と三人で暮らせたならそれで満足だ。

「もう大丈夫ですよ」

そうだ、もう大丈夫だ。座り心地の悪い椅子も、冷笑する臣下も見なくて済む。

しかし、この背中痛みは何なのだろう。いやに濡れていて冷たい。

「何も心配しなくていいのです」

カグラの声が遠くに聞こえる。

気が付いたら、気が付く間もなくシヨウギは床に倒れていた。考えることもできない。

ああ。

床の感触を感じながら思った。

私は愛する男に殺されたのだ。

意識はそこで消えた。

意識が遠くなりそう。

小声でこぼすキャラにもうすぐだから、とその腕をとって励ましながら長い階段を上る。かつて自分もここに来たとき、息も絶え絶えに上った。十年近くも前になる。リウヒと再会してからそんなに経つか。実感がなかった。あつという間に過ぎ去った時間。

目の前をゆく少女に目をやる。あんなに小さかった王女の背中が、今はこんなにも大きく見える。そしてこの階段は、王への道なのだ。トモキの頭の中を今までの思い出が走馬灯のように巡った。

初めて会ったのは、まだ髪の毛も生えそろっていない赤子の時だった。

にいちやんとトモキを呼んで、転がるようになってきた幼少時代。突然リウヒが消えた時の喪失感。

宮廷で再開した時の衝撃。暗く表情のない顔。

東宮での追いかけてこ。だんだん人間らしく成長して笑うようになった。

そういえばもうすぐリウヒの誕生日ではないか。

謀反あとは二年間も会えなかった。

港町で二度目の再会した時は、すっかり大人びてトモキの胸に飛び込んできた。自分がいなくても、回りに馴染んで笑い合っている姿にはかすかな疎外感と嫉妬さえ感じた。

本当にこんなに大きくなってしまった。

ぼくはいつだってこの少女の背中を見てきたんだ。

頂上に登り切り、リウヒが本殿の正門下に立つ。

絶えず続いていた群衆の歓声がさらに高まった。その民の多さに驚いた。下界を埋め尽くすほどの人があふれ返っている。その表情までは見えなかったが、声に喜びがこもっていることが分かった。

リウヒが居住まいを正した。

その後ろにトモキたちが一列に並ぶ。

背後に気配を感じて振り向いたトモキは声を上げそうになった。宮廷の宰相をはじめ家臣たちが一斉に跪礼をしていた。新しい王に向かって。シラギが膝を折つたのを始めとしてトモキらもそれに倣う。リウヒはそれを見て、静かにほほ笑むと民衆に向かった。

化粧もせず頭に簪もつけず、衣は所々破れていたが、佇まいはすでに王のものであった。

落ち着き払って両手を胸の前で合わせ、右足を後ろに回す。地が小さく鳴った。ゆっくりそのまま沈み右膝を付くと、静かに頭を下げ

た。

その瞬間。民の歓喜の声が衝撃となって襲ってきた。声にこれ程の迫力があるなんて知らなかった。トモキは踏ん張って耐えた。力を入れていないとよるめいてしまいそうだった。今、ティンエランの頂点に立った娘を、国民は声を上げて祝福した。輝かしい未来の希望と共に。娘への誇りと共に。その声はいつまでも鳴りやまなかった。

声は相変わらず聞こえる。目の前には女が倒れていた。カグラはその死体を見下ろす。可哀そうに。

心からそう思った。昔は嘲りしか抱けなかった女に同情する。この人も利用されているだけだったのだ。自分と同じように。父たちにそそのかされて、役目を果たした。本人は気が付いていただろうか。自分が豪華な生活と引き換えの生贄だったことに。

信じられない、と言う顔をして動かない女は口を開いたまま空を見つめている。自分の手で殺すことが、精一杯の供養だった。

もう、たくさんだ。美しい炎にまかれて消えた多くの命。宮廷を出た時は、あんなに爽快な気持ちだったのに、割り切っていたつもりだったのに、炎は夢の世界でゆっくりとカグラを苦しめた。

まるで復讐をするかの様に。

あの連中と一緒にいたからか。初めて人の中に入って生活し、心から笑った日々。ぶつきらぼうな王女と愉快的連中。

そして、父が隣にいた。共に太陽の下で汗を流し酒場で酒を飲んだ。幸せだったと思う。

しかし、心の比重はあの連中に傾いていった。駒として働く喜びは消え失せ、不満と憎しみが次第に増していくのが分かった。

ただ、振り向いて欲しかったただけなのに。見てほしかったただけなのに。

罪を犯した代償は大きい。

カグラはこれから、あの連中に自分がなした罪を知られる恐怖を抱えて生きていかなければならない。それが罰なのだろう。

マイムは知っている。が、あの女が吹聴するような性格ではないこともカグラは知っている。

シヨウギもそうだ。誰かにそそのかされて、役目を果たした。本人は気が付いていただろうか。自分が豪華な生活と引き換えの生贄だったことに。

信じられない、と言う顔をして動かない女は口を開いたまま空を見つめている。自分の手で殺すことが、精一杯の供養だった。

王座の横で音がした。顔を上げるとシヨウギの息子がいた。真っ青になって立っている。

この子も犠牲者なのか。

ただ、王の愛人の息子と言うだけで、罪になるというのか。太った青年は、気丈にカグラの前まで歩いてきた。

「殺せば」

声は震えていたが、ほほ笑んでいる。

「いつか、こんな日が来ると思っていたんだよな」

だってぼくは王の血を引いていないし。

「母さまが西の果てで淋しがっているから、一緒に行つてあげなくちゃ」

冷たくなったシヨウギの体に触れる。

カグラはためらった。昔なら笑顔で殺せたはずなのに。

「殺せよ」

青年はカグラを見上げた。涙を溜めた小さな目で。動かぬ母の頭を膝の上にのせている。

ため息がでた。剣の柄に手をかけると、かちやりと音が鳴った。
「さようなら」

国王だった老人は死んでいた。豪華な寝殿で、誰にも看取られずに息を引き取っていた。

本殿の表に戻ると、臣下が新しい王に挨拶をしていた。脇にトモキたちが立っている。

さりげなくシラギの横に立つと、その耳に小声で報告した。

「前王はお亡くなりになりました。シヨウギは消しました」

「息子は？」

小声が返ってくる。

「遠くへ逃がしました」

シラギが疑わしそうな目で、こちらを見たが無視してやり過ごした。

「そうか」

それ以上何も言わなかった。

カグラは自分の手をじっと見る。全く自分らしくないと思う。

殺してしまえば、あの子の為だったかもしれないのに。

新王誕生後

家計の為といって、二人にくつついてきたけれどまさか本当になるなんて。

シシの村の家族を思い出す。手紙は書いたから元気でやっている事は伝わるだろう。

キヤラは宮廷の侍女として働き出してから忙しい毎日を送っている。同僚も友達もできた。まだ見習いの身だけれど、いつかりウヒの近くに行ければいいと思う。リウヒは王になってからすっかり遠くなってしまった。シラギやカグラ、その他大勢のおじさんたちに囲まれて、必死になって政務をこなしているらしい。

トモキは相変わらずリウヒのそばにいる。たまに食堂であう。

「乱暴すぎるんだよ」

目の前に座った想い人は、ため息をつきながら愚痴る。

「宮廷の知識がなくて外の知識はあるだろう。だから宰相さまたちとなかなか話がかみ合わなくて、シラギさまたちが通訳してるって感じ」

キヤラは箸をくわえたままキョトンとした。

「でもそれは、陛下が民目線で考えているってことでしょう」

やっとリウヒの事を陛下と言えるようになった。今でもうつかり呼び捨てにしまいそうになる。

「いいことじゃないの」

「いいことだよ、いいことなんだけどさー」

そのままズルズルと突っ伏した。

しばらくキヤラは食事を続け、トモキも疲れたように突っ伏したまままだだった。

この空気が懐かしい。みなで旅をしていたあの日々の空気だ。

「もう無理だけど」

しみりした気持ちになって茶を啜った。

「みんなで、また旅をしたいなあ」

リウヒたちと過ごした二年が愛おしい。

ふと目の前をみると、トモキが腕の間から片方だけ顔を持ち上げて、こちらを見ていた。

この距離でその顔は反則だと思う。

「な、何よ」

「陛下にそれを言うなよ。諸手をあげて駆け出していきそうだ」

キャラはため息をついた。あたしのときめきを返せ馬鹿。

「言えるわけないじゃない。あれから全く会えないのに」

あたし、いかなきゃ。お先に。と席を立つキャラをトモキが呼び止めた。

「また一緒にご飯たべような」

いいよ、と答えて出口に向かう。平静を装って。

本当は叫びながら走りだしたかった。すれ違う人たちに抱きついてグルングルン回したいくらい舞い上がった。ああどうしよう、世界が輝いて見える。

食堂をでたキャラに同僚二人が両脇を挟むように走ってきた。

「なんで、陛下付きのトモキさまがキャラといたのよ」

「何話していたの？ ねえねえ」

騒ぐ友人にキャラはただ笑うだけだった。

マイムは笑えない状況に陥っていた。

謀反前、自分が在籍していた時は、数少ないとはいえ厳しい先輩や上司がいた。踊り子という仕事に誇りを持っていた尊敬できる人たち。その人たちがごっそり消えていた。

それは仕方がない。亡くなった人がいる。あの混乱時に己の意志で外に出た人もいる。当時のマイムのように。

しかし、残った娘たちはという。

「だって、ほとんど宴がなかったんです」

「誰も何も言わないから、どうしたらいいんだろうと思ってえ」

何もしていなかったという。数も半分ほどに減っていた。

呑気な顔の後輩たちに、マイムは頭を抱えた。

どうするっていうのよ、新王誕生の祝宴はあと十日に迫っているっていうのに。なんで残っているのがこいつらだけなのよだれか助けてよ。

この祝宴は新王にとって、大切な日に設けられたらしい。誕生日とかいう聞いたことのない事を言われたが、思い出の日か何かなのだろう。失敗は許されない。

「楽師を呼んで」

いやいや、まずは見てみなければ分からない。中には見事に舞うものだったはずだ。

楽師たちがやってきた。こちらはまったく顔ぶれが変わっていない。少しうらやましく思った。彼らはマイムに挨拶と、同情的な視線を送る。

「祝祷の舞を」

曲が流れる。稽古場に散った娘たちは音に合わせて、ぎこちなく動き始めた。

これは…何？

マイムは愕然とした。

お遊戯？村の祭り？それともあたしは幻想でも見ているのかしら。

「止めて。次は絢爛の舞を」

基本中の基本である。これなら何とかなるかもしれない。祝宴には王に立ったりウヒはもちろん、シラギヤカグラ、トモキも参加する。愛すべき少女と、あの愉快的連中の前で恥をかく訳にはいかないのよ、絶対に。

再び曲が流れ始める。さすがに優雅に踊り子たちは舞い始めたが、到底納得いく出来ではなかった。

静かに怒気を発している先輩に踊り子たちは、びびった。楽師さえも気おくれした。本気で怒っている美女は相当な迫力である。恐れと緊張が支配する空気の中、マイムが低い声を出した。

「全員、徹底的な指導が必要ね。それ相当の覚悟をなさい」
娘たちは青くなった。つられて楽師たちも青くなった。

カガミは北寮の一室にいた。いつも赤かった顔色は、ここのことろずつと青い。

宮廷の医師に長くはないと言われた。本人に伝えたと、分かったと頷いただけだった。

「お加減はいかがですか」

「うん、今日は大分いいよ」

ゆっくりほほ笑むカガミの前に、カグラは腰をおろす。

「みんな、見舞に来てくれるんだ。この間は陛下も来てくれた。すぐにトモキくんに引きずられていったけど」

「そうですね」

スザクの港を発った時から、カガミは病体に鞭を打ってみなにいつてきた。死んでも構わないと言った。リウヒが王になる瞬間を、どうしても見届けたかったのだろう。

そして王女は、新王となり民の祝福を受けた。少女の後ろで、さぞかし誇らしく思ったに違いない。この歴史の道を残した自分を。

「あの上意の礼は最高に美しかった」

カグラの心を読んだように、カガミが静かな声で呟いた。

「父さん」

目の前の父は、窓の外をぼんやり眺めている。

「どこからがあなたの筋書きだったのですか」

アナンを外に出したのも、この男たちの手引きだったのか。あの時、元王子はシラギではなく、その後ろを見て語っていた。カガミは一言も発しなかった。それだけではない、そもそもシヨウギを宮廷にいられたのは。あの謀反は。もしかしてそれ以前から。

聞いても無駄なのは分かっていた。タイキとジユズは騒ぎ以降、行方が知れない。この男も宰相も、一切何も話さない。それでも聞かずにおれなかった。

やせ細ったその後姿を眺める。物心付いた頃に母が亡くなってから、ジユズの元に預けられたカグラは、全ての教養と知識、剣術まで叩き込まれた。父は一度も顔を出さなかったし、幼いカグラも自分が傷つかないよう、全てを遮断する知恵を付けていた。

だから、今までずっと一人だった。

横に誰かがいても、所詮は駒か愛玩物だった。いや、そうだろうか。ジユズに母を重ねたこともあったし、シヨウギも捻じれてはいたが自分を愛していた。父であるカガミも、カグラを信用したからこそシヨウギの下に付けたのだろう。

だが人間として見てくれたのは、ぶっきらぼうな王女とその一行だった。興味本位でついに行ったそれが、まさか夢のように楽しかったとは。

肩が凝るほどやらされた刺繍、丘の上から見たティンエランの都、賑やかな町、果てしなく広がる海、港町、廃れた漁村、酒場、踊り子の歌。

初めて人の中に入って生活し、心から笑った日々。

しばらく沈黙が流れた。

窓の外を見ながら目の前のぼつりと父が言った。

「歴史を変えてみたかったんだ」
ただそれだけだ。

そして、父は疲れたように目をつぶった。

「もう気は済みましたか」

不思議と怒りは湧いてこなかった。

「うん」

カガミは目を閉じたまま、ほほ笑んだ。

「満足だよ」

鏡の部屋を出たカグラは、シラギと遭遇した。どうやらカガミを見舞うつもりだったらしい。

「今しがた、寝たところですよ。出直された方がよいでしょう」

「そうか」

ついでに目を通しておいてくれと手渡された資料を見ながら、肩を並べて歩き出した。

「陛下は大学だけでなく、民間より試験制度を設けて採用すれば良いと言うが、大臣たちが猛反発して……。どうした」

思わず笑ってしまったカグラに、隣の男が不思議そうに言葉を切った。

それは反発するだろう。下官の者ならともかく、上官は貴族の血で固められている。そうでないのはおれぐらいだ。

リウヒはそのままカグラを左將軍に任命した。中には不満を漏らす者もいたが、王は涼しい顔で言い放った。

「では右將軍から一本奪った者がいれば、その者に任せよう」

あの時の臣下たちの顔は傑作だったと、シラギは笑う。この男はカグラの生い立ちを聞いてこない。正直に話したらどんな顔をするだろうか。

「何をしているのだ、あいつは」

シラギの声で顔を上げる。みればトモキがこちらに向かって走ってくる。

「へ、陛下みませんでしたか？」

カグラとシラギは顔を見合わせた。

「こちらにはいらっしやいませんでしたが」

「脱走癖が再発したのか？」

いえ、今日の政務は終わっているからいいんですけど、気が付いたら消えちゃって。と息を切らしながら言う。

「先に東宮に帰っちゃったかな。すみません、失礼します」

勢いよく頭を下げるとトモキは身を翻して再び走り出した。

「……これからは本殿で国王とそのお付きの追いかっこが繰り広げられるのですかねえ」

「……やめてくれ、想像がつき過ぎて目眩がする」

そのまま北寮をでようとすると、侍女見習いの集団にかちあった。知っている声がする。

「シラギさん、カグラさん！」

キャラが少女たちをかき分けてきた。

「お久しぶりです、元気でした？」

元々活気のある少女だったが、さらに気力が増しておりシラギは引いた。カグラは微笑している。

「あなたもお元気そうで。一段ときれいになって驚きましたよ」
「キャラと少女たちから声が上がった。」

「へへ。頑張つて早くリウ…じゃない、陛下のそばにいくんだ」

じゃあね。集団に戻ったキャラを黄色い声を取り囲む。まるで餌をねだる小鳥のような騒がしさだった。段々遠くなっていく。

「まだまだ、侍女にはほど遠いですね……おや、大丈夫ですか」

「鼓膜が破れるかと思った」

少女特有の高い声に辟易したようにシラギが言う。

「一人だと、そんな事はないのですけど、集団になると怖いものなしになりますからね。女性は。気を付けた方がいいですよ」

「ありがたいご忠告痛みいる」

「どういたしまして」

北寮を出て橋を渡る。日が傾き始めた。

「税はあつという間に元通りになりましたね」

「元々宰相の企みだった訳だしな」

昔と変わらず黒一色を纏う男は、陛下は複雑な顔をしていたが、と
呟いた。

「これをもう少し詰めたいのですが、お時間がありますか」
カグラが資料を振った。

「わたしの部屋で話そうか。茶ぐらいだそう」

「黒將軍は意外と無粋ですね。日も暮れかけているのに茶ですか」

「お前、仕事をしながら飲む気か」

「先に片づけてゆっくり飲めば良いでしょう」

北宮の前を通った時、マイムとすれ違った。

「あら。二人仲良くどちらへお出かけ？」

この女は、やはり宮廷にいる方が合っているのかもしれない。緋色の衣に、よく映える金色の髪をゆるく結って、簪を二本差している。今度、簪を贈ってみようか。どんな顔をするだろう。

「黒將軍とお仕事ですよ」

「どうせ、それが終わったら飲む気でしょう」

なぜ女はこういう時、妙に勘が働くのだろうか。

「へーえ、男二人でわびしく酒盛り。ふーん。へーえ。ほーお」

「よかつたら一緒にどうぞだ」

そう言うしかないよな。カグラは横で苦笑した。

するとマイムは一転、花のように笑った。

「あら、いいの？ じゃあ遅れて参加させていたたくわ」

シラギの部屋にいけばいいの。どこよそれ。うっわーいい所に住んでいるのねえ。

ひとしきり聞いた後、さらに笑顔で宣言した。

「今日はあかし、絡むわよ。叫ぶわよ。泣くわよ。覚悟しておいてね」

一瞬目が光ったような気がして、將軍と呼ばれている男たちは後ずさった。そんな二人には目もくれず、マイムは軽やかに去って行ってしまった。

「嫌な事でもあったのでしょうか」

「酒癖は悪くなかったはずだが」

呆然とその後ろ姿を見送っていた白と黒は再び歩き出す。かつて西宮が建っていた場所に出た。宮は跡形もなく園になっている。

「焼け跡から遺体は出なかった」

シラギの声にカグラは顔を上げた。

「なあ、カグラ」

思わず構えた。あの謀反の事を出すのか。おれはただ駒として働いただけだ。どこからかそんな言い訳が聞こえる。

「あの筋書きはどこから始まったのだろうか」

「カガミさんのことですか」

安堵して小さな園をみる。

「シヨウギが後宮に入った時からではないのですか」

「それ以前からだとしたら」

シラギは歩を止めて、遠くを見た。カグラもその先をみる。眼下に広がるティエンランの城下。

「憶測でしかないが、聞いてくれ。大学は宮廷に深く関わっている。もしはるか昔からティエンランを盤とし、民や王族を駒として動かしてきたとしたら」

「……あり得なくはないですね」

王族の教育者は大学の講師。上官は大卒で固められている。

「天を気取る連中が現れても不思議ではないでしょう」

だが新王は素直に動かないだろう。外の世界を垣間見た少女は。

「そこから、さらに憶測なのですが」

カグラは目線を城下に落としたまま言う。

「カガミさんたちは連中の筋書きから、わざと逸れたのではないですか」

大学の作る本流から逸れて、違う流れを方向付けた。

「歴史というものは、川のようなものだ」

カガミの声がよみがえる。

「月日という雫が積み重なって、濁流となり海へ流れている。その

流れを変える力を持っているのは、他でもない、君たち若者なんだよ」

無限の可能性を秘めている君たちなんだ。

「新王やわたくしたちに未来を託したのでしょうか。自分たちの可能性を試したかったのでしょうか。それともただの偶然でしょうか」
シラギは息を吐いた。あのタヌキめ、と呟く。

「いずれにしろ真実は分らん。他の二人は見つかからないし、タヌキや宰相はこの件に関しては一切口を開かぬ」

「陛下も何か、気が付いてらっしゃるのかも知れませんが」

だからこそ民間からの採用などを言い出したのかもしれない。しかし臣下は、大学は黙ってはいまい。最悪、新王を消そうとする可能性すらもある。

「全力で陛下を守るぞ。お前もついてこいよ」

「もちろん」

シラギが踵をかえした。カグラもそれに続く。

鳥たちが澄んだ声で鳴きながら、空を横切りねぐらへと帰って行った。

最終章 夕暮れ時再び

空が茜色に染まり始めた。

トモキの足はまっすぐ東宮に向かう。普通、王は政務も居住も本殿で行うものだ。しかしリウヒは毎日東宮から本殿に通って政務をこなした。

東宮の部屋に戻ると、夕餉の支度をしていた女官たちが声を上げた。あの三人娘である。再会した時、女官たちとリウヒ、トモキは手と手を取り合って喜んだ。この部屋の空気は、昔と同じままだ。

リウヒはいなかった。探してくる、と告げてトモキは外に出た。

その後ろ姿を見ながら三人娘はほほ笑んだ。

「昔と変わらないのね」

「本当に仲のよらしいこと」

「早く準備してしまいましょようよ」

もうすぐ腹を空かせた王と口うるさいお付きが帰ってくる。

探していた少女は、東宮の小さな庭に立っていた。ティエンランの城下を見下ろしている。その後ろ姿は妙に静かで、結った藍色の髪や裾が風に揺れていた。簪の飾りが小さな音を立てている。トモキは文句を言おうと開いた口を閉じた。声をかけられない。

「トモキか」

リウヒが口を開いた。

「タイキとジユズは、まだ見つからないそうだ」

そうですか、とトモキは答えた。

帰ってきてほしいな、カガミも。とリウヒが呟いて小さく笑った。心が絞られるような悲しい声だった。

王女を愛してくれた教師たち。だからこそ彼女を王にしようとしたのか、それとも唯の駒だったのか。カガミはこのことに関して、何も語ってくれない。前者であってくれればいいと切に願う。

「トモキ」

目線は城下に注いだままだ。

「わたしは王と言うものは、何でも命令できるものだと思っていたよ」

もちろん国務はそんなに甘いものではなかった。リウヒは日々臣下たちと喧嘩をしている。王は臣下たちの言っていることが分からない。臣下たちは王が言っていることが分からない。シラギとカグラが中間地点に立って通訳と調整をしている。この二人がいなければ、政務は機能しないという情けない状態なのだ。

「もしかしたら先王は国務に疲れ果てて、シヨウギに逃げたのかもしれないな」

そうかもしれない。国を動かすのは生易しいことではない。それでも王は責任がある。逃げることは許されない。

「もし陛下が逃げたりしたらトモキはにつこりとほほ笑んだ。

「必ずぼくが追いかけて捕まえますから。お覚悟しておいてくださいね」

ぼくだけじゃない。シラギさまやカグラさま、マイムさん、キャラもいる。カガミさんも早く治してもらって一緒に。

リウヒは声を上げて笑った。

「ならば、海を渡って逃げてやろう。兄さまもいることだし」
無然としたトモキを振り返る。

「みんなが追いかけてくれるのだろう。楽しそうじゃないか」

「陛下」

冗談だよ。とリウヒはクスクス笑う。

「ここがわたしの居場所だ」

そしてトモキに近づき、その手を取って歩き始めた。

「にいちゃん」

驚き足を止める。気が付いていたのか。分かっていたのか。知っていたのか。いつから。

リウヒは相変わらずクスクス笑ったままだ。再び手を引いた。

トモキもつられて笑ってしまった。

「早く帰ろう。腹が減った」

「そうですね」

今日の夕餉はなんだろう。菜飯じゃないといいけれど。笑いあう二人は手を繋いで東宮へと向かう。

陽は遠く西へ傾き、歩く二人の影を間延びして落としていた。

最終章 夕暮れ時再び（後書き）

はあ、やっと第一巻終わりました！

ご感想、誤字脱字のご指摘等ありましたらご一報いただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5566o/>

ティエンランの娘

2011年5月10日12時58分発行